物を懐に入れ、今日吉日なり、時も吉時なりといへば、利家汝功者なり、頓て打勝賞美すべしと快げに打出で、勇み進んで押行かれけり。村井不破先陣、原、隠岐、前田又次郎、片山内膳二陣、田野村三郎四郎、青山與惣兵衛、近藤善左衛門、前田慶次郎押續く。宮川但馬武者奉行たりといへり。川尻のこなた一里計高松といふ所にて、利家冑を取つて著、忍びの緒の餘りたるを切つて捨てられしかば、さては今日を限りの軍よと、人々生きて歸るべしとは思ひもよらず。篠原勘六とて利家の近習の士二十三に成りしが、横根を煩ひ起臥も心に任せず。されども是非打立つべきとせしを、汝は殘り留りて、吾討たれなば堅く城を守りて秀吉の後卷を待候へ。叶はずば其時腹を切れと下知せられしかば、殘りけるが、乘物に乘り與力の士二十騎打具し、川尻近く成つて馳付、篠原勘六參候ひぬと大音に呼はりければ、是を聞く人々天晴剛の者なりと云あへり。川尻よりは津幡に人を付けてうかがはするに、馳歸りて前田父子津幡まで出でたれども、後卷有るべしとは見えずといふを聞きて、神保は大に備をゆるめけり。利家先陣に乘行きて、村井不破に濱際を一騎打に馬の舌を卷かせ、いかにも靜に押通れと下知せらる。神保は兵を押出し待ちかけたりと物見の言ひしかば、又富田越後此時六左衛門と云へり を物見とせらる。馳歸りて敵は一人も候はず。川の杭の多く候を、人と見誤りたるならん。とう〳〵押せられ候へと申す。利家川杭とは何を證にせんと問はるゝに、越後されば候、武者ならば並の揃ひ候事有るまじと存じ、猶も慥に見ん爲に、川中まで馬を打入れて心靜に見て候。

是を見損じ候程ならば、再び弓箭は取るまじと申す。利家汝が見る所こそ正しけれ、士の手本にせよと悅ばれけり。偖兵を進めて押通るに、神保是をば夢にも知らず、後れて聞付たれ共、利家は今濱といへる右の上なる山に兵を押付陣せられしに、夜明けにければ利家馬を乘廻し、兵粮を遣ひ候へ、今日の軍勝つべき事心易かるべしと下知して、みな馬より下りたり。爰にて見れば、利長七八百計兩先陣千三百計、旗本千五百には過ぎざりけり。利家けふの軍に功名せん輩は、取分けて賞すべし。若討死せば、必子孫を見放すまじと高らかに下知せられ、夫より山を下りて兵を進むるに、道二筋有り。一筋は末森の道、一筋は成政旗本への道なり。村井坪井山へ押寄せ、成政を孱にせんと申す。利家聞きて、尤なれども、成政必嶮を前に當てゝや陣すらん。只末森へ馳付敵を追崩し、城中の者共に力を付けんはいかに。村井承り可〻然候。城中の士ども只今の仰を承り、さぞ辱からんといへり。程なく末森近く押詰めたれば、村井が者共餘多首を取來る。末森には二の丸に籠りたる千秋主殿助、瀧津金右衛門已下寄手攻入るを追出し、力の限り戰ひけるが、討死餘多に及べり。本丸も既に危く見ゆれども、奥村助右衛門少も氣を屈せず、支戰ひける處に、砂山に當りて朝霧の晴間に利家の馬印見えしかば、力を得勇み悅ぶ事大方ならず。今少し後卷遲かりせば、城陷るべきに、運を開きしは、偏に利家迅速の兵機を得られし故なりけり。村井又兵衛、田野村三郎四郎を始として槍を打入れ散々に戰ひけるが、成政先陣の大將佐々與左衛門を村井突伏せければ、士三十餘

人枕を並べて討死す。利家の先陣佐々を討取り、関を作りかけ切崩せしかば、寄手敗北しけるを、利家見て搦手へ廻られけり。寄手にも究竟の兵餘多有りて待ちかけたれば、利家旗本五十騎ばかり静にかゝりける所に、半田半兵衛眞先に進み、一番槍と名乗りける所を、櫻井助鐵砲にて撃ちたりしかば左の手に當り、槍を抱きて倒れたり。半兵衛と甚介は從弟なりしが、指物にて見知りける故、甚介も半兵衛ながらへずば、不便なる事をしたるよと、涙を流しけると、後には聞えけるとかや。

利家敵の鐵砲烈し、延々にせば叶ふまじ、たゞ懸りて追崩し候へと、金の切裂の采配を取て下知せられしかば、會釋もなく競ひかゝりて押崩す。寄手餘多討たれて敗北せしかば、金澤の士勝関をどつとぞ上げたりける。利家城中に乗入りて、奥村をはじめ詞をかけ、今度籠城の働言語の及ぶべきにあらず。利家いかにおもふとも、汝がいひ甲斐なくて城を明くるか、又攻落されなば口惜かるべきに、かゝる功名やあるといさめ立てらる。其時野村傳兵衛、山崎彦右衛門一度に槍を合せたりとて、一二の爭論せり。利家半田が眞先がけしたるに、冥加なく深手負、志を遂げざれども、勇士の志は顯はれたり。二士一同に槍を合せたれども、傳兵衛名乗りたれば、一番をば野村に極めたるぞと下知せられ、二人に千石の加祿を與へられけるとぞ。半兵衛は疵いえて、二千石與へ、士十五人與力に付けられけり。成政の旗本へも後卷のよし聞えしかば、さらば一軍せんとて、八千計押出す。利家是を見て、此勇る勢には百萬もあれ、恐るるに足らず、先陣は又兵衛せよ。二陣は城主なれば奥村、三番は不破彦三と定められけり。能州の國士長九郎左衛門四五百計にて馳來る。敵味方分明ならねば、物見をやるに長が兵なり。遲く馳付きつる事口惜しき事也。弓箭の冥理に盡きたりと憤りけるを、物見の脇田善左衛門、野村七兵衛聞きて馳歸りて具に申せば、利家長を感ぜらるゝ事大方ならず。皆とり〴〵に長が志を褒立つれば、努々後れたるに非ず、淺からざる譽なりと誓紙を添へたる書を長に與へられたり。成政いかに思ひけん、打出でたる兵を引きまとひ、山に添ひて引退く。折しも武者修行して來り居たりし本多三彌は、無二無三にかゝりて成政を討取るべきにと云ひけれども、猛將の成政なればこそ、手輕く引拂ひたれと人々言ひしかば、付慕はずして止みにけり。討取りし首七百五十三とぞ聞えし。利家は成政城を攻落さず、空しく引返す事を怒り、引退く體にして、津幡の城へ寄せんも計り難しとて、奥村を城に止め、兵を數多指置いて末森を打出でられしに、追追に兵加はり一萬計に成りにけり。又不破村井を先陣として濱邊に指掛り、津幡に馬を入れられしかども、成政は津幡に押寄せずして引取りけり。佐々が軍兵金ののしの指物したれば、坪井山は輝きわたりて見えけるを利家打詠め、あはれ見事なる備立よ、頓て成政を攻亡し、我士卒に指さすべきよと言はれけるとぞ。秀吉此勝利を聞き、日本に比類少き武功と賞せられぬるとかや。利家奥村に其日持たせられし馬印金の切裂の采配、著られし甲冑を賜りて賞せられしといへり。

利家鳥越城を攻めらるゝ事

天正十三年四月八日、前田利家金澤を打出で鳥越の城へ押寄せらる。鳥越の城は金澤よりもと兵を入置きたるが、去年末森の時城を明退きて、成政の軍兵入り替り守りければ、利家是を憤りて攻落さんとの志なり。城兵も久瀬但馬守其外撰みたる者共五百計、門を開いて突いて出で、利家の先陣を追立つる。利家は傍へなる山の尾崎に陣して馬を立てられしに、味方敗北するを見て、山崎少兵衛は如何したるや、はや返すべき鹽合なるにと言ひも終らぬに、白き羽織にて進み出でたる者の候といへば、利家山崎出でたるよ、早味方勝つたるぞと言はれけり。旗本の早りをの者どもかけ出でんとするを、敵の勢競ひ懸りて足の踏止め難き時なり、今少し待候へと下知せらる。德山五兵衛只今槍を合せたると見えたり。地煙立候と言ひけり。然るに近邊の越中の兵城々より助來て敵の陣は黑けれども、山崎が與力鷲津九藏と名乘り槍を打入れたり。早懸られ候へ、左なくば九藏危しといへども、山崎靜れと云詞の中に、九藏倒れたるを見て、山崎進み出て、槍を打入れ押崩して城際まで追打にしたりけり。城兵門を鎖固めければ、利家强ひて攻めずして引返されぬ。此軍の前利家の近習の士九里少藏揚氣を蒙り居たるが、成政馬廻の將杉江彦四郎と組打して谷へ落ち組みしかれ、杉江刀に手をかけたる處を、下より少藏小脇指にて具足の鎖のはづれを刺通し、刎返しけれども氣つかれて首を取ることを得ざりしに、片山內膳が從卒來りて、少藏を押しのけ、相討と云ひて首を取りたり。利家細やかに事を糺明して少藏が功名に定り、勘氣をゆるし鞍置馬を與へられけり。

本多重次强諫の事

天正十三年三月、東照宮濱松の城にて疔を病ませ給ひ、近習の若き人に膿を强く押させ給ひしにより、痛甚しく、既に事切れさせ給ふと城下には申しける程の事なりけり。今はかうとや思召しけん御遺言を仰出されしに、本多作左衛門重次參りて先年臣を療養せし糟谷政利入道長閑が藥を付けさせられよと申しけれども、聞し召入れさせ給はざりしかば、作左衛門大に怒り、殿は徒に死し給はんよ。此作左衛門は年老いぬれば、只今自害して待ち奉るべしとて座を立ちけるを御覽じて、いかに作左衛門氣狂ひたるか、未だながらへたるに自害とは何事ぞ、吾なから門夫は人によりての事に候。若き時より幾度となき軍場に數ヶ所の手を負ひ、世の中の畸といふ畸は身一人にからげ候ひぬ。今日迄殿の御情にて人がましくも候なり。只今殿過ぎさせ候ひなば、北條を始として敵國攻め來らんに、殿に後れ奉り、果々しく軍する者や候べき。國は忽滅亡すべし。其時作左衛門は路の邊に餓死せん。ながらへたらば彼こそ德川家に奉公せし本多作左衛門よ、何を賴に存へたるなど、人に嘲り笑はるべし。近き頃は武田の內にて甘利殿とて人の敬ひたる人も、武田の運盡きぬれば、今は本多平八郎が組となり、かゝまり居るを見るも哀れなり。是は人の上ならず。勝賴の不道にて滅したるも、殿の藥をきらひ給ふも同じ理に候と申せば、東照宮尤なりとて長閑を召し頓て藥を奉り、炙を大にして作左衛門する奉りければ、夫より痛みやゝ輕くならせ給ひければ、作左衛門聲

を上げ泣いて悦びしとぞ。

秀吉東照宮に和を乞はれし事

天正十四年正月、秀吉、織田源五郎長益、羽柴下總守勝雅、天野作左衛門三人を使として、東照宮に和平を乞はれけり。三人歸りて和平思ひもよらず、重て來らば首を切らんと德川殿申されし由申入る。又かさねて三人を三河へ遣し强ひて和平を請はせらる。東照宮三河の吉良にて、左の手に鷹を据ゑさせ給ひて、三人に御對面あり。三人申しけるは、信雄卿の厚恩を忘れての事には候はねども、秀吉計略し、瀧川三郎兵衛に羽柴の姓を與へ下總守になし、神戸の城主とし三萬石の加祿し、其外數多都に妻子を置き、自ら人質と成り候ひぬ。さま〴〵の謀に候へば、此度和睦候はずは秀吉軍を出し、清洲にて勢揃して打向ふべきとなり。四國中國の兵も相加はり、去々年小牧のときより兵十萬も多かるべし、ゆゝしき事に候と申しければ、東照宮聞し召し、去年十一月伊勢の奈合にて信雄卿と和平の時、わが方にも已來別の事あらじなど云ひたるも、我をたばかるの謀にて、吾家の石川伯耆守に十萬石與へて我に背かせたり。吾弓箭を取つて發向せんと思ひしかども、織田殿の國を打過きて軍せん事いかにと怒を押へて止みぬるに、無禮の事共なり。秀吉清洲にて勢揃せんこそ望む所なれ。鳴海表にて一軍まゐるべし。然らずば、東美濃に打出て、土岐、遠山、惠奈三郡を切取るべしとて、鞭を指上げられ、此鷹一もとにて手配すべしとて打笑はせ給へば、三人歸りて秀吉にかくと申す。秀吉聞きて偖も大勇將かな、今夜思慮すべしと言はれし時、丹羽長重進み出で、必軍は思召止り給へ。長重が士ども刀の鞘袋を設けし故、仔細を問ふに、鞘に三つまきを拵へ、合戰の時は鞘袋を捨てゝ三河武者に紛れ命を助るべき支度なりと申しも果てぬに、蒲生氏郷堀秀政も、みな〴〵士卒其心得に候。萬に一つも利候まじといへば、秀吉よし〳〵德川家を打破りて、各に見せん物をとて止みければ、三人退出し、道にて彼猿は死所なくて物に狂ふやと私語きたり。翌日諸將をあつめ三河を打滅さんは安けれ共、智勇の大將なれば、吾日本を治むべき事を相談せん爲に、緣を組み妹を嫁して和平せんとて、又三人をやられしかば、東照宮三ヶ條の誓文を御所望有り。秀吉許諾して和平に及ばせ給ひけり。四月秀吉の妹濱松におはしまして後に、京に登らせ給ふべきむねを秀吉請ひて、秀吉の母の大政所を質とせられしかば、都に登らせ給ふべきに定りけり。長臣ども是は危き事なり、然るべからざる由諫め申せども聞召し入れ給はず。其時申しけるは、和平又破れ、秀吉攻來り候とも、素より鉾先の强きは言ふにや及び候べき。何十萬の大敵なりとも、打負け候ふまじ、强ひて思召止り給へと申しければ、東照宮聞召し諫むる旨尤理なり。然ども秀吉に畏れて行くにはあらず、日本久しく兵亂にて、四民安堵せず。此頃やゝ治りたるに、復秀吉と弓箭をとらば、いつの世にかは靜謐せん。只とく秀吉に對面して、日本太平の基とせん。若危難に及びなんには、萬民の命に替らんに、何か惜しかるべきとて、九月二十日濱松を御首途有りけるに定りければ、人々二十日は四ヶの惡日とて、千人出て一人も不歸と申傳へ候。一

日御延引然るべからんと申す。東照宮千人行きてこそ大事もあらめ、我今度一萬二千の軍兵を引具し上京す。此軍兵一人も生きて歸らずば、吾爲の大吉事なりとぞ仰せられける。井伊直政を御留守居とし、此度秀吉詐を構へ變に及ぶとも危からじ、尾張大納言信雄は、必吾に告知らせて味方たるべし、丹羽五郎左衞門は秀吉に恨あれば、心を合せなん。其外吾に志を寄する人多し。去れども我も亦其備なからんや。秀吉不意に謀をなすならば、京都に火をかけ東寺に楯籠るべし。其時素より立置きたる汝が組一萬を五百づつ二十に分ち、外に酒井榊原が今度京に上る供の外留置きたる兵一萬、是も二十に分ち、佐屋の渡を越え千種を押上るべし。若大津にて支ふるならば、武田四郎が長篠にて懸り し如く切つて掛らば、上方武者一支もすべからず。又瀬田の橋を焚きたらば、宇治より攻入るべし。新七籠之介と云角力取二人は宇治の案内者なれば召具すべし。斯の如くならば、秀吉聚樂を退きて大阪に引取らん所を、東寺と清水と兩方より挾みて打破らんに恐るゝに足らず。秀吉詐妄の謀をなさば、吾天下を掌に握るべき兆なりと仰せられ、御出馬有り。秀吉と御對面事故なく歸らせ給ひけり。されば危しとはしろし召されけるが故に、萬民の命に替らんとの御詞、天地神明も感應して、遂に國運を永世にひらかせ給ひけるにこそ。

東照宮聚樂にて秀吉公に御對面の事

東照宮聚樂にて秀吉に御對面饗禮有りける日、秀吉白き紙子の羽織に繡したるを著られけり。蒲生氏郷其頃三十二歳にて、狐紙子と名付け呼ばれしとなり。淺野彈正長政彼羽織を御所望候へかしと私語きければ、東照宮漫に人の物をもらひたる事なしと仰せあり。長政又御所望候ひなば、秀吉大に悅ばれ候べし。素此羽織は物の具の上に著んとの設なれば、一旦は辭し申されんを、强ひて乞ひ得させられなば、秀吉何事の悅か是に增るべきとしひ申せば、東照宮止事を得ずして許容ましゝけり。偖聚樂の城門にて、毛利浮田を始め居並びて拜謁し、さて茶を奉りて後、東照宮彼羽織の事を仰出されしかば、秀吉悅びて手づから著せ奉り、扨大名に向ひ、我に物具させまじとの事ならずや。誠に天の冥加に叶ひたる秀吉なりとぞ、語られける。東照宮歸らせ給ひて後、長臣達に聚樂の事ども御物がたりありける時、吾に羽織を贈りて後秀吉、吾に物具させまじきとの志なりと、諸大名に向ひて云はれしは、斯る後は爭か秀吉の餅先に向ふべきと、中國西國に語りつぎ言ひつぎ言ひついで、普く世人の口に有るべし。筑紫の末までも聞えなん。是天下の大名に威を示すの謀略なり。其遠大の謀輙く測るべきにあらず。力を以て是を推さんとするとも、及難き秀吉なり。されども吾志す所は、別に有りとぞ仰せありける。

本多正信遠謀言上の事

太閤東照宮を饗禮有りしに、かけ盤を始め器不ノ殘葵の御紋を蒔繪にし、誠に美を盡したる次第なりしを、東照宮本多正信に語らせ給ひ、如何なる思慮や有らん、吾も亦遠き慮有るべきなりと仰せら

れしかば、正信承り、されば候、小笠原與八郎氏次は勇將の譽れ世上に聞え候うて、たれ〳〵も旗下につけばやと志有りしに、氏次同心仕らで、御家の旗下仰せに從ひ候ひき。彼が内々の志は、信長と朝倉と一戰有らん時、必三河より御加勢に御出馬有るべし。其隙をうかゝひ御家の領國は已が掌の内に握らんと存じ候て、僞りて二心なき有樣に候ひし。彼が計りし如く姉川の合戰信長援兵を乞はれしに、小笠原を先陣に命せられし故、心中に挾む所ありといへども辭すべきやうなくて、姉川にて御勝軍なりき。小笠原が二心なき體に見えしに、御乘り乍御心に乘らせられぬ所有りし故、姉川の先陣小笠原と御定め有つて、彼が支度相違せり。人の乘する所をのらじとするも、一物有つて候。乘する處を乘りながら乘らぬ心あるを善しとす。豐臣家の乘する所を、右の謀にて應接はせなん事然るべしと申しければ、東照宮尤なりと深く信じ給はせけり。

東照宮伊豆にて北條父子に御對面の事

東照宮の御女を、北條氏直迎へて兩國和平なれども、御對面なかりしかば、天正十四年三月使をもて拜謁して、要害國境の城々守の兵を輟め候べし。黃瀨川を渡り伊豆に至るべきかと仰遣はされしに、酒井忠次黃瀨川を越え、氏政父子に御對面候ひなば、北條家の旗下に屬し候と同じ事にて候。今德川家は五州の御あるじなり。いかでか北條家の旗下に屬すべき。德川家の瑕なりと諫め申す。東照宮されば、其位爭ひ無益の事なり。過ぎし比武田上杉和平して犀川を隔てゝ對面の時、馬より早く下りたる方旗下に似たりとて、忽事破れ、其場より鐵砲を打合ひ諸卒血に染みて相引にしたりき。其時信玄二十七歳謙信十八歳の時なり。夫より和平して京をさして上らんに、信長も吾も爭か支へ得べき。其故に兩方に使を以て道理至極せりといはせしかば、兩將二十四年の間和平せざりき。其中に信長は近江和泉を打從へ、吾も援を出して信長を後にして根を深くするの謀をせしが、信玄死して勝頼父に優るべきと威をふるひ、暴逆して滅亡したり。信長又勝頼に勝りて驕長じ、樣々よからぬ事のみ有りて、終に弑せられぬ。斯の如き大將は、滅びて終をよくせざる事理なり。夫を見て戒とせず位爭をするは惡しき事なり。氏政吾と二心なく言交さんに、兩旗にて東國を打平げなん。其時に及で州あまた領する者上座に在らん。位爭ひ更に益なき事なりとて、伊豆の三島にて氏政氏直に御對面あり。

信長公平手政秀を惜み給ひし事附小瀨甫庵信長記太閤記を著し丶事

信長弓箭盛にして畿内を打從へられし比、近習の者共諂ひて斯强大に及ばせ給ふ事を知らで、平手中務が自害しけるは、短慮にて候ふと申しけるを、信長怒つて色を變じ、吾斯弓箭を取る事みな中務が諫めて死にけるに、恥悔いて過を改めし故なり。古今に例なき中務を短慮なりといふ、汝等が志無下に口惜しき次第なりと言はれけり。

小瀨甫庵後に此事を傳聞きて、信長記を編まざる已前ならば、必其中に書入るべき事を、遲く聞きて殘多しと言ひけるとなり。中務大輔政秀は備後守より信長の傅に附けられたり。信長甚よからぬ事

多かりしかば、度々諫爭ひて後、國の亡びん事を料りつゝ、一封の書を留置きて自害して失せたる事世に普く知りたれば具に記さず。中務始は清秀と云ひける故、諸書にはみな清秀と記したれども、後に政秀と改めける故、諫死の後、信長尾州名古屋に一寺を建てられ政秀寺と稱し、寺領二百石寄附せられ、臨濟開山派京都妙心寺の末寺にて中務の墓も其寺に有り。寺の緣起に政秀葬送の時信長柩に手を懸けられたるよし記せり。小瀨甫庵は町醫にて、加州金澤に居り、利家の臣横山山城守長知の許に心安く常に來て毎夜伽しけり。長知は尾州の人にて織田家の事能覺えたりし故、信長の事を甫庵毎夜尋ね問ひ、且秀吉の事をも問ひける故、長知或は委しく、或はおろ〳〵語り聞かせけるを、甫庵退きて書記し、信長記太閤記二部の書を著し、世上へ出しけるを、長知聞きて、信長太閤の事を書記さんために尋問ひたらんには、答へんやうの有るべきに、遺漏も多く殘多き事なり。其事を聊もしらせざるに依りて、只一座の物語に云ひ聞かせたるを、其儘に書著したるは、今に於て甚遺憾なり、甫菴馬鹿者なりと長知いひしとなり。長知は初浪人にて叡山に寄宿し、諸國を武者修行して後前田家に仕へ大膳と云ふ。加州大聖寺小松越中末森などの軍に武功有りて一萬五千石領し、其後同州太田但馬守を放討にせよとの命を受け、太田祿一萬五千石を合せて三萬石を與へらる。長知大功の人にて人の勇武をさのみ目に懸けず、大方の事は稱美もせず、只武士の有るべき事と心得たりし故、甫庵に語りける事遺漏多くて悔みけるとぞ。

謙信信玄二將の批評

信玄死なれし事を深く隱したるに、北條氏政泄聞きて謙信のもとに告げやられけり。謙信は赤日山にて湯漬飯を食せられしが、是をきゝ、打驚きて箸を捨て飯を吐出し、英雄とは此人なり。關東の弓箭柱を失ひたりとて惜まれけり。信玄は將略の謙信に及ばざる故に、高野の成慶院にて大威德明王の法を修し、謙信を咒詛せられし、其文今に高野山に傳はりけるといふ。

信玄勇才は人に超えたりと稱すべし。父を逐ひ子を殺し降將を殺して其子を妾とし、其餘不仁怨毒算へ盡すべからず。姑く此二事を併見ても、二將の賢否論をまたずして明なり。又甲陽軍鑑に記せし處、附會詐僞しひて拵へ設けて、信玄の惡を隱し他を蔑にせし事、是又かぞへ盡すべからず。一事を擧げて論ずるに、北條家と戰ふごとに利有りと見えたれども、北條五代記に記せるは、信玄川中島に陣せしに、氏康夜討して甲州の兵敗北し、八幡と書きたる旗を捨てゝ甲州へ逃入りたりと見えたり。甲陽軍鑑に、是を忌みて津浪に旗を取られしと記したり。たとへ北條五代記の說誤りたりといふとも、津浪に旗を取られしは、陣所の地理にくらきにあらずや。

甲陽軍鑑虛妄多き事

甲陽軍鑑を高坂彈正書きたりと、世に傳ふる事久し。勝頼に仕へし友野大膳武功の人にて、甲州の滅びて後、引き籠り隱れ居しが、書きたる物には香坂としるせり、姓も違へり。僞妄多き書なりといへ

ども、軍國の事情をよく書き取りたる故に、其の虚妄を人疑はず。控弦の家專ら讀むべきものと古人もいひしなり。然れども其の事實を案じ、其の眞僞を考へずば、大に惑はされんこと必然なり。川中島九月十日の合戰の事、其の記せしによりて、是れを論ずるに、信玄の敗北たること疑ふべからず。卯の刻に始まりたるは越後方の勝、巳の刻に始まりたるは甲州の勝なりと記せり。軍は芝居を踏へたる方を以て勝とする事、甲陽軍鑑に論明白なり。然れども其の日の戰、信玄芝居を踏へられしとはいふべからず。既に山本勘介が其の軍を豫めいひたりしにも、二萬の兵を一萬二千、謙信の陣西條山へ指し向け合戰を始めなば、越後の軍勝つとも負くるとも、川を越え退かん所を、旗本組二陣を以て、首尾を打たんと謀りしなり。然れば謙信客戰なるが故に、思ふ程利を得たりとも、越後に引き返すは極りたる事なり。是れ主戰の敵に勝ちたればとて、空しく其の地にあるべきにあらざるを以てなり。是れを以ていへば、信玄芝居を踏みたればとて、勝とはいふべからず、是れ一つ。又信玄芝居を踏へたりともいひがたきにや。甘糟近江守犀川を渡りて三日留りたるを、甲州より押し寄せて、軍することを能はざりき。是れ越後の軍芝居を踏へたるにあらずや、是れ二つ。昔老人の物語に言ひ傳へし事あり。信玄嫡子義信を殺されしは、繼母の讒言ありしといへども、其の實は川中島にて、信玄義信將几換りをして、信玄は廣瀨の方へ引き退く。敗軍と云ひながら、義信を捨て殺すべき勢なりし故、義信深く恨みをふくむを以て、終に不和に及んで殺されしに至れりとなり。信玄其の場を踏む事能はずして逃げたるを以て、芝居を踏みたりといふべきや、是れ三つ。謙信素より甘糟をもて、川を渡るの後殿と定められしが、三日留りたるを以て見れば、甲陽軍鑑に、甘糟が兵散亂せしと記せるも、虚妄なる事論を待たず。甘糟三日芝居を踏みたるに、謙信何事に狼狽して、主從二人高梨山に懸りて走るべきや。謙信既に其の前夜軍評定ありしに計りし如くなる旨、甲陽甲鑑に記せし所明かなり。初の合戰に打ち勝つて、巳の刻まで徒に敵の歸り來るを待ちて敗走すべきや。謙信の弓箭をとれる越中の戰は、父の弔ひ合戰なり。信濃に師を出すは村上義清に賴まれて其の求めに應じて是れを救ふなり。相模の軍は上杉憲政の來るを容れて、已む事を得ざるなり。既に其の詞にも、强ひて勝敗を見るにあらず、當る所の爲さで叶はざるの戰ひを爲すといへり。信義を守るを大將の愼むべき事にせり。爰を以て深く賴みたるは、始終約をかへず。又其の兵を用ふる信玄の及ぶべきにあらず。山の根の城を攻め落せしに、信玄氏康兩旗にて、後援する事能はず、遙々と敵の中を旅行して、京都に赴きたるも、勝れたる事ならずや。信玄は謙信小田原へ攻め入りたる跡に付きてなしたるは、なし易きにあらずや。甲陽軍鑑に、長沼に城を築かれし時、判兵庫に信州水内郡にて百貫の地を與へ、信州戸隱にて密供を修す。爰に北越の輝虎讒臣を企て、此次きれて見えずとしるせり。永祿十一年謙信戸隱山にて、謙信を信玄咒詛直筆の書を見て打ち笑ひ、弓箭取る身の恥なり、末代の寶物にせよと、神職にいはれし由語り傳ふ。今其の書紀州高野山にありといふ事、詳かに書き記せる物あり。實は謙信を恐るゝ事虎の如しと

もいふべきにや。村上義清再び信州に歸り入りし事、甲陽軍鑑に載せずといへども、永祿年中、信州の中四郡謙信に屬し、義清を信州へ入れられし事記せるものあり。甲陽軍鑑に、長坂長閑、跡部大炊助二人を奸曲の臣として、勝頼寵せられし事を、深く憤れるは然る事なれども、二人權を取るは勝頼に始まれるにあらず、信玄の時より寵せられし故、勝頼に至りていよ〳〵權威ありき。信玄の時、北條の兵に跡部敗れ走りしを、皆寵愛を憎みし由を、甲陽軍鑑に載せたるを以て知るべきなり。又いひ傳へし說に、甲陽軍鑑を著せし本意は彈正にて、筆取は猿樂彦十郎といふ者なり。彦十郎は甲州滅びて後、大久保忠隣の所にて、東照宮の御事を書き加へて、一書となしたるとなり。又或人の云ひしは、川中島合戰の事を前後に論じて、謙信强敵たるの故、對々の人數にてさへ危きに、まして信玄八千、謙信は一萬三千なり。勝つといふとも討死數多あるべしと、武田の各々存ずるは理なりといひし事を甲陽軍鑑に載せたれば、勝は謙信にある事、分明なりと論ぜし人もありき。又同書に載せたる持氏生害、兩上杉ほこり恣にて、武州河越にて、北條に負けたるは天の罰なりといへり。持氏と兩上杉と時替れり。持氏の滅亡は永享十一年にて、氏康とは遙に百八年を隔てたるを同時に記せり。北條早雲は延德二年に相模に打ち入りたり。其の頃上杉顯定は越後にあり。顯定は越後信濃の境、長森原にて高梨に討たれぬ。早雲さへ兩上杉と斯くの如きを、氏康未だ生れざる已前の事どもを、甲陽軍鑑に記し、事誤なり。天文六年丁酉七月十五日、管領朝定と北條氏綱と、武州川越にて夜軍あり。朝定討死なり。此の合戰を兩上杉と氏康夜軍となして記せるにや。同十五年丙午四月二十日、持氏五代の後古河晴氏と、管領上杉憲政と共に、川越にて氏康と合戰有つて、晴氏憲政敗北なり。是れを甲陽軍鑑に、兩上杉と氏康軍とせり。されば五代已前の持氏をば公方と記し、五代已後の管領を兩上杉となせるなり。持氏四男成氏、成氏の長兄公方政氏なり。同人の長子高基、高基の長男晴氏なりといへり。又甲陽軍鑑に載する高名の事ども虛妄多し。中に就きて采幣を手に懸けてありし敵を討ち取りて、首を得し事を記せし事、幾ばくといふ事を知らず。惣じて甲州に敵せし士は、采幣を手に懸けしと見ゆ。誠に笑ふべき書の記しざまなり。其の餘虛妄勝げて計ふべからず。然れども其の時に居て、戰國の勢を能く知り、且つ士の情に達せし者の書きたる書なる故、弓箭取る者の翫ぶべき書にて、虛妄を棄つべきにはあらず。

吾友の松崎惟時が語りけるは、其の師なりし寶山流の劒術の達人、武藤十右衞門の論せしに、戰には巧拙ありとおぼゆ。太閤秀吉は戰には拙きなり、小牧にて十萬に及ぶ兵を帥ゐて東照宮に對陣し、誠に一刄も合する事能はず。東照宮の御弓箭世に勝れさせ給へるは論にや及ぶ。然れども箕形原にて、甲州の兵と御一戰ありしに衆寡敵し難き故にや、利を失はせ給ひぬ。さらば信玄は海內無雙ともいふべきに、謙信と軍する度毎に打ち負けられたり。是れを以て思ふに、戰の巧拙は遙かに其の科あるにや。然れども天下に旗を揚げ、世を治め國を平かにするの道は別に有つて、戰の巧拙にはよ

るべからずと語りしとぞ。是れ又奇論とすべし。

卷之八

仙石權兵衛九州に間者の事

秀吉島津を討たんとおもふ事年久し。天正十三年仙石權兵衛を商人の體にして、九州に間者とし、山山浦々の地理悉く繪に書きて起臥に見、兵を分ち攻入るべき道々を計られけり。

島津家久島原合戰の事附惠藤某が事

島津中務大輔家久肥前に攻入り、島原の城を攻落したる所に、龍造寺隆信大軍にて押寄せたり。家久わづかに三千計なりしを幾重ともなく取圍む。家久是を物ともせず、明日の合戰吾先陣すべし。貝を相圖に切懸るべしと定めて夜の明るを待つ。朝霧深く吻の色も分たず。家久將机に倚りてはれ間を待ち、やゝ朝日出て晴れわたりしに、子の又七郎豐久十五歳になりけるを近付け、天晴武者振よ、只上帶の結びかくするものぞとて結び直し、脇指を抽て其端を切つて後、よく聞け、若軍に打勝つて討死せずば、此上帶我解くべし、けふの軍に屍を戰場にさらさんに、島津が家に生れたる者の思ひ切たりと敵もしり、我も黃泉に悅ばん物をといひもあへず、貝吹立てさせ眞先に隆信の旗本へ切つてかゝる。島津家の弓箭は先駈の兵は矢一筋持せ射放ちて弓を捨て、長き刀を抽いて切てかゝる。けふも又しかしたりけり。隆信の旗本亂れ立ちて敗北すれば、隆信きたなし返せと下知し遂に蹈止り討死せられけり。

家久勝てほこらず、人數をまとめ陣を整へける所に、龍造寺の臣恵藤それがし首一つ血に染みたる刀に持添へ、大將は何國におはしまし候ぞ。功名の印の候と云ひて家久に近付寄り首を投捨、馬の上なる家久を一太刀斬りたりしに、家久心疾く馬より飛下りたれば、左の草摺を切つて餘る刀膝にあたりけり。恵藤を中に取りこめて討たんとすれば、家久あたら者を討つなと下知しければ、生捕らんとすれども、素よりけふを最後と思ひ定め切て廻りしほどに、終に討たれけり。恵藤とのみいひて名をば名乘ず。家久恵藤が首を膝の上に置き、竝びなき剛の者、義勇の士とは是をこそ言ふべけれ。生捕りて對面し、龍造寺に送り返さんと思ひしに、思ひ切つたる戰死せられしかば、力及ばずとて、近所の僧を請じ、恵藤が弔ひの事念比に沙汰し、其有樣詳に記して、其僧に賴み故郷にやられけり。偖豐久を呼びて、今朝の約のごとく上帶を解きたりしとかや。家久は島津家の士大將なり。豐久後又中務と稱したり。關ヶ原に於て義弘の身に代り討死有りしは此人なり。

立花道雪行狀の事

立花道雪は、始戸次といふ。立花の後を嗣し故立花と稱す。始の名は鑑連、男子なく高橋紹運の子を養て嗣とす。若かりし時雷に震れ、足痿え歩行心に任せず、常に手輿に乘れり。累代大友家に屬す。大友家衰へけれども、道雪心を變せず。武勇たくましき人にて、士卒を見る事子を愛するが如し。戰ひに臨む時は、二尺七寸有りける刀と、種ヶ島の鐵砲を手輿に入れ、三尺計の棒に腕貫をして手に提げ乘られ、長き刀挿したる若き士百餘人手輿の左右に引具し、軍始れば手輿を此士にかゝせ、棒を取て手輿をたゝきえいとうと聲をあげ、此輿を敵の眞中にかけ入れよとて拍子取り、遲き時は輿の前後をたゝかれけるに、敵に北げたるよりも恥として、面もふらずかき入れければ、手輿の左右の士三尺餘りの刀を抽連れて一文字に切つてかゝりけるに、先陣の者どもすはや例の音頭よといひもあへず、我先にと競ひかゝり、いかなる堅陣をも切崩さずといふ事なし。若先陣追立てらるゝ時は、道雪大音上げて我を敵の中へ舁入れよ、命惜くば其のち逃げよと眼を見出し下知せられしほどに、守り返して勝ざる事なし。斯れば道雪の士は、一日に幾度槍を合せたりといふ者多し。又道雪常に士によわき者はなきものなり。若よわき者あらば、其人の惡きにはあらで、其大將の勵まさゞるの罪なり。吾士はいふにや及ぶ、下部に至りても度々功名なきはあらず。他の家にて後れたる士あらば、吾方に來り仕へよ、取りかひて逸物にせん。吾士の四月朔日左三兵衛は若き時始めて後れし事の有りしに、いつの頃よりか血臭き事にあひて次第に物に慣れ、今は五六人の剛の者と世にいはるゝぞかしとて、たま〳〵武功なきの士のあれば、明塞ぎの有るは武功の事よ、弱からざるは我見定めたり。明日にも軍に出でんに、人にそゞろかされ、必拔懸して討死し給ふな。夫は不忠なり。身を全うして道雪を見つぎ給はれ。各を打連れたればこそ、斯年老たる身の敵の眞中に有て、ひるみたる色を見せざるぞと、いと懇に睦しくいひ

て酒酌かはし、其比はやりける武具取出して與へられければ、是に勵まされて、重ねて軍のあらん時必人に後れじと勇みて、聊も武者ぶりの能見ゆれば、呼出して、あれ人々見候へ、此道雪が見し所に違ふべきにあらずとて、勝れたる剛の者の名を呼びて頼み候ほどに、能引廻はしてよといひ、又人人の心を合せらるゝ事、此道雪は天の冥加に叶ひたる事よと勇め立て、若しわかき士の席上にて心得違ひたる事のある時は、客の前などに呼び出し打笑ひ、道雪が士ふつゝかにこそあれ、されども軍に臨みて火花を散し候、槍は此人々こそ能すれとて、槍追取りたるまねして譽られしかば、人々感じ涙を流し、此人の爲に命を捨てんとはげみけり。

道雪仁愛深かりし事

道雪の側に仕る女に心をかよはす者ありけるを、しらぬ體にてぞ有りける。是をしるもの有りて、ある夜物語の時申しけるは、東國の大將に誰とはしらず候。寵愛の女に密に情を通はす者の候ひしを誅せられきと、あらぬ事を態といひて、道雪の答を試みけり。道雪打笑ひ、若きもの〻色に迷ひたるは、必しも誅せずとも有りなん。人の上に居て君と仰がれんには、假初の事に人を殺せば、人背くもとゐよ。國の大法を犯したるには異なりとぞ語られける。彼者傳へ聞て心に慙ぢ、又道雪の仁愛に感ず。其後薩摩の軍鎧が嶽の城を攻むる時、道雪城を出でて戰ひしに、大軍押懸り危かりしに、彼者大音上げ劔れける味方を恥しめて散々に戰ひける。其のひまに道雪城ちかく引取りたるに、敵猶きびしく進み來て、城門をたてあへぬ計なりければ、かの者又取て返し、武士の討死すべき所は爰にあり。各是にて討死せば、城をば敵に奪はれじ。返せや人々といふまゝに、槍を横たへ折敷ければ、返合する者三人あり。面もふらず戰ひて、討死しける間に、城門を閉ぢたりける。

立花道雪高橋紹運猫尾城の寄手に加はること附道雪死去の事

天正十二年、大友宗麟猫尾の城を圍みて、數十日攻むれども落ちず、大友の兵長陣に氣疲れたりと、立花道雪高橋紹運聞いて、宗麟に馳加はり然るべしと相謀り、俄に兵を出し、二夜の腰兵粮を付けよと陣觸して八月十八日打立ちたり。士卒是は何方へ向はるゝにやと怪しみながら、下知に從ひて三笠郡内山江原へ打上る。是より黑木の猫尾へ押し行くべしと下知し、紹運先陣たり。今宵ははや夜半過ぎたり、月傾きぬ、筑後川の邊にて夜は明なん。然らば敵の中數十里押通る事いかゞあらんと、紹運の從士云ひければ、道雪へかくと言送らるゝに、道雪色をかへ、あはれ早く夜の明よかし、見晴して敵出ば、撫切にして通るべしとて、乘物を叩かれしかば、使者に行きける萩尾大學、よしなき使をして恥辱に逢ひたるぞとて馳歸る。紹運の從卒の謀りしごとく、筑後川へ押著くれば夜明けけり。渡る處はかたの瀨といへり。瀨蹈にも不レ及混々と打入れ押渡る。秋月種實の士芥川兵庫といふ者、五十騎計にて、星野城より番代りして歸りけるが、いづ方より誰の軍を押せられ候哉と問ふ。紹運餘すなと下知し取卷きて、一人も不レ殘討取り、首を小高き所に竝べ、軍陣の血祭したりとて、夫より

石垣原へ押出し、後陣を待揃へ、耳納山を越えんとする處に、秋月種實筑紫廣門の兵共、所々方々より兵を出し、爰のつまりかしこの切所に待ちうけ、鐵砲を打ちかくる事數を知らず。中にも大木を小楯にして、其蔭より顔ばかり出して、鐵砲を擲つ者あり。殊に手だれにて手負數多に及べり。道雪の乘物昇きたる人にも中りて倒れしかば、乘物をはたと落しぬ。道雪怒りて、あれをうてと下知して、傍より頻りに鐵砲を擲かけけれども、面ばかりさしのぞきて鐵砲を打出だせば、ねらふべき透間なくて、中々あたらざりしかば、道雪いかに紹運の士に、手だれはおはさぬか、あれうたせ給へと詞をかくれば、紹運市川平兵衛といふ士に命せられけり。平兵衛承り候というて、鐵砲を構へ待つ所に、又かの木陰より面をさし出しければ、市川手きゝ早に擲たりしに、眉間に中り轉び出て、うつぶしに倒れ死す。敵前後より取挾みければ、後陣の由井雪加より道雪へ使を以て、唯今討死を遂ぐべしと申送るを聞いて、紹運大返しに返さずば、味方の後陣危くて、此切所を越えがたかるべしとて取つて返し、敵を拂ひて耳納山の嶺に押上げたりしかば、はや夕日に及べり。諸卒はるゝと押來りしかば、疲れを休めよ。今宵は爰に陣すべしとて曠原に折敷せたり。俄かに雨降り來れども、兩將打廻りて、士卒に詞をかけいたはらるゝに、本より兩將の恩惠になづき服したる者どもなれば、ちつとも疲れを覺えざりしとぞ。斯て一夜はそこに陣し、明の夜黑木に押付けられしかば、豐後の兵競ひあへり。宗麟も兩將の擧動鬼神のわざ成るべしと崇敬し、諸卒に及ぶまでもてなしせられけり。されども宗麟には人々思ひ放れたりし故、田原親家も俄かに心替りして、兵を引具して豐後に歸りければ、おもひ思ひにて事ゆかず、宗麟も引返されしかば、兩將も高良山に陣して其年も暮れぬ。明くる天正十三年の夏に及びければ、陣がへすべしとて、紹運は赤司に屯をかへ、道雪は北野村天神の壇に移られしに、病付きて次第に重くなりしかば、吾死したらば、屍に甲冑を著せ、高良山の好己の岡に柳川の方へ向けて埋むべし。此事背きなば、我が魂魄必ず祟をなすべしと遺言して、九月十一日七十二歳にて終られけり。斯くて此よし十時攝津守を使として、立花の城にやり、統虎にかくと申す。死骸を只一人棄置んこと人の誹も免れがたし。立花へ歸し入るべき旨答へらる。十時陣所に歸り、此山をいへば、由井雪加されば仰の趣は不可なるに非れども、遺言の重ければ背きがたし。雪加まづ爰にて腹を切り、御供に參るべしといひければ、由井大炊某も腹を切り、右脇の御供に我立つべしといへば、誰も爭でか殘るべきと殉死すべき人餘多に及べり。其時原尻宮内少輔熟々と聞きて、各達唯名聞を好みなんには、然るべけれども、統虎公の御爲によかりなんや。夫程に存ずるならば、嗣君にも御腹召させたらんこそよからめと、荒らかにいひければ、雪加聞いて、尤に候、然る上は我思ひ止まるべし。棺をば立花へ歸し參らせ候はんこと然るべし。祟のあらんには、雪加が一族罰を蒙るべしとて、九月二十四日陣拂して、道雪の棺の供して立花へ引取りけり。

稻葉一徹罪人を免さるゝ事

稲葉伊豫守一徹下人罪有りて死罪に行ふ時、聲を上げて泣く。命をしきやと云へば、彼罪人いや〳〵命を惜みて泣くにあらず。命あらば一太刀恨むべきに、斯成果つる事の口惜しくて泣くなりといふを、人々憎き奴哉、とう〳〵斬棄よとひしめくを、伊豫守聞きて、それ助けよとて縄を解かせ、いかにもして我に一太刀打てよとて追放ちければ、忝きよし再三いひて立去りけり。其後年經て一徹病重くなりし時、彼下人來て力を盡せしに本意を遂ずとて又泣く。頓て一徹死して葬の後彼下人一徹の墓に詣て、吾けふまで存たるは、君を一太刀恨申べしと申せしが故なり。君隠させ給ひしに生て居たらんには、刑死に及で泣しは、命惜きに泣たるなりと人の申さん事恥しく候とて腹掻切て死しけり。是を以て見るに戰國の時、上の人下の人其情の、太平無爲の化に浴したる時の人に異るを思知るべきなり。

高橋紹運討死の事附立花統增薩摩に囚るゝ事

島津義久、島津圖書忠長、伊集院右衛門大夫忠棟を大將として、兵五萬を以て筑前岩屋の城主高橋紹運を攻む。岩屋は要害の地にあらず、寶滿が嶽に楯籠りて防ぐべしといふ者有り。紹運爰を去て寶滿が嶽に入りたればとて勝つべきにあらず。敵に恐れて逃げたりと誹られんも口惜し。此城を墓に定めたりとて、ちつとも動かず。四方を圍みて嚴しく攻めたりけれども、驚く色もなし。義久の士大將新納武藏守忠元矢留を乞ひて、城中に申すべき事の候と呼はりければ、紹運聞きて何事にか候と問ふに、新納申しけるは、紹運の武勇世に名高しといへども、大友家に組せられ亡衰へられん事近きにあり。大友家は切支丹を崇め、無道にして復家の興るべきに候はず。古き詞に一張一弛と申す事の候。疾義久と和平せられ候へといひければ、紹運聞て斯申すは高橋家にて麻布外記と申す者にて候。只今承り候旨紹運に申程の事にも候はず。聊義の當れる所を申すべし。人々能聞かれ候へ、凡盛衰消長は時の運にて、古の細川、畠山、赤松、山名を始として今川、武田、近國にて尼子大内等一度は盛にて一度は衰へずといふこと候はず。紹運今の限りに成りて、よも冑を脱ぎて降參せうと存ずべきや。大友の家も右大將頼朝卿の時より、子孫國を受傳へぬれど、日向の軍に敗れしより貳心あるもの多く出來て、今かく衰へたり。されども今にも秀吉公大軍にて九州に渡らせ給ひ、薩摩に攻入られんに、鹿兒島の破れん事も遠からじ。勢ひ盡運衰へぬるを見て、志を換ふるは弓箭取る身の耻辱にて、人に爪弾せらるべし。松壽千年終に朽つる事ぞかし。人生は朝露の日影を待つが如し。只永く世に殘らんものは義名にありと覺え候程に、降參は仕らじと高聲に呼はりければ、新納も又いふ事もなかりけり。外記とは名乘りけれども、紹運ならでかゝる詞だたかひせん人やあると云ひあへり。かくて猶降參をすゝめて、莊嚴寺の僧を使にしけれども聞入れず。さらば攻めよとて天正十四年七月廿七日四方より押寄せ、鬨の聲を作りかけ、えい〳〵聲を出して攻めたりけり。城中には思ひ設けたることなれば、爰を限りに防ぎけれども、終に討破られけり。三原紹心は、

うつ太刀のかねのひゞきは久方の天津空にも聞えあぐべき

と一首の歌を塀の柱に書殘して討死す。弓削平内は强弓の手きゝなり。矢倉に上りさし詰引つめ箭種を惜まず射伏けるが、左の手に痛手を負ひ、敵の中にかけ入つて討たれたり。高橋越前守伊部九藏も聞ゆる弓の手だれにて、物具のさわやかなる敵を目にかけて、あまた射倒し、矢種盡きければ太刀の切先を揃へて討つて出で、散々に戰ひ一足も引かず討死しけり。尾山中務が子太郎次郎十六歳なるが、父と一所に死なんとて出でけるを、母袖を控へけるに、振切つて敵の中へかけ入り、討死しけり。其片袖母の手に殘りけるとなり。寄手も討たれし屍に、四方の谷を埋みぬ。既に城兵殘り少くなりしかば、何しに猶豫すべきとて討つて出で、をめき叫んで戰ひけるが、最期の軍よも人に笑はれじ、いざとて或は腹を切り、或は敵と引組んで刺違へ枕を竝べて討死す。紹運は江淵右衞門大夫三浦式部黑岩隼人に、女童ども皆刺殺して、敵の手にな懸けそと下知し、薙刀打振薙いで廻られしが、今は是までなりとて、和歌を門の扉にとゞめられけり。

かばねをば岩屋の苔に埋みてぞ雲ゐの空に名をとゞむべき

一說、ながれての末の世遠く埋れぬ名をやいはは屋の苔の下水。かくて行年三十九歳にて自害して失せられけり。士卒をあはれみ深く義厚かりしかば、救もなき城を守りて、千八百人の士卒一人も逃散る者のなかりしは、例少き事なり。紹運始は鎭種と申けり。

一說に、城中の婦人は悉く圍るゝに先だちて、寶滿が嶽に入れられし故、害にあはずといへり。又紹運薩摩の軍をみ渡したるに、馬煙黑く押來る。紹運人々に向ひ、今押來る敵六十已下二十歳已上の者どもなるべし。今軍に打勝つて、吾者共ことゞく討死すとも、彼敵兵も又三四十年を過ぎずして野原の白骨となるべし。人生は朝露の日影を待つがごとし。義名を萬世に殘しなん事、武士の本意なりといはれしかば、城兵勇氣十倍せし勢ひを透さず、一陣に成りて薩兵を切崩し、一人も殘らず討死すともいへり。又寄手の大將を島津家久なりともいへり。紹運の物具の引合に、一封の書有り。島津中務殿と書きたれば、家久是を讀むに、今度降參を勸めらるゝの諫に從はず、是義の故なり。別に一封の書を大友に送り屆け給はり候へとなり。中務類ひ稀なる勇將を殺しけるよ、此人を友とせばいかばかり嬉しからんに、惜き事よ、弓箭取身ほど恨めしきものはなしとて、僧を供養し葬禮を執行ひ、壇を築きて家久香を燒再拜しければ、義を感ずる國風にて、薩摩武者皆燒香して涙を流し、紹運を稱美しけるといへり。又一說に、天正十四年六月島津圖書頭伊集院右衞門大夫兩先陣にて筑後國高良山に押入り、島津義久同兵庫頭義弘は肥後八代に旗本を陣し所々を燒働す。筑紫廣門の方には、兼ねて懈りて有りしかば、俄に騷ぎ立ち防戰の備すべき樣もなし。七月七日薩州の軍筑後川を渉り、其明の日廣門の館を取圍み、廣門を廢りたり。同月十三日先陣の兩將太宰府觀世音寺に著陣す。其外龍造寺政家秋月種實を始めとして相加り、十萬餘に及べり。岩屋の麓筑山横岳二日市太宰府のあたり尺寸も透間なく陣し、兩將より莊嚴寺の僧を使として、此度太宰府に攻めよ

せ候は、紹運に對し弓箭取るべきにあらず候。筑紫廣門二心あるにより是を討つべき爲にて、既に廣門を生捕りぬ。寶滿が嶽に紹運の實子を置かれ候て堅く守らせられ候事、謂れなきに似たり。とうとう寶滿を渡され候へとぞ、云送りける。紹運承り候ひぬ。素より一言の仰せなく押して大軍を以て某が守り候城下を、馬蹄に蹴散され候事、弓箭の禮に非ずと申すべし。扨統虎も道雪の家を繼て立花と稱す紹運も今に有りては、關白秀吉に屬し候へば、寶滿も岩屋も關白の城にて候を、渡し參らする事存じもよらず候との答を、使僧歸りて云ひければ、とても弱々と城を渡すべき紹運にあらず。さらば圍むべしとて、諸手口々の攻手を定め、七月十四日より柵をふり、矢合を始めたり。されども城中堅く守りてひるめる體もなく、未申の方尾山中務が持口より、鐵砲弩弓をもて城へ攻寄せたる寄手に打懸け數百人打殺し、手負は數をしらず。或時嶺の手の寄手より矢留を乞ひて、新納藏人と申者にて候、紹運公に申すべき事候といへば、紹運麻布外記と名乘りて詞戰ひに及べり。藏人詞を盡し利害を說き、大友殿には切支丹の宗門を尊信有りて神明佛法を蔑にし、天道に背れし故、人心散散に成り滅亡近きに候とて、島津に屬せられ候やうに申給はらんやといへども、紹運節義を說きて屈服の色なく、來春は關白九州へ兵を出さるべく候。さらば島津家の存亡も計るべからず。主の盛なる時は忠を致し、衰へたる時も操を替ざるを以て、弓箭取身の道とす。各達島津家滅亡の時に臨て躬を隱す謀を廻らされ候へ。只今おびたゞしく目に餘る十萬の士卒も、百年の齡を保つべきか。斯る心も候ひなんには、士の義たる道をこそ存せらるべけれと答へて、降るべき事は思もよらず。兩將重ねて莊嚴寺の僧を使として、八ヶ國の大軍を引受け堅固に城を守らるゝ事二十日に及べり。紹運公の武勇九州に無雙たるべし。寶滿立花岩屋とも仔細候まじ。和談を取結び軍を返し圍を卷ほぐし申べし。然れども十萬の軍兵の覺にて候間、人質を一人賜りなんや。さらば此後大友島津和談は紹運公の心に有るべし。事なりたらんには、其時人質を返し、九州一統島津に屬しなん。其後中國に押渡り、島津家天下に旗を立候べしと云ひ送りしかば、紹運許容せず、人質を關白か大友家に出さん事はさも有りなん。秋月種實龍造寺に組し、夫より一同に九州の亂に及べり。根本の人なれば、秋月に腹切らせ、薩州の兩將より今度の弓箭は京都又豐州への遺恨にあらず、筑紫廣門が反心を糺明せんためなりと、神文を書きて賜はり候ひなば、紹運事よく計り候べし。然らずば、此城を以て墓所とすと答へられしかば和平も事遂げず。遂に七月二十七日に諸軍一同に押寄せて、卯の刻より軍始りて午の刻の終まで寄手大軍入替へ〳〵攻たりけるに、手負討死いふべからず。去ども死骸を蹈越息をも繼せず攻戰ふ。けふを限りと思ひ切たる城兵、各持口を一足も引ず切死にしたりければ、城陷りぬ。紹運の左右には名を得たる剛の者共五十人計に討ちなされたるが、後度の勝負をも思はゞこそ、今を最期の軍なれば、當るを幸ひに向敵に切先を揃へて討つて懸り、一陣二陣を遙の谷底へまくり落しければ、半時計は攻入り得ざりけり。紹運手負討死の士卒を見めぐりて、死したる者には

無二の忠節謝するに詞なしと一禮し、息の通へる者には、自ら氣付の藥を口に入れらる。かゝる際に及で軍兵に愛を盡されける有樣、數年城を守り、度々の軍に功を顯し、今度は萬に一つも運を開くべきにあらざる大敵の圍に逢、士卒一人も落散ざりし類なき事よといひあへり。其後紹運薙刀を提げ思ふ程戰ひて辭世の和歌を扉に書付け、三十九歳にて腹を切られしかば、寄手攻入りて、敵ながら斯る大將も又有るべきや。士卒一人も降參せず逃散る事なかりしを惜まぬ人ぞなかりける。內室を始め刺殺すに暇なくて、とらはれとなりけれども、深く寄手もいたはり養育しけるとぞ。統增此時寶滿が嶽に有り、薩摩の兩將使を以て城を渡されよと云ひ送る。統增今年十五歳なり。城中以ての外軍兵少く、防ぎ戰ふべき事思ひもよらず。秀吉の出師を待受くべき間、しばらく生延びて時を覦ふにしかずと相謀り、統增を立花に送り屆け給はりなんには和平すべし。然らずば城を枕に切死すべきと答へければ、兩將より仔細あらじと許諾し、神文を書きて送りしが、俄に約を變じたばかりて、立花に送り返さず。其後肥後の吉松といふ所に移し、番兵を付置きたり。紹運の內室は筑後の北の關といふ所に移し置き、偖立花へ使を以て降參せられんやと言ひ送る。統虎實父にて候紹運は關白の爲に自害を遂ぐべしとて、軍兵を寄られよ、此城の切岸にて箭一つ仕らんと答へられけり。かゝる處に八代に陣せられし義久より兩將に下知し、秀吉師を出して打向はるゝ由云ひふらせり。疾兵を返すべしとありければ、八月廿四日兩將太宰府を引拂ひぬ。統虎陣を押出し、高取の城を攻落し、城主星野中務大輔兄弟を始め悉く討取り、それより岩屋に向はるゝ所に、立花の內小野理右衞門といへる者忍入りて火を懸たりしかば、あわてさわぎ、一支もなく逃落ちけり。秀吉感狀を賜はり、大に稱せらる。統虎又密に龍造寺に北の關に押込められし母を奪取り給はらんやと賴まれしに、龍造寺も薩州と弓箭を取るべき志ありしかば、心得候とて、堀江覺仙といへる者に軍兵數多指添へて、北の關に押寄せ薩州の番の者を追ひちらし、紹運の後室を奪取り頓て立花へ送り屆けたり。後室此比は法名を宗雲といひしとぞ。かくて薩州には統增を八代へ移し、高津加の法華寺に置きて、警護の兵に嚴しく守らせたれば、附添たる者共さまざまに謀を廻らせども、本國とは遠ざかりぬ。謀もすべき術なく、日を送りけるに、尙心もとなくや有りけん、薩州に移し下堂院と云ふ所に置けり。秀吉九州へ渡海し、先陣薩州千壺まで進まれしかば、統虎使を以て統增を渡し給はらんやと、義久の陣へ云ひ送られければ、義久仔細に及ばずして返し參らすべきよし答に及びしかば、十時攝津守を迎として下堂院に遣し、付添ひたる面々も殘なく引取り、千壺へ行く道海邊を過ぎけるに、秀吉の軍兵船を掛竝べ居たるが、落人と見てあますなとて小船にのり、ひたゝと陸に上り取圍まんとす。十時勝れて賢き者にて、邊りに有りける小船をかり本船に漕ぎよせ、統增なる事を斷りければ、大將と覺しき者船屋形に上り、采配を取て諸卒に下知し靜めければ、虎口を逃れて千壺に著き、兄統虎の陣に入りて對面せられけり。此統虎は後

に左近將監宗茂とて、驍勇無雙の大將なり。過ぎにし天正十年十月六日、秋月と道雪紹運宇龍野にて軍有りし時、紹運自薙刀をとり烈しく戰はれしに、統虎十六歳にて初陣なりし、其器量を見て、道雪養子にして家を嗣すべき事を紹運に乞うて、吾子にせらしとぞ。

紹運齋藤鎮實の妹を娶られし事

紹運若き時彌七郎といひし比、兄の鑑理齋藤鎮實の妹を、彌七郎に妻せられよと約束せられけり。其砌豐前中國と軍有りて、殊に騷しくて迎へ取らずして打過ぎぬ。其後彌七郎鎮實に對面の折から、兄が申しかはせし如く迎取るべきに、軍の最中にて斯は遲はり候。頓て迎へ申さんと語られしに、鎮實げに申しかはせしは可レ忘も候はねど、其後妹は痘瘡を煩ひて以ての外にみぐるしく成りぬ。中々かれが有樣にて見屆けらるべきにあらず。今にては參らせん事叶ひがたしといひし時、彌七郎色をかへ、夫は存じも寄らざる仰を承りぬるなり。齋藤家は先祖大友家にて武勇たくましき弓取にておはすれば、兄にて候ものゝ迎へ申さんと約束しつる事に候。夫に辭退も候まじ。我は少も色を好む心に候はずとて、頓て婚禮あり。其腹に二人の男子出來にけり。此迎へとりし頃、紹運二十歳に及びたりしとかや。

志賀親次山海が嶺に兵を伏する事

島津義久大友を攻め、所々に亂れ入る。志賀太郎親次獨義久に降らず。義久松の尾の城に在りて、秀吉大軍にて九州に渡らると聞きて、薩州に引退く。親次大に悅び、嶮岨の地に兵を伏せて打破るべしとて、鐵砲の手利二十人擇み出し、山海が嶺の林に待たせけり。然る處に首藤五郎大夫堀八郎といふ者、此度の撰に殘りけるを口惜しき事におもひ、密に道に隱れて薩摩武者二騎打落してけり。扨は伏兵有るぞといふ程こそあれ、大軍林に入り草を分けてさがしければ、二十人の者ども力なく樂を惜まず散散に打かけ、追ひくる者共打殺して引退く。親次大息ついで、義久をば山海が嶺は越すまじき物を、天の祐に逢ひたる義久なりと云はれけり。

高畑三河功名の事

豐後國合志常陸介を大友義鎮攻むる時、佐伯紀伊守（一說に彈正少弼）惟敎大將たり。佐伯が士大將高畑三河一日に十三度の功名あり。其後人問て僅に槍刀一兩度迫り合ても大に疲れ、息切れて小兒にも負べきに、一日十三度の功名はたとひ志は飽まで剛なりとも、力も息も續きぬるこそいぶかしけれといふ。高畑聞て打笑ひ、別の仔細もなき事なり。我戰場に打臨みて勿論の事とはいひながら、死生存亡の間に於て少しの思案を費すべき事なし。さる故に、人は騷がしくても我は靜なり。大かたは槍を合せ、太刀を打ちがへざる已前に力を出し氣を張るならん。是に依て精神草臥疲れたるならん。我敵に逢ふ時は我首を敵にとらするか、敵の首を我取るか此二つの中天命に有りとおもひて、初は綏きに似たれども、打合ふ時一決して一槍の中に勝負分るゝ故に疲るゝ事なく候なり。不レ入處にて氣を苦しめざるゆゑ、幾度事に逢ひても胸中安閑なりと答へけるとぞ。

森迫親正討死辭世の事

同じ城攻に佐伯に屬したる森迫（一本闕に作る）三十郎親正首を取り、又戰ひて討死する時に十七歳なり。常陸介が從兵山木十郎といふ者、其首をとる。小鍬形三本菖蒲の冑なり。短冊を付けたり。

命より名こそをしけれ武士の道にかふべきみちしなければ

常陸介感じて、其首死屍を高畑が許に送り歸しけり。親正は豐後大野郡三重郷の人なり。

薩摩勢根白の砦を攻る事

天正十五年二月秀吉島津を討たるゝ時、大和大納言秀長近江中納言秀次八萬餘、島津が豐後府内より薩摩へ引退く後を追うて亂入り、高城賤部の城を取圍み、附城五十一ヶ所築きたり。中にも耳川を越て根白の砦には宮部善祥坊繼潤、木下平大夫貞基、龜井新十郎廣政、鹽屋隱岐守光成、福原右馬助直高一萬餘にて守りけり。是は島津が後卷を防がん爲なり。頃は四月十七日の朝、島津使を根白にたて高城の城を渡すべし。士卒を助け給はり候へと言送りければ、宮部五十丁隔たる秀次へ此旨申して後、兎角の返答を申さんとて、使を返して後、斯欺きて怠らせ思ひもよらぬ所へ寄すべき謀なり。其用意せよとて、人夫千人俄に山々の竹木を伐らせ、陣の前に深さ二間廣さ三間計のから堀をかまへ、柵木を結ひて我も〳〵と物具して待つ所に、物聞に出したる者ども走歸り、敵押寄せ候と云ひも果てぬに、義弘一萬六千餘の兵を率ゐ鬨を揚げて攻寄せたり。宮部木戸口に進み出で、一番槍と名乘つて相戰ふ。田中九介、其子彦六國友半右衛門、三村三郎右衛門を始め、大剛の兵ども、先を爭ひて切つて出で相戰ふ。義弘も義久の子にて、素より聞ゆる勇將なり。薙刀を提げ眞先かけて、只今此城蹈破れ者共と呼はり、多勢堀を越冑の鍬を傾け、蟻の如く柵の木に付て引破らんとする時、兼ねて巧みたればひかへの綱を斷ちて柵を堀の中へ倒せしかば、薩摩武者討たるゝ者八百餘人に及べり。義弘愈々怒り進んで屍を蹈越えて內の柵に攻寄せ透間もなく戰ひけるが、內の柵をも打破り、十八日の朝三の丸を攻取つたり。宮部を始め愈〳〵死地に入りたれば、爰を限と防ぎ戰ふ。斯りしかば、秀長三萬計にて耳川に打向ひ、根白の方を見渡せば、薩摩の軍兵雲の如く取卷きて、鐵砲の音鬨の聲矢叫び相交り、天地も動く計なり。川を渡らんと進まれけるに、尾藤左衛門尉知宣、秀長の馬の轡を取つて、義弘が鋒武田四郎が長篠の掛り口に似たり。關白秀吉もかなはせ給ふべからずと、強ひて留めければ、既に川へ打入れたる馬を控へて進み得ず。藤堂高虎は手勢を率ゐ川を渡し搦手より根白にかけ入り、自ら槍おつとり、敵數多突伏せて宮部に力を合せけり。黑田孝隆同長政も手の者を引分け進み行き、道より村上彦右衛門と云ふ剛の者を遣して、唯今秀長六萬の兵にて後卷せられ候と呼はらせければ、宮部を始め大に勇み悅べり。長政の士栗山後藤川を渉り、義弘の陣に切つてかゝる。秀長の士大將根羽田長門守も千計の兵にて黑田父子に劣らじと槍を打入れ攻戰ふ。小早川隆景も三千計にて耳川に來る。秀長今敵陣にかゝるべきと存ずれども人々同心せられず、如何すべきと問はるれども、隆景冷笑ひて物をいは

ず。かゝる所に、井上伯耆就遠浦兵部宗勝古き存破の物具著て進み出で、島津はけふの客人なり。訪來るに出迎はずば弓箭の禮儀に違ふべし、軍評定と申事や候と、秀長を嘲りけれども、進むけしきのなかりければ、隆景馬を打入れて川を渡り、敵の後陣を取切らんと進まれければ、是より薩摩の軍亂れて敗北しければ、義弘の從子三郎忠親蹈止りて討死しけり。黑田小早川使を秀長の陣へ遣して、味方は八萬に餘れり。鐵砲三千計左右の嶺を取切打立るほどならば、義弘を打取ん事掌の中にありと申されけれども、知宣堅く留めて追はざりしかば、義弘敗軍の士卒を集め所々に火をかけ引取たり。後れたる士卒五十餘人戰ひ疲れたるを生捕て引來る。助けて歸さんいかにといへば、是見られよ、生きて又歸らじと紙に書きて髻に結付て候ぞ、疾首を刎ねられ候へとて皆殺されにけり。薩摩の人の勇氣こそゆゝしけれ。秀吉宮部には日本無雙といふ威狀を與へ、尾藤は領國讃州を召放されけるとかや。

巖石の城合戰坂小坂先登の事

秀吉島津を伐るゝ時、蒲生氏郷前田利長巖石の城を攻めらるゝに、氏郷の先陣蒲生源左衞門、此頃は坂小坂といひけるが、眞先に進んでかなにていちばんと、墨黑に書いたる白き吹貫を門の眞中に押立て、をめきさけんで相戰ふ。雨の降る如く鐵砲を打出せば、吹貫は芭蕉の秋風に破れたるがごとし。大音上て一足も引くな者共と下知し、面もふらず攻入りけるを、後陣より是ぞ聞ゆる蒲生が內の士大將、小坂といへる大剛の者よと口々にぞ譽めたりける。寺島美濃守此頃は半左衞門といひけるが、是は黑き吹貫おし立て坂に續きたり。利長の士松原久兵衞を始として、先を爭ひ攻入り、終に城を攻落して首四百餘打取りたり。秀吉氏郷に感狀を與へられ、小坂に金錢十匹羽織を賜りぬ。

一說に小坂を一番と記せり。秀吉坂を賞して刀を與へられけるに、坂申しけるは一番の賞にて候へば、栗田其一人なり。栗田は黑き吹貫にて候ひき。坂が吹貫白くて目に立ち申したるなるべしと讓りければ、秀吉愈大に感じ、刀を栗田に與へらるともいへり。

野矢甚右衞門功名の事

野矢甚右衞門は敵五人討取り、首五つ提げて氏郷の前に來る。氏郷たやすくも首多く取つたるかな、如何してと問はるゝに、敵の太刀先左の腕に當ると存じ候時射出せば、中らぬ矢はなき物なりとぞ申しける。

秋月種長降參の事

秀吉島津を伐るゝ時、秋月種長小熊の城を出て、秀吉の陣に至り降參しければ、秀吉對面降參の禮を受けて後更に心おく事なし。家に傳はりたる楢柴の茶入とて、名高き物有るとこそ聞け、あはれ一目見ばやと問はれしに、種長速に取來り候べしと云ふ。秀吉さらば使を以て取寄せよとて、秋月の從者を返してかの茶入を取來る。秀吉見て聞きしに優れる物なり。家の寶たれども我に得させてんやと懇にいはれしかば、種長既に兜を脫いで參り候上は、何條をしむべきやうの候べきと申す。秀吉殊

に悦ばれ、久しく我陣所に在て軍兵ども怪しみ危むべきよ、疾く歸れ、我を防ぎしは弓箭取る身のならひなり。降參の上は、吾恨み露も不殘、領地本のごとくなるべしといはれしかば、種長悦びて馳歸る。種長が士卒若し秀吉種長を害せらるゝならば、秀吉の陣にかけ入り切死にせんとおもひ定て居たりけるに、歸りて委しく秀吉の詞、茶入を乞はれし有樣を語りければ、皆思ひもよらぬ事よといひあへり。かくと聞傳へて、九州の敵多く戰はずして降參せり。

新納武藏守豪氣の事

新納武藏守忠元は、島津家の士大將なり。勇名をもて指を折る時、第一なりとて大指武藏と稱しけり。義久秀吉に降參の時、新納は肥後の堺泉の城にあり。一説に大日本國の軍を引受け一戰をせずして降參せ口と有んは、弓箭の無禮なり。疾く陣を寄せさせ給へ、一軍して討死仕らんとぞ申送りける。秀吉頓て師を城下に進めらるゝに、かの城の路三四里が程は、馬の鞍をおろし靱の紐を解くばかりの嶮難にて、輙く打入りがたし。武藏守暫く支へて後、一説に義久斯と聞て大に驚き、疾く降參せよと下知せられしといへり。今は是までなり。主君既に降參せし上は、家臣の身として爭でその心に背かんや、弓箭の禮義をもてかく申したるにてこそ候へ、日本の軍を城に引受くる事、士の一面目にて候とて城を出でにけり。

一説に、島津降參の後、鹿兒島の外の城々は堺つべき由秀吉下知せられしに、新納は城に籠り專ら防戰の手段をなし、其身も病と稱して引籠り居たりしに、秀吉聞かぬ體にして歸京ありけり。其後島津上京し武藏守も供したりしに、程經て秀吉何とて新納が城をば壞捨てず、合戰の設したるや怪しき事なりと問はれしに、武藏守人々の答を待たず進み出て、仰出されし旨義久下知せしかども承入れずして軍を志し居たりしに、蹈過ぎて通らせ給ひしこそ、恐多く候へども、恨しく存じ候へ。其仔細は城を開く事も、古より其例なき事にあらず。唯今日本の主と世に稱し申し候關白樣、はるかに筑紫のはてまで引出し來り、鹿兒島に申請け候事は島津が家の譽とや申さん。新納の城を破棄てずば惡き奴め蹈潰せとて、軍兵を向けられんは必定なり。其時一戰仕らば、關白の御馬を向けさせられたる城なりと末代までも申傳へなんには、子孫の面目是に過ぎたる事や候べき。討つて出で火花を散し一足も引かず討死したりとも、是又武名とや申べき。敵に箭一筋も射かけずして、城を破捨て候事口惜く候ひき。新納は日向口に在つて、宮部善祥坊を始として先陣の人々に迫合たりしに、島津降參のよし告來り引返し候ひぬ。島津が兵を以て日本國の大軍を引受け、合戰始終の勝利を計るべきには候はねども、新納肥後口を防ぎたらんには地は嶮なり、關白殿下いかに智謀たくみしくおはしまし候とも、輙く攻入り給はん事は思ひもよらざる事なり。嶺々谷々より種ヶ島の鐵砲を打ちかけ、思ひのまゝに先陣を打なやまし申すべきに、今に至りて殘念なる事どもなりと、恐るゝ所なく申しけるを、秀吉聞て、新納は聞き及びたる勇將なりとて、大言の咎は更になかりけり。

卷之九

黑田家岐井谷合戰の事　井小河傳右衞門野村太郎兵衞岐井友房を斬る事

秀吉黑田勘解由孝隆に豐前國を與へられしに、一揆處々に起る。中にも岐井谷友房はもと下野國宇都宮彌三郎友綱が次男、鎌倉の比より地を領したる子孫なり。毛利壹岐守勝信に誘れ地士をかり催し民屋を放火す。黑田父子は馬の丘といふ城に有りけるを、城下に押寄する。長政其時十六歳岐井を討つべきと勇まれけれども、孝隆同心せられず。長政其頃は吉兵衞といひけるが、若士ども引具し切つて出づれば、一揆ども一支もせず敗北するを追かけたり。岐井は山中の嶮路にそびき入れ、多くの大石の蔭に逃隱れたり。大野小辨といふ若武者眞先に進みたるを、一揆起合せ、七八人取卷きて馬より突落しけり。後藤又兵衞、小河傳右衞門、久野四兵衞馬の首を引返し敗北しけれども、長政の馬廻りは眞丸に成つて一揆勝に乘り、押詰めけれども槍を合す。一揆は木蔭谷かげより五人十人かけ出で、狩場の鹿を射るごとく、竹の鏃の矢にて雨の降る樣に射たりけり。長政馬より下り立ち討死すべき色なりしを、近習の者共馬に搔乘せ退きければ、一揆頻に追つかけけり。長政の馬矢に中りしかば、爰にて自害せんと言はれしを、菅六之介政利己が馬に召され候へといへども聞入れず。早上帶を解かんとせられけるを、三宅三大夫後に走寄り、大將の自害の所にては候はずとてかき抱き馬に打のせ、片手に馬を牽き片手に長政をとらへて、我等生殘りたるに殿を追討つとや念もなく候。地の利を見て引返し、一揆の奴原、追崩し申さんとて引退く。菅は長政の鞦の組違ひに手をかけて少しも離れず。木屋兵右衞門は、長政の槍を持ちて歩立にて續きたり。一揆長政と見知り餘さじと付慕ふ。三宅菅木屋を始として、岡本彌兵衞、小河久大夫、坂本七左衞門已下五十人計丸く成りて、思ひ切たる色を見て、靜に詰寄せて、二里計追かけて、其後は慕はざりけり。後藤はいかゞしたりけん、猩々緋の羽織を脫捨てたりしを、長政とらせ歸られけり。

後藤度々の武功有りて、一萬四千石與へ小隈の城にありしが、後に岐井谷の軍物語に及べば、俄に病出でしとぞ。木屋兵右衞門は長政に向ひ、後藤小河が有さま、大臆病の男にて候を、親子共に取分けて懇にせさせ給ひ候。此兵右衞門は誠にあるにもあらぬ體に候へども、敵追詰來りなば、一番に討死して御目にかけ候ふべし。さても〳〵歎かはしき御眼力やとあくまで罵りて退きけり。其後長政筑前を賜はりしに、小祿の士皆祿を增したりしに、兵右衞門は六百石に鐵砲の者二十人司れり。さのみ賞美なかりしかば、人々木屋に殿を岐井谷にて罵りたる事を、ねたく殿は思召して斯は有るならんといへば、木屋我も左思ふ事よ。此憤ならば、首をも刎ねられなんとおもへども、さもあらず。是より後も軍あらば度ごとに大言を吐きちらし、只今寵愛にほこる奴原の中に、武者振の惡き者あらば、恥を與へん事我思ひ出なりといひければ、聞者汝は下部のいはゆる口に倒されなるべし

と諫めければ、今の祿を削らるゝとも、口はきゝたき事よとて、笑ひけるとぞ。

孝隆は馬の丘の矢倉に上り、長政の敗軍を見て笑ひ居られしかば、側より危く候。疾く加勢をせさせ給へと口々にいひけれども、いや〳〵引きおくれたる味方の眞丸になり、靜々と道を引退くは吉兵衞なるべし。危げもなしといはれしが、果して長政事故なく引返されたり。長政敗軍を口惜しとて引きこもり、夜の物打被きて臥居たり。孝隆物主を呼びて弱敵をば恐れよ、初の勝を勝にするものなり。勝すぐれば必敗の本なりと戒められけり。鹽屋善七郎といふ侍、長政の近習に仕へしが、京に使に行き、此日の暮頃に歸りて、長政の寢所に行き、けふの敗軍是非もなき事に候。さばかりの者共、小辨を捨殺し殿をも捨てゝ逃げたりと承り候。殿もよき討死の所にて候ひき。何とて敵に後を見せ給ふや。父祖の高名に瑕付申すこそ口惜しけれ。善七郎が御馬の傍に在るならば、槍を合せ一揆の奴原追立て引取るべきに、後藤めらきたなき振舞に候はずや。重ねて一揆と軍あらんに、必死と思召し定められよとて坐を立ちければ、長政も髻をはらひ思ひ切たる體なり。翌日善七郎又申しけるは、あながち口惜となし思召され候ひそ、一揆押寄せ候はゞ、眞先かけて切崩し恥を雪ぎ給へ。善七郎は御馬の先にて討死せん。逃げたる奴原も屬まされて軍するほどならば、鬼神なりとも恐るゝに足ずと云慰めければ、長政起上り、物語せられけり。長政は面目なしとて、父の前に出でず。孝隆扨は必死を期したるなりと察し、老功の者餘多長政に差添へて、はやりたる下知を禁ぜられけり。一揆又上毛郡へ押寄せければ、長政火隈の海近き所の山に上り待ちかけて思ふ圖に引受け、一同に乘出し馬のかけ場よかりければ、縱横に乘割、一揆敗北する處を追立てたり。鬼木鹽田などいふ者討たれ散々になりにけるを、長政鹽田内記を手づから討取り、尙もかけんとせられしを、老臣ども馬より飛下り押へて陣を整へけり。鹽屋善七郎は敵の中に乘入り鬼木掃部が首を取り、右の方を見れば、長政敵の首を取つたりしかば、又馬引寄せ打乘り、追詰めて首二つ取りしが、痛手負ひて精神も亂れたるが、尙も若殿の功名を問聞きて、嬉しや先日の恥辱を雪がせ給ひぬ。此上はおもひ置事なしと云ひけり。長政善七郎が枕元に居られしかば、長政の手をとり、此後能心得給へ、殿に討死し給へと申者はなき事に候と云へば、長政涙を流し、汝を先だつる事の殘多さよと咽ばるれば、善七眼を見開き、先の頃諫め申せしは、必死を思ひ定めたるゆゑに候。今度の高名こそめでたけれ。今生の御目見只今を限りなり。人は一代名は末代と申す事の候と、いひも終らず空しくなりけるとぞ。比類なき者なりと云あへり。翌日孝隆火隈に來りて對面し、若き者は懲る事なくては、思慮の練れぬものぞかし。終の勝を計れ、只勝べきとのみ思へば敗を取るなり。良將は時により緩に見ゆれども、率爾の軍はせざるゆゑに終の勝を全うするよと敎へられぬ。長政又押寄せんと云はれしを、孝隆制して要害を設け、兵粮の道を塞ぎ馬の丘に歸られけり。斯て一揆勢ひ盡きければ、毛利輝元を賴み和平しけれども、友房は病ひとて出でず。中津川より三宅三大夫、岐井谷より傳法寺兵部、使者往來して、互に物語しけるに、或時三宅言ひけるは友房

内室なしと聞く、勘解由に妹あり、婚禮あらばいかにと云ふ。傳法寺夫は悦ばしき事なり。能はからはれんやといふに、三宅われ年若ければ、老人と相計りてこそといひけり。傳法寺は敵の妹を人質に取らんは然るべしとや思ひけん、わりなく三宅を頼みけり。三宅我主君の心をもしらで容易にも申出でたる哉、事調はずば面目も候はずなどいひて、長政に斯と告げて孝隆にも告遣りしかば、密謀をなし、三宅に孝隆書を與へ緣を結ぶは、末頼母しき事なれども、例の麁忽ならんとぞ書れける。三宅傳法寺に語りて潛に其書を取出して見せ、吾をば常に麁忽者と戒め候が、此度も又しかなりといへば、傳法寺是は既に聞屆けられたるなりと悦び、かくと友房に告げて是より心置なく、中津川へ出づべきにぞ定りける。三宅又迎にゆけば、友房三百人計にて山中を打立ちけり。三の丸の大手にて人を留め次第に減じてけり。本丸の書院にて對面あり。吸物を出して酌は小川傳右衛門なり。野村太郎兵衛肴をはさむを相圖に、傳右衛門一の太刀太郎兵衛二の太刀と定めたり。長政盃をさしける時、野村肴を持ちて出でけるが、持ちたる臺を友房に投付飛びかゝり眉間を切る。小川おくれたりと脇指を抽いて切付くれば、さばかり逞しき友房卽ち討れけり。供の者をば、所々に手當して物具したる者共槍ずくめにして殺しぬ。岐井谷へ軍兵を指向けて打滅されけり。小川野村一二の定有しに違ひたりしかば、小川怒つて其夜野村にいひけるは、岐井を吾初太刀たるべきに先を越され面目を失へり。いかにと問ふ。野村打笑ひ、左思はるゝは理なり。能く聞かれ候へ、年をいへば吾は弟なり。汝功名は四度に及び我は唯二度なり。是ほど劣りたるものゝそなたに先をさせて、我後れなば是こそ面目を失ふといふべけれ。栗山か又我兄の多兵衛とならば、前後をあらそはれん事似合たるべし。かく劣りたる我に爭はれんはおとなげなし。只免され候へといひければ、小川素より心易き事なり。但し心安くも切られたり。尤とていよ〳〵親しみければ、人々野村が理も聞事なり、小川もよく聽入れたりとぞ感じける。

豐臣關白北條征伐出陣の事附本多重次放言の事

秀吉北條を討たるゝ時、諸將浮島が原に竝居て秀吉をまつ。秀吉糸緋縅の物具著て、唐冠の冑黃金をちりばめたる太刀佩きて、土俵の大きなる羽壺に征矢一筋指し、仙石權兵衛が參らせし朱の滋籐の弓持て、七寸ありける馬に、金の瓔珞の馬甲かけ、靜に歩ませて打通られけるが、東照宮信雄と共に出迎ひ給ふを見て馬より下り、いかに貳心有りと聞きたり。いざ一太刀參らんと太刀の柄に手を懸けらる。東照宮左右の人に向はせ給ひ、軍始に太刀に手を懸けられ、門出の目出たく候と高らかに仰有りければ、秀吉何ともいはずして、又馬に打乘り通られけり。

秀吉此出陣の時、濱松の城に宿せらる。本多作左衛門折節御使に參りて歸りけるが、旅裝の儘にて諸將の中に進み出で、東照宮を見かけ奉りて、いかに殿はいつよりかく愚になり給へるや、國を持つ人の城を人にかす事や候。さらば女房をも人にかし給はんかと罵りける。東照宮彼は本多作左衛

門と申す剛の者にて候が、家久しく昵じくて、只今のやうなることを申すにて候。無禮の詞を申し候と仰有りければ、人々承り、偖は承り及びたる本多殿にて候ひけるよ、かゝる事申す人多く有るべきやと賞しあへり。作左衞門物あらき人なりけるに、三奉行の中に命せられ、政を執りしに、甚仁愛の事のみにて獄訟を斷るに理正しく、四民昵き服しけり。東照宮の神慮淺からぬ御事なり。

井伊直政關白を討んと言れし事

東照宮小田原に向はせ給ふ時、先陣は榊原康政と命ぜられ、井伊直政御旗本と定めたまふ。直政毎も先陣を好まれしに、此時は少しも辭退の氣色なかりしに、小田原にて秀吉かたへの人僅に引具せられしを見て、唯今取圍みて討取るべき時に候と進め申せしを、東照宮聞し召し入れられざりしかば、さらば先陣たらんといはれしとぞ。

鳥井源八郎先登士志を論ずる事

山中の城を責むる時、木村常陸介師春が士鳥井源八郎先がけして城に付名乘りけり。羽柴藤五郎秀一が士磯野平三郎續き來り、汝は首取源八と世にいはれたる豪の士なれども、田舍そだちなる故武功を辨へず。斯る場にては人はあきれ氣後れする物なる故、爰にて名乘れば、是に心付て我先にと進むゆゑ、思ふまゝなる獨功名もならず。物の譯もしらず名乘るまじき處にて名乘るなりと笑ひければ、鳥井聞きて、平三郎は志の士と聞きしに眞の志士をばしらざるよ、人のあきれたる時は、尙高聲に名乘りて、人に心を付力を添へて、多くの人を用に立つるこそ武士の義なれ、獨高名をせんとするは小事なり、いふに足らずと答へしかば、平三郎言ふ事なかりけり。

南部越後攻口の事

小田原を圍む時、國清公の攻口は搦手の山の上なり。目の下に見おろし鐵砲を打入れけるに、城中よりあげ矢にうつ鐵砲烈しく、士卒進み兼ねたる時、南部越後銃口を空に向けて打たせたり。其玉雨の降るが如くなりしかば、城中ひるむ所を見濟し、鐵砲を山ばなにならべ、透間なく打たせて攻破りけり。

上樣日和といふ事

同時九鬼大隅守嘉隆日本丸といふ大船を乘廻し、南の海上を取卷けり。此所はあら海にて東風吹時は波浪山嶽を倒しかくるが如し。船をかけ並ぶる事思ひもよらぬ所なるに、秀吉城を圍まれし間、五十餘日風靜に波穩かなり。是よりして、小田原海邊風なき日を上樣日和といひならはしけり。

伊奈熊藏兵粮を司る事

同時東照宮伊奈熊藏を召して仰せ出さるゝ事どもあり。其時伊奈去年より兵粮の用意して、沼津に運びたりき。然るに此宮根山中に穀物の價江尻沼津と相同じ。遙に運漕せんより、爰にて求むる事然るべし。心得がたき事なりと申しけるを、東照宮聞し召し、夫は長束大藏大輔が謀なり。長束は武功

勝れたるにもあらざれども、斯る謀は長じたる者なれば、秀吉城主として寵せらるゝぞかし。汝が職にては兵粮運漕の事よく心得べきに、心得がたしといふは、吾も心得がたしと仰せ有りければ、伊奈汙を流して退出しけり。

蒲生氏郷の陣夜討の事 並 氏郷金の三階菅笠の馬印を免されし事

同時蒲生氏郷金の三蓋菅笠の馬印ゆるされ候へと申されしに、秀吉夫は聞ゆる佐々成政が馬印にて、たやすくは免しがたし。今度小田原の武功によりて、望む所にまかせん物をといはれしかば、氏郷今度の軍に人の目を驚かすか、さらずば討死とおもひ定め、繪像をかゝせて、日野の菩提寺に籠め打立たれける。斯て五月三日の夜かき曇りけるに紛れ、城中北條十郎氏房が持口より夜討をしたりけり。氏郷も今夜は夜討入るべきよ、懈るなと下知せられしに、果して廣澤兵庫秀信一作助重大將にて押寄せたり。氏郷の物見の兵町野萬右衛門に行逢ひぬ。弓取直し指詰引詰射けれども、叶はずして引返せば、敵進み來て、柵の木を打破る。蒲生源左衛門郷成、田丸中務直政、町野右近幸知切つて出で、爰を專途と戰ひけり。氏郷銀の鯰の尾の冑の緒をしめ、

氏郷の許に新に仕ふる士に、吾家にて銀の冑を著たる兵、度ごとに眞先に進み出て働くなり。此男に劣らずふるまふべしと言はれけり。氏郷彼冑著て、毎も眞先かけられしとぞ。

兼ねて一丈餘の槍を設け置かれしを提げ、追立々々進まれけるに、廣澤兼ねて鐵砲を後陣に並べ置きたれば、追來る寄手を打立てけり。廣澤は聞ゆる剛の者なるが、槍を横たへ片足を堀の中へ踏入れ、大音上げ、一槍參らんと呼はるを、氏郷聞きて飛びかゝり突合ひければ、蒲生左衛門郷可、同五郎兵衛郷治、佃又右衛門等かけ來りをめきさけんで攻戰ふ。廣澤は今宵夜討の大將廣澤兵庫一番槍と高らかに呼はりけるを、氏郷目にかけて堀の中に飛び入つて蹴ちとらんと、面もふらず冑の鍬を傾け、槍を取延べたゝき立てられしに、敵兵二人氏郷の槍を取らんとする事七八度に及びしかば、氏郷廣澤をば、討ち漏されけり。寄手餘りはげしく戰ひければ、廣澤もかなはじとや思ひけん、城をさして引退く。氏郷いづくまでもと云ふまゝに、先に進んで追れしかども、門を閉ぢて鐵砲を打出せば、引返されしに、冑に矢二筋折掛け、物具に槍の疵透間なく十文字の槍ささらの如くなりしかば、秀吉感狀にかの馬印免されけり。

武藏の國八王寺城落つる事

武州八王寺の城主北條陸奥守氏昭は小田原に有りて、家臣留守したりしに、前田利家上杉景勝攻めんとて、先に降參しける北條氏邦に使を城にやらせ、小田原既に破れぬ、とく城を渡し候へと言送る。中山近藤狩野等從はず。氏昭降參せば、證書を賜はりて城を出づべき旨下知すべし。然らずして降參せば、士の瑕瑾なり。氏邦が如き臆病者は一人も城中に候はずと答へけり。利家景勝も其義に感ずといへども、扨止むべからざれば、一萬五千の兵をもて圍まれけり。甘糟清長攻入つて火をかくる。狩野

一庵、近藤出羽助實、金子三郎右衞門家重死狂ひに切て出で討死す。横地監物は氏昭の第一の長臣なり。火もえ上れば今日を限りに散々に戰ひけるに、寄手討たるゝ者多し。中山勘解由家範は武勇の將、殊に八條修理滿朝が馭法を傳へ、關東無雙と世に稱せらるゝ人なり。大敵に少しもひるまず、二百計にて突いて出で爰を最期と切つて廻るに、寄手新手を入替へ攻めければ、僅十五六人に討成されたり。利家誰か中山ゆかりあると問はるゝに、松山の降人根岸主計定直が妻は、中山が妻と兄弟なり。小岩井雅樂助は中山が馭法の弟子なる由を申す。利家疾く中山に味方に屬せよといふべしとて、兩人を城中へ入れられしに、中山既に自害して、其妻も自害したるが、まだ息かゝりて有りければ、詞を交して馳歸り、斯といへば、利家大に惜まれけり。監物は切りぬけて逃出でけり。北條家關東の城々多しといへども、豆州韮山の城の外は多く降參しけるに、八王寺の兵城を枕に戰死せし事を、東照宮聞し召し、其義を感じ思召され、中山が嫡子助六郎昭守二男左介信吉に祿賜はり、昭守が子信守大阪の軍に功有り。信吉は後水戸中納言に仕へて備前守と稱す。狩野一廣が子主膳も仕へ奉りけり。

大音藤藏雨森彦三郎功名の事

八王寺の城攻に、城兵切つて出で、死狂する時、利家の小姓大音藤藏一番首を取りたる處に、雨森彦三郎續きて首取りて利家の前に至つて、實檢に備ふ。一番は大音なりと申して、二番首の帳に記させたるを、利家大に感せらる。其比大音は利家の勘氣を蒙り居たる故、數度高聲に姓名を名乘りしかば、諸人一番乘といふ事を知つてけり。

信雄卿那須に謫せらるゝ事

北條亡びて後、秀吉石垣山の本陣に諸將集りて酒宴に及ぶ時、信雄は舞の上手と聞き、あはれ一曲觀申し度しと、秀吉いはれしに、信雄吾を侮る事口惜しくや有りけん、不吉の詞を舞はれたれば、秀吉かゝる悅の中に忌々しき事ども心得ずとて、那須に追ひやられけり。此時までも千餘騎の士を具せられしが、僅に打連れて那須に赴かれぬ。時を計らず勢を知らず、無益の空言に國を失はれし事のうたてさよと、人みないひあへり。

坂部岡江雪免さるゝ事

北條滅亡の後、秀吉坂部岡江雪齋に汝先年北條の使として上京し約せし所、忽ち背きて名胡桃の城を取る事、氏直の姦計にや、又汝が詐なるかと責問はるゝに、直に申さんと答へしかば、秀吉大に怒り、手枷足枷を竝べ、江雪を呼出し刀を奪ひ取り、左右の手を引張庭上に引居ゑて後、秀吉罵つて曰く、汝が約せし處に背くこと、誠に憎むに餘り有り。且日本國の兵を動かし、主君の國を滅せし事、汝に於いて快きやと譴めらるゝに、江雪色も變せず、氏直更に約に背くの心なく候。遐鄙の士愚にて名胡桃を取り、終に弓箭に及んで北條の家亡びぬる事、江雪が思慮いかんともすべき樣の候はず。賊に家の亡ぶべき運命にや候ふらん。されども日本國の兵を引受くること、北條家の面目なり。此外申すべ

き事なし。疾首を刎ねられ候へといふ。秀吉顔色打ちとけて、汝は京に引上せ磔に懸けんと思ひしに、大言を吐きて主君を辱しめず、大丈夫といふべし、命を助けん吾に仕へよとて許されけり。坂部岡を改めて岡と稱しけるは、此時よりの事なり。

關白鶴が岡參詣の事

秀吉鎌倉の鶴が岡に詣て、八幡宮の戸を開かせ、頼朝の像を見られしが、脊中を打ちたゝき、微賤より出て日本を掌に握る事、我と御邊と二人なり。然れども頼義父子鎮守府將軍として東國の者ども久しく親しみ多かりき。蛭が小島より兵を起されしに、關東の靡き從へるも謂れなきに非ず。我は土民の中より、斯日本を思ひの儘にすれば、功尚高しといはれけり。

關白宇都宮にて佐野天德寺と物語の事

秀吉陸奥に赴く時、宇都宮にて佐野天德寺を呼び、

野州佐野辛澤山の城主佐野小太郎藤原宗綱、天正十三年討死して子なし。家臣連判の起請文を小田原に送り、氏政の弟氏忠をもて家を繼ぐ。宗綱が伯父天德寺了伯は佐竹の一族の中を乞ひて、佐野の家を嗣がんとすれども是を用ひず。了伯は夫より京都に赴き、黑谷に閑居せしを、秀吉北條を討たるゝ時、鄕導とせられしなり。

物語させて聞かれしに、武田上杉の弓箭盛なりしことを申しければ、秀吉冷笑ひ、いかに天德寺誹信信玄といふ坊主も疾死たるこそ幸なれ、今にながらへ居ば、一人には薙刀をかたげさせ、一人には吾輿の先なる朱傘を持たせて、馬の前に召具すべきに、此世になければ力なし。何條車がかり坐備みなたはことなりとぞいはれける。

蒲生氏鄕大志の事

秀吉陸奥に赴き、蒲生氏鄕に八十萬石の地を賜はりけり。氏鄕退出し柱に倚りかゝりて涙ぐみけるを、山崎の某居寄りて辱く思はれん事尤なりといひしに、氏鄕私語きて、吾都近き所にて小き國一つ賜らば、終に天下に旗を揚げなんに、邊鄙に棄てられたれば、何事か仕出すべき。志の空しく成りたるによりて、おぼえず涙の流るゝよとぞ語られける。

奥州葛西大崎一揆の事

天正十八年奥州葛西大崎一揆の時氏鄕名生の城にあり。會津に飛脚をもて鐵砲の玉藥を人に見とがめられざるやうを計りて、運び來れと下知せられしかば、山伏をかたらひ笈の中に玉藥を入れて、頭巾螺貝杖を携へて、湯殿山に詣づるありさまして送りけり。是蒲生左文が謀なり。

蒲生家の士大將軍兵調練の事

蒲生氏鄕笠井大崎にての軍に、佐久間備前同内膳兄弟を先陣とせらるゝに、下知する事氏鄕の心に叶はず。此兄弟は元秀吉に屬せしが、秀吉より氏鄕に賜りたる侍大將なり。氏鄕明日の軍は、神田修理、

外池信濃、岡野左内、蒲生源左衛門等先陣せよ。佐久間兄弟は見物せよとぞ下知せられける。先陣の士大將六人相集り、佐久間兄弟の軍立あしきとて斯仰承りぬ。おの〳〵討死したりとも、己が躬を捨てゝ只汚名を出さゞるまでの事にて、斯仰を承りたるかひもなくては、御大將の恥辱なり。然らば進退の節内ならしせずば叶ふまじとて、先陣の軍兵を打具し、平野に押出しかけ引のならし五度に及びけれども、尙調はず。六人そこにて、明日の軍は殊に大事なる故、かように馴しに及びぬるよ。人々の進退以の外調はず、いかにも能心得候へと、再三詳に申聞かせ、さて采配を取り下知するに、進退節にあたりしかば、さらば明日の軍はおもふ儘なるべしと悅びいさみて、果して敵を切りなびけ大勝を得たり。淺野長政秀吉の命にて陸奥國に有りしかば、其軍の有樣駈引の圖に當りたる、終に見聞に及ばざる所なりと褒められたりとなり。氏郷も大方ならず悅びて、六人に感狀を與へて、いろ〳〵の物添へて賞美ありけり。

氏郷伊達家の刺客を免されし事

伊達政宗蒲生氏郷の威に壓さるゝ事を心中に深く憤りて、氏郷を殺すべき事を思案して、數代家に仕へし者の子に、清十郎といへる十六歳に成りける者、容貌勝れて艶なりしに、密に工める事を語り聞かせ、田丸中務の少輔が兒小姓に出して奉公させられけり。田丸は氏郷と姻家の親みあれば來られん時便を伺ひて刺殺せとの事なり。清十郎が父の方へ遣しける事を、關所にて改め見しより事起りて、其謀の泄れたりしかば、清十郎を獄に押入れ、此事を秀吉に告ぐるといへども、秀吉遠く慮りに強ひて伊達家と和平せさせられぬ。氏郷清十郎を呼出し、吾過ちて罪なき義士を獄に入れ辱を與へたるよ、其君の爲に命を捨てゝ忠をいたす賞するに餘りあり、とく〳〵伊達家に歸るべしと、禮義正しくもてなして歸されけり。

記せし書に、清十郎が姓をもらしぬ。をしき事なり。

氏郷佐々木が鐙を細川忠與に贈らるゝ事附黑塚の歌の事

氏郷の許に佐々木が鐙といへる名高き器あり。細川忠與いと懇に我に賜はれと乞れしかば、亘理某是は世久しく傳はる物にて候。似たる鐙を贈り給へといひければ、氏郷

なき名ぞと人にはいひてやみなまし心のとはゞいかゞ答へん

といふ歌の恥かしきよとて、かの鐙を贈られけり。

蒲生はもと、江州の士にて佐々木の臣なり。氏郷伊勢の松坂十二萬石なりしが、後會津を賜りける時は、四十歳の頃なり。佐々木承禎が子四郎太閤の時、僅二百石與へ、太閤の咄の席に呼出されしが、伏見にて太閤の前より退出する時、氏郷昔の故に四郎が刀を以て從はれしとなり。又安立郡に川あり、向ふに黑塚あり。安立は氏郷の領地なりしに、黑塚は伊達政宗の領地なりとて、爭の有りしに、氏郷平道盛の歌に、

みちのくの安立が原の黑塚におにこもれりといふはまことか
と讀める事あり、いかにと申されしに、聞く人の、黑塚は安立が原に屬したる事分明なりとて、政宗爭ひをやめてけり。

本多忠勝萬喜が舊臣を呼出されし事

本多中務大輔忠勝に上總の小瀧十萬石を賜はりしかば、小瀧に赴き、土岐彈正少弼頼定入道慶岸の士どもを呼出して祿與へたり。彈正は同國の萬喜の城に居し故、世には萬喜少弼と稱して武勇の譽有りし人なれば、此を問ふに舊臣申すは、萬喜常に房州の里見義高と弓箭を取り候が、敵を怠らせん爲に舞臺を設け踊をさせ、城門を明かふるとて果さず、船著のけはしきを平し候。里見が將正木大膳時綱寄來り、船より上る時、慶岸城にかざりたる紙旗を絹の旗に立換ふると等しく、古き門より不意に打て出で、忽切崩したり。是より土岐が地に攻入る事候はずと語りければ、忠勝聞きて、土岐は甲越の兩雄將にも劣らぬ人なりと稱し、其後舊臣に其家の事を問ふ時は、必ず萬喜殿とぞいはれける。

東照宮武田北條の跡御制度の事

勝頼亡びて後、東照宮甲斐を治め給ふに、法度は信玄より用ふる處を改易ふる事なかれ、年貢は少く納めんと仰せ出されしかば百姓大に悅合へり。小田原亡じて後、其地を治め給ふも亦同じ。諸民大に悅び、數百年の恩義相結べるに同じかりき。

東照宮武田の舊臣を召して御物語の事

同じ頃、東照宮武田家の士、横田甚右衞門等を召して、信玄の事ども物がたりさせて聞し召さるゝ時、御坊の時火繩いかゞしたると御尋あり。柿の澁に石灰を入れて、火繩を染め候へば年經ても用ひられ候と申す。横田又は城意庵などに、信玄の事をば御坊と仰せ有りけるとぞ。又武田家にて鏃を綏くつめ候は、敵の肉の中に鏃の殘らん爲なりと申すを聞召し、士の軍に臨むは、みな其君の爲ぞかし。射伏せたれば吾軍の利となるべし。後まで人を苦しむるは、不仁の業にこそあれ、今日より我家の士は、鏃を堅く詰めよと仰出されけり。

東照宮物具の御物語附小野木笠の事

東照宮仰に、物具の美麗なるは無益の事なり。又重くするも益なし。井伊兵部は力も有りて重き物具しつれども、度々手負ひしなり。本多中務はさもなくて薄手負ひたる事もなし。唯戰ひ易からんやうを心懸くべきなり。下部は薄き鐵の笠を著せたるぞよき。急なる時は仮をも炊ぐべしとぞ。

鐵の笠は甲州にても下部は著たりしとかや。畿内の方にはなかりしに、丹州龜山の小野木縫殿助、足輕已下の者に鐵の笠を著せける故、其頃は小里木笠といひけるとなり。

秤御定の事附一歩金辨當挾箱始りの事

東照宮關東御打入の後、甲州に在りける秤を造る。守隨兵三郎といふ者、井伊直政に申して、關東黃

金白銀等を商賣するに定りたる秤を用ひられん事を願ひければ、それより今の制は定めさせ給ひけり。

京に後藤德乘といふ彫刻師あり。東照宮關東御打入の後、德乘が弟子を召しけるに、遠國を嫌ひしに後藤庄三郎、われ行かんとて關東に至り、寵せられしかば、後天下を知し召さば、願の一つ叶へ給へと申す。何事ぞ易き事よと仰せ有り。さらば黄金を四つに切りて通用せばやと望けり。果して海内東照宮に歸しければ、庄三郎が志の如く仰せ出されけるより、今の壹歩金といふは始まれり。但し甲州には信玄の時碁石金といふ物あり。されば夫より前には碁石金の外にはなかりしにや。一歩金は碁石金に倣ひたるにやあるべき。又信長の時今の辨當といふものは、安土より始まれり。其はじめは小芋ほどの中に、いかで色々の物入られんとて、人信せざりきといへり。挾箱も同じ頃造り始めたりといふ。又大阪の津田長門守始めて造り出すともいへり。

酒井金三郎本を忘れざる事

原吉丸酒井金三郎共に東照宮の近習に仕へ申しけり。伏見にて御庭に出でさせ給ふ時、原御太刀を持ちて庭におり、草履はくに遑なく、跳にて蒔石の上に有りけるに、酒井草履をあたへければ、人々譏ると聞し召し、仔細を御尋ねあり。酒井承り、原は元下總の笛井の城主原一部が子にて候、臣が先祖原に仕へしと承りぬ、昔の主君のゆかり跳にて炎天に居たるを見るに堪兼ね候と申しければ、本を忘れざるの士なり。吾子孫にも如レ斯なるべしと、大に御感あり。

成瀬正成忠信の事

秀吉大阪にて、馬揃の時、千貫矢倉に上り覲られしに、黒き馬の太くたくましきに乘りて、紅の沓を後輪に付けたる者あり。何者ぞと問はるゝに、德川家の士成瀬小吉なりと申す。祿はいかにと問はるゝに、東照宮二千石與へ置きたりと仰せられしに、秀吉あはれ吾に奉公せば、五萬石與ふべきといはれしに、其後東照宮成瀬を召してしか〴〵の事ありき、秀吉に仕へなんやと仰有りければ、成瀬承り、こは御情なき事に候と申す。いやとよ汝秀吉に奉公せば、我爲にもよかりなんと仰せられしに、成瀬涙を流し、不肖の身祿を貪りて主君を捨て奉らん者と思召しけるを知らざりけるも愚に候、只疾自害して心をあかさん物をと申しければ、其よしを秀吉に御物語有りけり。後に東照宮長臣數多召され古に聞きし三尺の孤を託すべきといひし人は、成瀬にてこそあれと仰せられけり。小吉正成後隼人正といひしなり。

東照宮相模境御打廻りの事

北條家亡びて後東照宮甲斐相模の境三增嶺を御打廻りの時、過ぎし永祿年中の戰場を御覽あり。禿山なりし故、信玄兵を押通し、たやすく軍に勝ちしなり。北條家武略に拙く山林を伐りあらしたる故ぞかし。生茂りたらんに、いかで信玄陣をしくべき、山を林にせよと仰出されけり。

豐臣關白五腰の刀の主を察せられし事

秀吉伏見にて、ある日廣間に出でられしに、五腰の刀を見て、試に其名をいはんとてさゝれしに、違はざりければ、前田玄以誠に神智のおはし候よと驚きたりければ、秀吉笑つて、何の仔細もなきぞとよ、秀家の美麗を好むが故に黄金をちりばめたる刀是なるべし。景勝は父の時より長劔を好めり。寸の延たる刀を是にあてたりき。利家は又左衞門と云ひし時より、先陣後殿の武功により、今大國を領すれども、昔をわすれず。革卷きたる柄の刀是他の主に非ずと思へり。輝元は異風を好む。異なる體にかざりなせる刀是ならん。江戸大納言は大勇にして一劍を賴むの心なし。取繕ひたる事もなく、又美麗もなき刀其志に叶ひたり。此を以て察しけるに、違はざりけりと言はれけり。江戸大納言とは東照宮の御事なり。

竹俣兼光の刀の事

謙信の許に、赤小豆粥、竹俣兼光、谷切とて三つの刀あり。竹俣兼光はもと越後の百姓持ちたりしに、ある時山中を通りしに、雷烈しく鳴りたりしかば、あはや落ちかゝるかと思ひて刀を抽き、頭に指當て目をふさぎ居たり。やゝ有りて空晴れしに、刀の鋒より血流れ殷にそみたり。又或時大豆を袋に入れて、歸るさに袋の綻びより一粒づつこぼれけるが、鞘にあたりて二つに成りしかば、怪しみ見しに、鞘のわれて刀の縱に出たりしに當りし故なり。雙なき刀とて竹俣三河の守乞得しが、謙信後にさゝれけり。弘治年中川中島の合戰に、信玄の兵輪形月平大夫といふ者、鐵砲をもてねらひしを、謙信馬を乘寄せ、一刀に切伏せてかけ通られけり。後に甲斐の兵ども、是を見るに、輪形月は物具かけて切られ、持ちたる一兩筒は二の見通の上より切放したり。いかなる刀にてかくは切られしといひあへるに、則彼兼光の刀なりけり。景勝の時京にて研せしを、越後にて人々に見せて、京の水にて研ぎたれば刀の光殊更勝れしと悅ばれしに、三河守熟々と見て、此は贋物にて候。仔細は此刀はばきより上一寸背に馬の毛の通るべき針の穴の候。是を知る人外にはなしと申す。さらばとて、竹俣を京にやりてさがし求むるに、眞の兼光の刀を清水の南坂より取出す。かくと石田三成に告げて、贋物したる者十三人日の岡にて死刑せられけり。竹俣越後に持ち歸りて、かの穴に馬の毛を通して景勝に見せけり。其後此刀太閤に奉る。秀賴亡びて落武者取りて和泉河内の方へ行きたりと聞えしかば、此刀を獻ずる者には、黄金三百枚賜るべきよし仰せ出されしかども、其行方終に知る人なしとぞ。

本庄正宗の刀の事

本庄越前の守繁長は越後の勇將なり。後景勝上杉十郎憲景が祿を本庄に與へらる。本庄出羽の庄内大寶寺義興と戰ひ勝ちて、二男千勝丸に庄内を與へけり。本庄最上義光と出羽の千安が表にて軍しける時、最上の軍敗北せしに、義光の士大將東漸寺右馬の頭口惜しき事に思ひ取て返し、首一つ提げて越後の兵に紛れ、繁長を目にかけて、只今敵の大將を討取つて候。實檢に入れ奉らんと言つて馬に鐙を合せ、駈寄せて正宗の刀を以て胄を打つ。明珍の胄なりしかば、筋四つ切削りたり。繁長右馬頭を切つて落し

首に添へて景勝に出したり。刀をば本庄に返し與へられしが、後故有つて東照宮の御刀となり、本庄正宗といへるは此刀なり。

冑の名樣々有りし事

加藤嘉明の冑は形を富士山に造りなして、名をも則富士山といふ。具足の胸に天人の雲に乘りたるを蒔繪にしたり。竹中重治が冑は一の谷、明智秀俊が冑は二の谷といふ。攝州一の谷二の谷相竝べり。又柴田伊賀守勝豐が冑は、鐵蓋が峰といふ。是は一の谷より高く峙ちたる山なれば、斯名付けしとかや。此徐浦野若狭守が小水牛、黑田長政の大水牛、日根野が唐冠の冑、原隱岐守が十王頭、福島正則の四また鹿の角、本多忠勝の佐藤四郎が冑、蒲生氏郷の銀の鯰尾、伏木久内がわり蛤、武田信玄の諏訪法性、秀吉の八日の月、加藤清正の長烏帽子、矢田作十郎が鯉の冑、藤堂新七が帽子などいへる多し。細川忠興の山鳥の尾の冑といへるも名高し。關が原の軍に忠興かの山鳥の尾の冑を著、銀の天衝の指物なりしに、遙に見て唯舞鶴のやうに有りけるを、東照宮冑と指物と映りあひて面白しとて、乞得させ給ひ、臺德院殿に參らせらる。

伊藤七藏功名の事

信長江州小谷の城攻に、伊藤七藏先がけしたるに、從者取付きたる故、上帶きれて、刀も脇差も塀下に落つ。七藏少しもひるまず乘込んで、柵の木取つて敵三人たゝき伏せ功名しけり。七藏父を若狭といふ。相州の人にて武者修行し、尾州前田村に居ける頃、信長呼出されけり。七藏尾州三本木の軍に事急にして編笠をかぶりながら、一番槍を合はせける故、信長大に賞美して編笠と呼ばれけり。後秀吉に仕へて度々功名有りしかば、紫紬井筒の紋廣袖の小袖を與へられければ、甲の上に著たり。秀吉の旅奉行と成りたり。

井伊直孝用意の事

井伊直孝のいはく、人毎に具足櫃を持たせて、早く取出す志を用意する者あり。取出す間も遲きほどの事あらば、何時も素肌にてかけ付けてこそよけれ、具足を著たると著ざるとの差別なき事なりと申されけり。

卷之十

馬場重介武功の事

馬場重介職家は、陸奥栗屋川貞任が裔孫にて、備前邑久郡北地村に來り居りしが、其の後も安部といひける。京都より來りし馬場氏の人豐原に居て、其の女を妻として、遂に馬場と稱しぬ。重介稚名を岩法師といひて、十三歳にて邑久郡戸石の城主浮田大和守に奉公し、天文十四年浮田直家は乙子の城に在りて大和と軍あり。直家の士池田太郎三郎と岩法師東北地村荷蓋の畠にて、槍を合せ疵を蒙りて戸石の城に歸る、今年十四歳なり。大和の守勝に抱上げて疵の口を自ら吸はれけり。無雙の剛の者なりとて名を二郎四郎と改めさせられぬ。程なく直家、花房又七、近藤五郎左衛門（一説に六星の邸左衛門）星野十郎を大將にして戸石を攻む。次郎四郎白圃の腰ざし指いて、一の城戸口に出る。近藤見ていかに引くか進むかと詞をかくるに、次郎四郎軍場に臨んで引くと云ふ事やあるといひも終らぬに、花房星野共手利の射手にて、弓取り直し是を射る。花房が矢は中指にあたり、星野が矢は次郎四郎が持ちたる楯をもとはぎまで射貫く。次郎四郎物ともせず、敵を追拂ひて歸れり。天文十七年赤阪郡鳥取の砦を大和守攻めて軍あり。次郎四郎膝の口を篦深に射させ、二町計引き退きたる所に、味方に泉養坊といふ山伏來て其の矢を拔けば、足なへて歩む事能はず。大和の守の馬に乘りて、二三町引き退きたりしかども、馬を返

してければ味方も隔りぬ。敵追つかけ來らば討死せんとおもふ時、妹婿なりし片山彦三郎といふ者の弟來て馬に抱き乘せたるに、血鐙を越えて流れ朱に成りたるを敵見て、深手負ひたりと見なしたれば、十文字の槍を取延べ頻にかけ落さんとする事幾度といふ事をしらず。漸に遁れ得て歸れり。首を取つて見取られて見るといふ諺あるは此の時なるべしと、次郎四郎常に云ひけるとなり。是れ十七歳の事なり。後ち次郎四郎直家に奉公し、與力六十人付けられたり。美作三星の城は浦上宗景番手の兵をやりて守らせたるを、安藝の毛利家より附城を構へ、三村家親大將として度々合戰あり。直家より馬場を加勢として三星にこめたり。馬場愛宕精進するとて、五月二十四日細き流れに行きて身を清むる處に、敵出でたりと聞き直に行き向へば三星よりも槍提げたる士一人來て、馬場に竝び進む敵を追つ詰めたれば附城より出て、是れを助けて城に入る。門内を見れば泥冑の兵十四五人折り敷きて槍の先を竝べ待ちかけたれば、靜々と引き返す。宗景威狀を與へられ、直家夫より重介と名を改めさせ家の字をやられけり。備前上道郡妙禪寺の砦の合戰に、重介は刀、敵は槍にて相戰ひ溝を飛越えて敵の手の下にくぐり入らんとせしに、躓きてうつぶしに伏したり。敵勇みかゝりておもふ所を突きはづし行き、あまるをつと立ち上り切り伏せて首を取る。同郡土田の軍にも長六尺に餘れる梶井といふ兵を討取つたるを角南恕庵見て、白き浴衣を著右の肩をはだぬぎ太刀打したる兵の有樣、昔の辨慶などやかくも有るらんと驚きたりといふ、則ち重介なり。永祿十年五月十日土田の上盤目の軍に、敵五人槍を

横たへ山の上より來るを、重介は坂の下に在つて一人射倒したれども、味方はつゞかず引返す時、山の腰を引き退く味方、敵追詰めて既に討たれぬべく見ゆれば、返し合せ敵を切りなびけ、味方を助けて引き取れり。備前岡山の城主金光興次郎を直家謀を以て殺し、城を取り得たれども近き邊に敵おほければ、戸川平右衞門を城番とするに、寄騎六十人みな行き兼ねたり。重介我かはらんといふに何の仔細か有るべきといふを、直家に告げて許したれば、重介が寄騎六十人一人も辭退する者なきに、戸川が與力もはげまされて重介加勢ならば行かんといふにより、戸川馬場三年岡山にあり。美作三の宮の城を直家一時に攻めらるゝ時、城主村上勘兵衞士卒六十人計にて突いて出る。重介眞先に進み槍武者四人薙刀武者四人と戰ひて、城門の際まで追討ちす。敵槍を投突にしたるを奪ひ取りて歸る。高城にての軍に直家重介を谷の受手とす。敵來らざれば谷より上る處に、山の半に鐵砲を五段にして待ちかけたる處に行きかゝり三段追つ崩す。四段より打つたる鐵砲に右の膝より臂へかけて打ち透され、敵聲をかくれば重介中らずというて、四段をも追つたてる。崩れたる土手あるに冑の鍬を傾け、寄り添ひて待ちたるに、柴折りかけたる谷の向より打つ鐵砲、脊割具足の右の肩かひがら骨の内より臂まで打ち貫かれ目眩みたり。氣を靜めて見れば田中藤介間近く來れり。重介田中を呼びかけ大事の手負ひぬ、此の所を退かんとせば追討に遭はん、爰を死所とせんといふ。藤介我一支もすべしといふ。重介五間ばかり歩みて郎等の肩に手をかけ靜に退くを、敵慕ひ來れば、藤介槍を合せ追ひ退けて歸れり。鐵砲に中りし時、大木を以て袋を突通すが如く覺え物の色目分かれず、只朝貌の花の色に見えたりと後に語りけるとなり。備前兒島八濱にて軍有り。浮田七郎兵衞忠家の子與太郎大將にて、戸川平右衞門平内已下渡海し、麥飯山の敵城近き邊りにて草を苅る時、敵出て追つたつる。與太郎馬に輪をかけて味方の兵を求むる所に、鐵砲内冑に中りて馬より落つ。中村宗介同じく討死す。重介馬を射られ乘り放し歩立に成りぬ。月毛馬、葦毛馬、黑馬に乘りたる敵三騎重介を目にかけて馬を乘り寄する。重介敵に馬を乘りかけられじと槍の鉈を後になして脇に挾み、靜々と退く。疲れはしつ討死よと思ひたるに、敵引きて助りぬ。戸川見て今日の働き故、我一命繼ぎたりと重介を譽めたる處に、寺尾孫四郎今日は重介を見ずといふ。重介先にて見ざるか後にて見ざるか、一番に進みたる敵の馬の毛色物具はいかにと問ふに、孫四郎赤面して詞なし。重介吾槍脇に弓をもて後の證に立てられよと云ひて、敵一人射倒したる人有りといへば、應見傳兵衞進み出で某にて候ひきといふ。中納言秀家大阪より備前へ下らるゝ時、雨中の徒然に浮田修理、同太郎左衞門、花房又七三人を呼んで軍物語の時、前代の槍柱功の勝れたるは誰ぞと問はるゝに、馬場重介、幸和織部、寺尾孫四郎三人と答ふ。秀家聞きて、幸和寺尾は武功は有りつれど輕薄なりと聞けり。いつとても重介が人に越されたる事なしと聞きつれば、重介こそ勝れ候はんなれといはれしかば、三人重介が武功は申すに言葉も候はずといふ。重介眞實にて謟はず、城下の近き邊に引き込みて、此頃は耕作して有りける由を秀家聞きて、三百石加祿の折紙を戸川肥後を

もて重介に與へらる。いかにしたりけん事達せず。重介是れを聞き愈々出づる心なくて遂に秀家にも仕へず、七十七にて病死す。士ほ假初にもきたなき心有るべからざるなり。吾數度の戰場に臨み百死の中に一生を得て、斯く全く終りぬると遺言しけり。其の子孫池田家に仕へけり。

利家白雲の琵琶を種村に與へらるゝ事

種村肯稚寺はもと柴田家にて舉れあり。後招かるゝ人々多かりけれども仕へず、前田利家懇に迎へられしかども出でず。利家種村が琵琶を彈ずる事を好むと聞きて、白雲といふ名物の琵琶を贈られしかば、其志にや引かれけん利家に仕へて、佐々成政と越中朝日山の合戰に目を驚かす功名を遂げたり。其の後淺野長晟に奉公して、彼の白雲の琵琶は今淺野家にありとかや。

秦桐若勇威の事

黑田家の士に秦桐若といふ剛の者あり。唐團扇長さ一丈計もあるを指物にしける故、敵見知りて近付かず。或時さし物をかくして近々と成りて不意に出せば、敵大に驚きて引き退きたるほどの者なりけり。

澤村大學朱柄の槍を持たする事

駿河を攻めらるゝ時、東照宮横目の人を召して、むかしより皆朱の槍の柄、瑇瑁の柄は武功勝れたる者ならでは持たせざるに、近比は持たする者の數多ありときく、心得難き事なり、改めよと仰せ出されたるに、皆朱の柄の槍持たせ、菖蒲革のたちつけを著て通る者あり。誰ぞと問ふに、細川越中守が士澤村大學と答ふ。此の由を申しければ、東照宮其の大學は若き時才八といひつるが小牧にての事なりし、秀吉二重渥の軍兵を引き取る時、秀吉六萬計青塚に陣せしを、吾小牧より押し寄せて引き退く敵を打ち破る。其の時細川忠興秀吉の先陣にありて才八眞先に進みて槍を合せし有樣、今も猶目の前に見るがごとく覺えたり。かゝる大剛の者に持たすべしとて、其の餘の者を禁ずる事よと仰せられしかば、澤村傳へ聞き、今更わが功名を世にあげたる忝さを悅びけり。

加藤清正天草の一揆退治の事

加藤主計頭清正、小西攝津守行長、各肥後半州を賜はりしに一揆起る。天草領は島にて一揆の勢ひ甚盛なり。小西志岐城を攻めけるに、天草木戸の一揆の長天草民部後卷に押寄せ、志岐の東の山に陣す。清正の先陣山岡道阿彌、岡田將監、南部無右衞門、小野木織部、瀧野三位、莊林隼人、森本義大夫段段に進む。清正觴平治をして先陣を見せしむるに歸らず。又飯田覺兵衞をやられしに、飯田見切て歸る。平治只今軍始らん先に進みて戰に逢はんと云ふ。飯田しらぬ事はいふまじきよ、先陣只今追立てられん。戰に逢ふ場にあらずとてつれて返る。清正いかにと問はるゝに、飯田先陣は今打負けて敵追かけ來らん。二の勝は旗本に候といふ。清正證はいかにと問ふ。敵東の山に陣し、地の利を得たりといひも果てぬに、先陣敗北して一揆ふつしぐらにかゝり來る。清正高き處より横合に突いて懸

り、天草民部敗軍せしを、三里計追討にしたり。清正十文字の槍を突折り、七度槍を合せ、其勢に乗じて志岐の城を攻落されけり。清正の槍は十文字にて三日月の形なり。志津の作なりしが突折りて片鎌と成りし、刄を拾取りて佛木坂の神宮に納めしとぞ。槍の鞘熊毛なりしに、瘧煩ふ人あれば其毛一筋ぬきて戴かするに忽ち落ちけると言傳ふ。朝鮮人は今に至るまで、小兒の啼時鬼將軍來るといひて啼きやみけるとかや。かばかりの猛將類まれなる事なり。

森本義大夫組討功者の事

清正一揆を攻むる時、或夜森本義大夫清正の前にて軍評定せしに、凡組討は力によらず候。心剛にて手きゝたれば易き物なりと申すを、清正組討は危きものなり。勇に誇る時は、必仕損ずべしと戒められぬ。其翌日清正の眞先に森本馬を進むる處に、歩行武者一人寄合ひたり。森本聞ゆる馬の上手なれば、敵を横さまにあてゝひらりと飛下り、立上らんとする敵を引組んで頓て首をとる。清正に向ひ夕部申せしに違ひ候哉といへば、清正大に賞せられけり。

朝鮮陣の時東照宮御遠慮の事

東照宮江戸におはしませしに、秀吉の使來りて朝鮮を伐たるゝよしを申す。斯て一人書院におはしまして深く思案の體に見えさせ給ひける時、本多正信御前近く出でたれども御詞もなし。やゝ有りて正信、殿は朝鮮に渡海有るべきやと申せ共、猶默然とせさせ給ふを斯いふ事三度に及びて後、何事ぞかしましきに、人や聞くべき、箱根をば誰に守らすべきと仰せありしかば、正信さては御思慮定りけるといひて退出しけり。

伊達家の士卒異風出陣の事

朝鮮を伐たるゝ時、關東の諸將も兵を出さる。伊達政宗は遠國たる故に、騎兵三十騎鐵砲百挺槍百本と軍配を定められけるに、千計の士卒を引具し、天正十九年正月九日岩出山を打立ち、二月十三日京に著く、小西加藤は先陣たり。岐阜中納言秀信を始として、關東の諸將師を出さる。其道は聚樂より戾橋を大宮に押通る。政宗の旗三十本紺地に金の丸付けたる具足著て、弓鐵砲の者も同じ出立に、銀のし付きの刀脇差、金のとがり笠を被り、馬上三十人黑ほろに金の半月の出でし豹の皮、又は孔雀の尾熊の皮いろ〳〵の馬甲かけ、金ののし付きの刀脇差あたりも輝くばかりなる。中にも遠藤文七郎原田左馬介ははき添に木太刀を一丈計に作り帶びたりしが、鞘尻の下りければ、金具を眞中に設けて糸を結び肩にかけて馬に乘りたりけり。見物の群衆政宗の軍兵押通る時、目を驚かす出立なれば、一同にをめきとよめきけるとぞ。

明の援兵朝鮮に來り、平壤に有りて、練光亭より日本の兵を望みしに、江上に往來する者大劔を荷ふ。日光下り射て電の如し。是は眞の劔にあらず、白蠟を沃ぎたる物なりといふ事、懲毖錄にしるせしは伊達家の二士の木劔の事にや。

朝鮮南大門合戰附後向の備の事

朝鮮南大門の軍は、文祿二年正月廿六日の事なり。明の援兵鴨綠江をわたり押來る。小西行長かなはず引退く時に、小早川隆景は開城府に止り、一軍せんと待ちかけたり。浮田秀家使を以てとく都城に引返して、一所に軍あるべしと申されしかども、隆景吾日本を打立ちしより、異國に討死せんと思ひ設けたり。年老い候ひぬ、今生の思出に異國の大軍にかけ合せ、大國の耳目を驚かす軍して屍を戰場にさらさんと存ずる所なりとて、引取らん氣色無りければ、又大谷吉隆を遣して誠に雙なき志、古の名將も是には過ぎじ、さればとて二萬計の兵にて大軍に取卷かれ、空しく討死あらん事口惜く候。只疾都城に入りて日本の軍の先陣せられ候へとありしかば、隆景さらば、日本の先陣は隆景仕らうずるにて候。人に先陣をばかけさせじとて、黑田長政久留米秀包打連れて都城に歸られしが、南大門の外碧蹄館に陣せられけり。二十六日の曙に李如松が軍押來る。旌旗を立てつらね何十萬とも測るべからず。秀家を始として大軍に野合の合戰危からん。都城に楯籠らんといはれし時、立花宗茂目を見出し刀の柄に手を懸け、敵こはければとて逃げこもる樣や候、只馳合せ蹴散して候はん物をと勇まれしかば、さらば誰か先陣せんといふに、隆景吾先陣せんと兼ねていひつる事よ、誰人にてもあれ思ひもよらずとて、頓て陣を進めらる。士大將粟屋四郎兵衛、村上彈正、野島掃部三千計喚きさけんで相戰ふ。立花宗茂、久留米秀包、毛利元康六千餘奇兵となり、右の方三町餘に陣せしが、横樣にかゝる隆景旗本一萬餘を率して、一文字に切て掛り、忽敵を討破り、首數多得られけり。宗茂取つたる首二つ鞍の四方手に付け、隆景の方に來られしを見て、取敢ず見事に候といはれしかば、宗茂毎も仕るにて候と答へられけり。此軍未だ始らざりし時、黑田長政唯一騎歩の士六七人召具し、隆景の旗本に來る。隆景よくこそ來られ候へ。先陣の粟屋に力を添給へと言はれしに、長政悅の色面にあらはれて承り候とて、先陣に向はれけり。殊に寒風烈しう吹きたりければ、長政大綿帽子を被られしが、先陣に行きてばうしをぬいで、世に聞えける水牛の皆の緒をしめられけり。隆景の軍兵ども是を見て、けふの軍に勝ちたりと勇みけるとかや。長政ことし廿五歳、武勇をかく人に信ぜらるゝ事、なみ〳〵にはあらざりけり。

或說に、漢南にて明の援兵大軍なりと聞えしかば、諸將評定して、吉川元春を先陣とす。元春勇猛の名高き故なり。元春軍兵を後面にして敵を見せず。敵近くなりける時、士大將某燒飯を十ばかりもち來りて、時よろしく候、きこしめされ候へといふ。元春是を五つ食し、士大將二つ食して、殘りを近習の者に與へたれども得くはずとかや。敵合二町計に成りける時、元春下知して一同に向直り、すかさず突きかゝり、敵を追崩して頓て引取られけりといへり。目にあまる大軍に逢ひて、士卒氣を奪はれ見崩れすべきかと、元春おもひてかくせられたりとなり。是誠に味方の氣を挫しめざる將略にして、元春は關西無雙の勇將たる事誰か非問すべき。されども元春は朝鮮陣より前に死去

ありしかば、隆景かくせられたりしを、傳へ誤りたらんも知るべからず。

國富源右衞門組討の事

南大門の軍に明の兵を追掛け、秀家の士國富源右衞門とて、剛の者大力なりしが、さわやかによろうたる敵に追付きて、三尺餘ある刀を取延べ、三刀まで斬りたれども甲堅くて手も負はず。國富み刀を捨て飛び懸り引組んだるに、彼敵國富を取つて押へたり。跳返さんとするに、大盤石を横たへたるが如し。國富脇差を抽いて二刀させども、いかなる甲にや少も通らず。已に危かりし時、味方數十人、落合ひて敵をば討取りたり。

加藤光泰大言の事

朝鮮にて秀家を始め都城に在りしに、加藤清正進みて行程數日を隔つ。諸將粮盡きんとする時、加藤遠江守光泰獨云く、清正都城を放たれて敵に向ふ。人々都城を去つて食に就かんとせば、清正を捨殺すべし。今爰を去るものは、復男子の交はならじ。清正を捨てん事日本の恥なりといふ。人々粮既に盡きたり、いかゞせんといはれしかば、遠江守怒つて砂を喰はんものをといふ。砂はくはれじといへば、遠江守居丈高に成りて、汝等砂を喰はん樣よもしらじ、我教ふべきとて福島正則をきつと見て、いかに市松いつの間に大きに成つたるぞやとて、又秀家に向ひて、今迄は中納言殿と敬ひ申したりき。けふよりは中納言めと申すべし。清正を捨殺し恥を異國にさらす人々なりといひすてゝ座を立つ處に、清正粮盡きて都城に引退き、三里計の近所に陣したりと告げ來れり。遠江守は清正と生死を同じくせんとおもへるにまぬかれけり。

吉田又助川巾を積もる事

朝鮮の平安川は深さ八九尋、四五百石積の船の往來有りて、日本にては見ざる大川なれば、川の廣さを諸家の士或は七八十町或は十二三町あらんといへども審ならず。黑田長政の士吉田六郎大夫（稚名六之介後豐岐此時六郎大夫といへり）又助父子に見積り候へと下知せらる。かゝる樣の事に慣れず候ゆゑ覺束なしと辭すれば、父子が組に功者も有るべしといはれて、翌朝又助組の士を引具し、川岸に出で川の向に朝鮮人三人見えたり。又助小柳權七は長高き者なり。あの向の人退かざる內に急ぎ堤の上を行くべし。指物をふる時踏みとまれと言含め、權七走り行き、其たけ向の人とひとしく見ゆるとき、指物を振りたれば立ちとまりぬ。卽其間を打つてみれば八町五段なり。長政聞きて、又助二十一才老功の者にも劣らじと稱美せられけり。

清正虎を狩られし事

朝鮮にて何れの所にてか有りけん、清正の陣大山の麓なりけるに、虎夜來りて馬を中に引さげ虎落の上を飛出でけり。清正口惜しき事なりと怒られけるに、小姓上月左膳をも虎來て咥殺せり。清正夜明くると山を取卷いて虎を狩りたるに、一疋の虎生茂りたる萱原をかきわけ、清正を目がけて來る。清

正大なる岩の上に在つて、鐵砲を持ち狙はるゝに、其間三十間計、虎清正を睨みて立止る。人々鐵砲を揃へて搏たんとするを、清正下知して打たせらるゝず、自打殺さんとの志なり。斯て虎間近く猛り來り、口を開きて飛びかゝる處をうたれしに、咽に打込みたれば、そこに倒れ起上らんとせしかども、痛手なれば終に死しぬ。

清正船を取らせられし事

清正朝鮮にて大川に打臨み、向の岸に船を繋ぎ、陸に陣屋有りて旗を立てたるを見て、あれを見よ鴎岸に添ひて泛みたるは、敵はなきぞかし、誰かある水練の者あの船取來れと下知せられしに、果して清正の言のごとし。又清正の陣所に糠なくて馬秣にくるしめり。清正藁をこまかに切りて豆にまじへて飼へといはれしに、馬の力落ちざりけり。

太閤名護屋にて大言の事

明の援兵大軍にて朝鮮に來り、日本の軍危しと太閤聞かれ軍評定有し時、蒲生氏郷進み出で、何程の事か候べき、氏郷に朝鮮を賜はり候へば、切取にして打破るべきものをといはれしかば、太閤是より氏郷の大志有るを忌みにくみ給ふ。又同時隆景使を以て、隆景が存ずる所は十萬の軍兵渡海せば城々を守らせ、隆景先陣して明朝に押入り、北京を攻落すべし、此旨申せと申して候といふ。秀吉小早川の智謀さぞあらん。人々よく聞かれよ、秀吉功を遂げずして死するとも、秀次を大將として明朝に攻入らん時、我魂魄雲に乘じて鐵の楯をつき、唐土の奴原を一々に蹴ころして捨てなんものを、むかしも柘榴を嚙みて火となせし者の有りしと聞く、其小男の名を忘れたりといはれしかば、施藥院秀成夫は北野の天神の御事にて候と申す。秀吉それぞかし雷になりて天に上りしと言傳ふれど、吾陰囊の垢ほどもあらぬ物をと、大音にいはれしを、聞く人ごとに驚きたり。

菅政利後藤基次虎を斬る事附羅山先生南山銘の事

黑田長政朝鮮の全羲館に陣せられしに、ある曉俄に騷ぎければ、敵夜討にや寄せたると井樓に上られしに、虎馬屋に入りたるにてぞ有りける。恐れて出づる者も無かりしに、菅政利刀を提げて走り向ふ。虎嚙みかゝる處を飛違へて腰骨を深く斬付けたり。虎前足にて立ちあがり愈猛りて危かりし處に、後藤基次駈來り、肩先を乳の下かけて切りつくれば、菅得たりやと虎の眉間を切割つて殺しぬ。長政汝等は先陣の士大將として下知する身なるに、獸と勇を爭ふ事、おとなげなしとぞいはれける。政利が刀に林羅山銘を作りて南山と名付く。周處白額虎の故事なり。銘に曰く、

節彼南山。山惟劍鋩。苛政除去。酷吏逃藏。截レ邪斬レ佞。
惟刀在レ箱。惟其言レ虎。若レ有二眞僞一。傳二之萬世一。爲二子孫常一。

朝鮮機張にて長政虎狩せられしに、虎一匹人の群れたる中に駈來る。菅六之助が足輕の肩を咥みて後に擲げ、また一人をも腕を咥みて投倒しけるが、六之助其日朱具足を著たるをや目にかけゝん、

忽飛びかゝりしを、菅二尺三寸有りける刀を拔いて忽に切伏せたり。其刀今に菅の家に持傳ふ。備前吉次が作なりき。大德寺春庵和尙其刀に斃秦と名を付けたり。秦は虎狼の國と言ひし故にこそ。羅山林子も銘を作られたりと言ふ一說あり。

泗川の城に狹間を切る時の事

文祿五年朝鮮にて泗川といふ處に城を構へたる時、門脇の狹間を垣見和泉守家純あげて切れと下知しけるを、長曾我部元親見て人の胸あたりより腰あたりに當てゝ切りたるこそよけれといふ。和泉守下げたらば、敵城內を覗ふべきといふ。元親此門へ押寄せ心よく內を見るほどに、城兵よわりたらば、一支もすべきや。上げて切らば、敵の首の上を射べきかと笑ひけるとぞ。

加藤嘉明拔懸高名の事

慶長二年朝鮮の番兵船數百艘をから島に置きて日本の軍船を防ぐ。諸將番船を乘取るべき評定有り。加藤左馬助嘉明目に餘る大軍を小勢をもて爭か打勝つべきといはれしが、ひそかに手の者に下知し、五人十人船に乘り、番船の方に漕向ふ。嘉明法を背く者どもを押留めよとて、追々船を出されしが、稍有りて我押止めずば止らじと言捨て、船に乘り漕出す。河合庄大夫、同庄次郎、荻野作右衞門かぎ懸の三介五人打乘りて番船の中に押入つたり。三介船は何れと問ふ。正中の本船に著けよと下知し、やがて乘移る。敵其勢ひに恐れ、船底に入りて劔を拔き鏃を揃へて待ちかけたるに、嘉明少もためらはず飛込みたれば、從者なじかは殘るべき、續いて飛入りて、なで切にして本船を乘取りたれば、諸將も追續き船を押出し來る。既に鐵砲の藥に火移り燒船を乘取る者多し。河合庄次郎は十六歲なるが飛入るとて、海に飛込み溺死す。仙次郎兵衞、加藤權七郎勝れたる功名せり。嘉明一人の武勇にて、七月十六日白畫に押寄せ、番船百二十艘一艘に五百人三百人乘組たるを、僅の士卒にて悉く海に切沈めたるは、古今に稀なる事ども也。秀吉感狀を與へ六萬二千石に增祿して十萬石を與へらる。池田家の長臣池田河內が妻は嘉明の女にて、河內が男伊賀は外孫なり。伊賀若き時外祖父に武功の事を尋ねければ、今は年老いて過ぎつる事皆忘れたりとのみいひて止みぬ。から島の船軍の事を問ふに、十五六歲なる小姓の船に乘移る時、矢に中り海に落ちて死したりき、不便の至りなりと、只此事を語りて他の事に及ばざりしとぞ。

淺野長政諫言の事

太閤名護屋におはして、朝鮮の軍はか〳〵しからぬを怒り、諸大將を集め、今は秀吉自ら押渡るべし。三十萬の軍勢を三手にして利家氏郷に先陣させ、三道より打破り、眞直に明朝に攻入るべし。日本の事は德川殿おはせば心にかゝる事なし。いかにおもふと有りければ、東照宮聞し召し、利家氏郷に向はせ給ひ、人多き中より撰び出されて、一方の大將たらん事面目にてこそ候へ、抑我等弓箭を取つて年寄り候。かゝる時に人の跡に屈殘りたらんは口惜しき事なり。必一方の先がけを承るべし

と仰せられけるに、淺野彈正少弼長政進み出でて暫く候、殿下此年月の御振廻昔に替りてこそ候へ、古狐の入替りたると存ずるなりと申しも果てぬに、太閤大に怒り、やあ秀吉が心に狐の入替りたる所謂屹と申せ、申し損じなば首打落さんものをとにらまれたるに、長政ちつとも騷がず、長政が如き何十人が首刎ねられんも何條事の候べき。そも〳〵よしなき軍を起して、朝鮮八道は申すにや及ぶ、日本六十餘州に父を討せ兄弟を失ひ、夫に離れ子に先立ち歎き悲しむ者滿々たり。夫に兵粮の運送相加はり、六十餘州の內悉くあれ野となる。今發向候ひなんには、五畿七道盜賊發起せん事必然なり。德川殿いかに思召し候とも爭か是を防ぎ給ふべき。爰を思し召して、先陣とは仰せ候らん。殿下むかしの御心ならんには、是ほどの事など御心付のなかるべき。是唯事にあらず、一定古狐の入替りたるに候。鄙しき人の詞に、人とらんとする體は必人にとらるゝとは此事に候と、憚る所なく申し放てば、太閤何にもせよ、己が主に斯雜言するこそ奇怪なれとて、飛蒐らんとし給ふを、人々押隔てたり。長政はさあらぬ體にて、人々に色代して靜に座を立ちて陣所に歸る。かゝる所に、肥後國に逆徒一揆を企つと聞えければ、太閤大に驚き、長政を召出し、汝が嫡子左京大夫幸長罷向ひて切靜むべしと下知せられ、本多中務大輔忠勝を添へて、肥後國へぞ向けられける。

井口與市主從功名の事

朝鮮にて何れの所の事にや、廣き野に道ありて、向は山の麓なるに、大穴を構へ射手を伏せ置きて、行きかゝる日本人餘多射殺しけり。黑田家の兵井口與市が從者山崎喜藏、いで參つて見申さんといひもあへず走り行く。井口も馬より下り走入りければ、山崎射手三人斬伏せる。井口續いて攻入り、追散す。井口恩賞に望候はず、あはれ朱柄の槍免され候へといふ。物しども寄合ひて武功度重なるか、或は一日の中に首七つ取る時は、朱柄の槍もたすると申す事の候、輕々しく許しがたき事にやといふ。井口是を聞き、其後一日に首七つ取りて、朱柄の槍もたせけり。

清正の武備嚴重なりし事

朝鮮にて清正全州に在る時、釜山海より十里餘の程、日本の軍兵城々を守りて、七八里、或は十里計にて伴の城を設けたり。清正を太閤呼れしかば、日本に歸るとて打立たれけり。戸田民部少輔高政密隅に在りて、清正と舊友なれば、もてなすべき用意して待たれしが、士大將眞鍋五郎左衞門、神谷平右衞門を途中まで迎とす。四里計出づれば、清正の先陣見ゆ。其頃は四方に敵なく無事なり。二人とも革羽織袴にて出でたるに、清正の軍兵皆物具して簑食付け旗をはり立て、磨筒の鐵砲五百挺眞先に押して、鐵砲には火繩をはさみ火をつけたり。清正は溜塗の物具銀の長烏帽子の冑の緒をしめ、頰當脚當して草鞋をはき、銀の九本馬蘭の馬印を自ら背にさし、月毛の馬に白泡かませて來れり。二人馬より下りて迎へけるを、清正見て民部よりの迎の使者骨折なり、早くそれへ著陣せん。殊外に人々垢付きぬ。風呂をたて下々まで湯を賜はりなば大慶ならん。此よし疾歸りて申されよと詞を懸けらる。二人

承り候とて馬に乘り、急ぎ歸りてかくといふ。程なく清正著陣せられ、屏重門より入る。緣にて民部近習の士二人寄りて清正の拝れし馬蘭を取て旗籬に立つる。清正緣に上らるれば、よりて草鞋の紐を解き脚當の緒を解く時、清正腰に付けたる緋緞子の袋を座敷へ投入れたるにどうと落つる。米三升計に味噌銀錢三百文入れられたり。馬印をさすに腰のつり合是にて能しとなり。民部驚きて十里近きに敵もなくていかなる事ぞといへば、清正物は大事と心得たるぞよき。油斷大敵といふ事有り。我物具せず身を安じたくは思へども、左あらんには皆懈るべし。夫故に身は苦しけれども、懈なき爲にかくはせしなり。萬一の事あらん時懈りて事を仕誤るならば、今までの武名虛名にならん事を慮ればなり。凡上を學ぶ下とて、大將寛げば、下は大に怠るものなれば、常々陣法を嚴にする事に候。上一人の心下萬民に通ずるとかやいふ事の有るよと、答へられけるとぞ。

朝鮮より虎と象とを渡す事

朝鮮より虎と象とを引來る。象は柔順の物なれば、細き綱にて引きけり。虎には鐵の鎖を付け左右より七八人取付きて引來る。朝鮮渡海の諸將一旦名護屋に鮎集られし時、彼虎に大力の男あまた左右に鎖をひかへ、どつというてかけ出し、幾も並居たる中を通りけるに、人みな驚きたるに、清正膝立直し、拳を握り臂を張りて、虎をきつとにらまれしに、虎もしばし立ちとゞまりて清正をにらみて打過ぎぬ。嘉明は壁によりかゝりて居睡して在りしが、虎通り過ぎたる後も初にことならず。やゝ有りて、目を開き、何事に騒がれ候ぞ、虎を引通れる故にやと、いと靜にいはれけり。

清正の士卒土穴に住みし事

慶長二年二月清正再び朝鮮に渡られしに、船の著きたる處は北地にして寒風烈し。土民ども土穴を穿ちて其中に住居りしに、日本の軍兵押渡ると聞き逃走りしかば、清正の兵共土穴に入りて臥す。清正漫に民を殺さず、非道を嚴に戒めしかば、後には商人も物を馬に付けて來り賣りしに、寒氣以の外に甚しくて、馬の毛に氷柱の下りて、からめきて鳴る聲、土穴の中に聞えけるとかや。王元美が詩に、風劈レ面疑レ裂凍粘レ髭有レ聲といへるおもひ合されぬ。軍兵共は終日風砂の中に立ち、夜は土穴に臥しける故、皆雀目に成りしを、土民敎へて鳶を食して癒えけるとぞ。

森本庄林黑白鳥毛の槍鞘の事

朝鮮にて何れの處の戰にや、清正の士大將森本義大夫流矢に臂を射させたり。斯る處に、庄林隼人馳來るを見て、いかに手負ひたり、此矢拔いて給はれといふ。庄林馬より下りて拔いて捨つれば、森本さても快き事かなといひもあへず、馬にひらりと打乘り一鞭打つてつとかけ出し、庄林殿續かれよと云ひ捨てゝ敵に逢ひ首を得たり。二人とも清正の士大將大剛の者なり。森本が槍は白鳥毛を鞘とし、庄林は黑鳥毛を以て鞘とす。世の人黑鳥毛白鳥毛といひあへり。

清正の花押筆畫多かりし事

朝鮮より諸將連判の書を太閤に奉る時、清正の花押殊に筆畫かさなり、やゝひまいりしかば、福島正則冷笑ひて、病重くなりて遺言の時の狀あしからんといはれしに、清正、我はさは存せず、戰場に屍をさらすとも、きたなく逃げて、褥の上に死なんとは思ひ設けず候。されば遺言狀何かし候べきと答へられしかば、正則詞なかりけり。

後藤基次龜甲の車を造る事

晉州の城を攻めらるゝ時、黑田長政の士大將後藤又兵衞基次龜の甲といふ車を作り出せり。厚板の箱を拵へ、內に强き切梁を設け、石を落しかけても箱の摧けざる手當をし、箱の內へ後藤入りて棒の掉を指し車を箱に仕かけ、進退自由に廻る樣にして、城際へ押詰め石垣を崩して乘入りけり。

和寧館合戰栗山利安武功用意の事

慶長二年日本の軍復渡海し、黑田長政の先陣栗山備後利安、後藤又兵衞基次、衣笠因幡、母里但馬、黑田宗右衞門以下三千計和寧館豐臣家譜全義館に陣せし處に、明の援兵押寄する。其由長政に告げよとて書簡を書きけるを利安見て、敵かゝり候間、早々に救はせ給へといふ詞やある、書改めよ。敵押寄せ候、先陣は少も心を勞せらるゝ事有るべからずとこそ申すべけれとて、直させてぞ告げたりける。斯て敵寄來れば利安先陣して打破りたり。長政聞くとひとしく打出て、もみにもんでかけ來られしに、敵早護龍臺をさして敗北しけり。先利安が陣所に入りて、何とて軍をしたるやといひも終らぬに、利安目を見出し、押寄する敵に辭退する事や候と申す。長政汝等討死せば、我生甲斐なしと思ひてかくはいひしなり、何とて疾告來らざるやといはれしかば、傍より、告げ申す書簡の詞を書改むるとて遲かりきと申す。利安夫は臣が改めさせて候、仔細はしかくなり、たとへ疾救はせ候へと申すとも、行程隔りたれば無益なり。敵は四萬計も候はん。味方必死を思ひ定めて軍すべきにて候。たとへ屍を異國の野原にさらすとも、名は後の世に傳はるべし。黑田が先陣の剛の者ども大敵に取卷かれ潔く討死したりと言はれなん。又とく救はせ候へと申さんには、後日に黑田が者ども主君の救ひを待ちかね皆打殺されたりと人に笑はるべし。是日本の武名を穢すに候はずや。弓箭取る身はかりにも名こそ惜しく候へ、且は今生の暇乞と存じて、告げ奉る書簡殊更に改め申しきと申しければ、長政大に悅ばれけり。

栗山利安儉約の事附日根野備中守黑田家に銀を返す事

利安若き時は善介といひ、中頃は四郎兵衞といふ。長政に筑前を賜りし時、名島の城に長政居て左右良の城に利安を置かれけり。祿一萬五千石極めて儉なる人なり。人の衣服の美麗なるを見ては、褒貶といふ事の有りといひ敎へ、又價高く馬を購ふ者あれば、さばかりの馬も二疋の用をばなさじ、何とて無益の費するぞと戒めけり。されども事に臨みて金銀を惜むの心なし。從者をいたはり憐み、貧乏を助くる事、尋常の人に大に踰えまされり。

日根野備中守朝鮮に使としてゆく時、黑田如水に銀をかり歸りて後、如水のもとに行きしに、如水

近習の士に先に人の贈りし鯛を三つにして、その骨を烹てもてなし候へといひしかば、客嗇の甚しき事よとおもひ居たり。頓て肴を出し、酒宴有りし後、彼借りたる銀百枚取出し返せしに、如水はじめより返し給はらんとの心にてかし候はず、異國に渡らるゝにより頼まれしかば、送り參らせしなりとて受取らずして止みぬ。栗山も如水の風に習ひたるにや、君臣ともに頼母しき事ぞかし、栗山の戒をもて總て世の有樣を見るに、士といはるゝ人の體こそ無下にくちをしけれ、多くは美衣を著かざり、明暮酒宴して馬具武具やうの物いかに有るやらんしらず、多くは商家に典當し、或は茶の湯よとて、古びかけたる器の何の用もなき物に數金を費し、博奕とてあらぬ戯に夜を明し、斯くばかり無二にいひかはしけん人の黄金を奪ひて、其人の赤裸になるも顧ず。是はそも盗賊の心にも劣りはてたる事なるべし。扨物がたりするを聞けば、多くは女色のたはふれごとのみにて、禮儀廉恥は露ばかりもしらず。又或は儉約にことよせて、利倍の事には錐刀の末をも爭ひ、人を欺きて己が得あらん事を願ひ、或は奢侈にふけりて用度に苦しみ、商人に向て首をたれ、其人の恩を得て金銀をかり、是を恥ともせず。門を出れば從者あまた召具し、我は門地のしかゞなりとて、途中にて人をいかめしく追拂はしめ、家人を飢ゑしめて購ひたる價をやらず。大國の君も亦大かた斯の如し。不仁不義の行をなして、世の人の誹笑も知らず。世界は皆かくなるよと思へば、風俗の衰へ無下に口惜しき事なり。

卷之十一

竹中重治心掛の事

竹中重治曰、分に過ぎたる價を以て馬を購ふべからず。其馬に乘りたる時能き敵と見かけ追詰て飛下りんと思ふ歟、或は又槍を合せんと下り立つ時、馬副の人の續かざれば、此馬人の物に成るべし、又かゝる馬は得がたしと思ふ心出でて期を延ばす事有り。此能馬ゆゑに却つて名を失ふ事もあるべし。かせ士は金十兩にて馬を購はんとするに五兩にて求むべし。をしげもなく飛下り乘放ちて能き時は捨てもすべし。さて五兩の金にて又馬を求むべし。馬にかぎらず此心得有るべきなり。身をも義によりて捨つるぞかし。まして財寶をや、塵芥とも思はぬ心掛常に有るべきこそ士の本意なれとぞ。

北條家の厩を預りし諏訪部といふ者度々功名あり。何れの時の軍にや、勝田八左衞門といふ者と二人物見に出る。敵不意に出てつけしたふ。二騎引取る時、諏訪部は馬を預る故勝れたる馬に乘りたる故乘切つて馳歸る。勝田は後れたり。敵追詰たれば下立て相戰ふ。味方助來れば勝田打伏せられ頭半切られたり。敵引取りたるに勝田助からじと思ふ。勝田手にて頭を持上げ、いまだ死せざるに、人々は捨てゝ歸るやといふを聞きて助けてかへりけり。勝田も度々の功名あり。後松平右衞門大夫に仕へけり。竹中が論尤士たる者の知べき處なり。弓箭取る身は、朝夕に軍旅の事を論ぜん事あら

まほしき事なり。さらずば必天の冥加に盡くべきなり。戰國に生れし人は、其事に臨みて功有りて祿を得たるにてこそあれ。今泰平の時に生れ父祖の陰にて祿を世々にするは、天より士の職を命ぜられたるなり。天より命せられたる其任を忘れなんには、天の冥加に盡きん事必定なり。又天下の四民の上にありて、下を鎭むる職おろそかにせんは、口惜しかるべき事にこそ。

峯澤某謙信を嚙たんとせし事

謙信の許に、峯澤何某といふ士罪有りて放斥せられしに、越中の椎名に奉公し、謙信越中へ師を出されし時、彼士叢にかくれ、鐵砲を持つて伺ひ居たりしが、俄に鐵砲を傍に投捨てゝ泣居たり。謙信見出して、いかに峯澤めづらしといはれしに、さばかりの仁君智將を嚙奉らんと存ぜし事悔しく成りて候。今遙に見奉りて、先に屋形の心に背き、又かゝる設けを工み申す事此上もなき大罪にて候。とう首を刎ねらるべしといひてひれ伏しければ、謙信打笑ひ、吾に智仁とは相應せざる虛名なり。疾馳歸りて椎名によく仕へよといはれしかども、かの士越後に歸りて、農夫と成りて一生を終りたりとかや。

久世三四郎坂部三十郎物見の事

東照宮何れの時の軍にや、久世三四郎宣廣坂部三十郎廣勝二人を物見に出し給ふ。坂部は勇める色あり。久世は氣色甚だ惡しうみえしかば、側より笑ふ人の有りしに、東照宮坂部は天性の剛の者なり。久世が及ぶべきにあらず。されども久世は人に劣りて生甲斐なしと思ひ定めたる者なり。其故に務めて鬪む故、心を勞して其けしき顯はれてみゆ。今見よ、久世は坂部よりも敵近く進み行きて見て歸らん物をと仰せける處に、二人歸り參たるが、果して御詞の如くなりけり。東照宮、坂部は生得の勇を賴みにして懈あり。久世は鬪むをもて味ひ深しと感ぜさせ給ひけり。

野々口彦助物語の事

明智光秀が士野々口彦助山中鹿之介に逢ひて功名せん事を問ふ。鹿之介物前には必目の明かぬものなり、能心得られよといふ。彦助させる事ともおもはず。其後何れの戰にや、川際に野々口打出たる處に朝霧たなびきて物色見え分かず。時に山中が敎へし事を思ひ出し、手綱をひかへ、爰にて目が見えぬといひしは、吾後れたるならんと、目をふさぎ心を靜めて目をひらきたるに、川の半に物具したる武者大差物を指して只一騎渡り來るを見付て、心もさわやかに目も明かに成りたれば、押並べて引組んでおち首を取りたり。後に彦助是も我眞實の功名にはあらじ。彼敵大ざし物に身の疲れて輙く我に組敷かれたるならん。彼敵も物前に目が見えざりつらんと語りき。

石谷定淸御供に參る事

石谷十藏定淸は、先祖は遠江石谷村の人なり。大阪御出陣の時江戸に殘させ給ひしに、御跡より從者一人に具足箱を脊に負はせ、自ら槍を荷ひて潛に江戸を出で駿府にて追付き奉りけり。兼て心易かり

し御近習の人に便り、江戸に殘り申す事口惜しく存じ、重き御法を破りて參りぬ。首を刎ねられん事は素より覺悟したる事なれば、いかに御咎蒙らんとも、露計も悔む事は候はずと申上げて給候へといひしかば、將軍には殊に法制を嚴に思召し給ふなれば、爭か御ゆるされの有るべき。もし御宥あらんには、御あとより引きつゞきて追々に來るべければ、必烈しき刑に行はれなん。されども捨置くべき事ならねばかくと申すに、台德院殿默しておはします。十藏は既にわが事聞えつる上は、今夜か明朝は首を刎ねられなんとて相待居たりしに、十藏よべとて召されけり。思ひ極めて進み出づれば、如何にして法を破りたるや、惡き奴哉、切つて棄てばやと思へども、若き者なれば救すよと仰出されて、黃金二枚賜りけり。さて江戸へは重ねて、誰人にもあれ一人も忍びて御供に參りたらば、重罪たるべしと、固く仰出されたるとなり。

坪内玄蕃心得の事

石谷十藏定清坪内玄蕃に向ひて、度々の功名世に高し。哀れ心掛にて功名を遂ぐべき道もあらば敎へられよといふ。坪内聞きて能くこそ問はれたれ、人々事に臨みて神の力を賴み八幡々々といふ。我も又賴みては相だのみになりて成就せじと思ふにより、我は每も八幡といふ神を刺通さんと一筋に思ひて、後れを取らざりしといひけるとぞ。

道化清十郎平野與兵衞に對面の事

道化清十郎は美濃の人にて、信長に仕へて度々武功勝れたる故に、信長清十郎が指物に無雙道化といふ四字を書きて與へられしかば、世の人無雙道化といへり。平野與兵衞は齋藤家の士なるが、是も武功譽れ高く、信長是を招かれし時、人々往きて平野に對面するに、道化も打連れて物語せしが、道化いはく、御身はかゝるに先立ち、引くに殿ると聞く。其趣を委しく語りて敎へられよといへば、平野更に心懸故にも候はず。齋藤家に冥加に叶ふ士は皆々討死しつ。吾生殘りて重ねての軍には必死と思ひつれ共、武勇の不足故に死を遁れ、今日の問にあひ、恥の上の恥にあひ候と答へければ、只今の答至極の道理にて候。先がけ後殿は必死を不レ志しては成りがたしと、大に譽めて感じけり。

谷太郎右衞門物前心得の事

谷太郎右衞門は武功の士にて、黑田家に客の會釋にて招き置かれけり。谷が曰く、軍の場にて先敵より味方に氣を付くべし。一人先に進出踏み堪ふる處に、跡より二人三人行重らば、始出たる者を强としるべし。其處へ行くべからず。吾は又別の所に獨踏出してこたへ居るべき志せよ。しばらくすれば、又其處へ味方つゞくぞかし。又日比心安き人のわが主君に寵愛せらるゝとも、軍場にて其人のかたはらに寄るべからず。必獨立の心得すべし。又士は弓鐵砲の上手といはるゝ事好む事にあらず。敵を打立てたる時か、或は城へ射込みたき事のあらんに、足輕は進めがたき故に人をさして命のあらん時、射あてざれば面目なし。危き場は敵も堅く守る故に、多くは犬死する事ありといへり。

可兒才藏が事

可兒才藏吉長は尾州可兒山の人にて大剛の者なり。篠を指物にす。首を取て篠の葉を口中に押込み、投棄てて後の證としける故、世の人篠の才藏といひ傳ふ。關白秀次に仕へ、長久手の軍に秀次引退かれしに、岡本嘉介村善右衛門等踏止まりて支へしに、才藏が來たるを見て山に倚りかゝる心地せしとなり。さて才藏殿は、何方にぞと問ひて、其退かれたる方に行きけり。目前の敵を見捨てゝ引退きしは、聞きしにも似ぬ才藏かなと論じけるが、或日聚樂にて語り出して、才藏にいかなる所存有りしやと問ふ。才藏聞きて、何心なく殿の跡を慕ひたるばかりなりき。今人々の論を聞くに尤なり。さらば暇申すとて、宿へも歸らず直に立去りけり。後に福島正則招きて七百五十石の祿を與へらる。才藏が下人に久右衛門といふ剛の者あり。才藏其祿の半分を與へ、竹内久右衛門といふ。才藏が墓藝州廣島に在りといへり。

石田三成が事

石田治部少輔三成は近江國石田村の百姓佐五右衛門といふ者の子にして、いとけなかりし時、佐吉といひしが、家貧しく近き邊の寺にやりて在りけり。或時秀吉彼寺に行き、佐吉が明敏なる故、呼出して側に仕へしが頻りに祿を增し、水口四萬石與へられける。後三成に人數多招きたらんと問はれしに、島左近一人呼出し候と申す。秀吉それは世に聞ゆる者なり、汝が許に小祿にていかで奉公すべきといはれしかば、三成祿の半分を分ち、二萬石與へ候と答ふ。秀吉聞きて、君臣の祿相同じといふ事むかしより聞きも傳へず。いかさまにも其志ならではよも汝には仕へじ。ゆゝしくも計ひたるかなと深く感ぜられ、島を呼出して手づから羽織を與へて、是より三成に能く心を合せよといはれけり。三成佐和山を賜りたる時、島に祿增與ふべきよしいひけれども、祿更に不足にも候はず、他の人々に賜はり候へと辭しけり。左近が父もと室町將軍家に仕へ、江州高宮の傍にかひなきさまにて隱れ居たりしを、三成招き出しけり。

關白秀次公生害の事　附吉田修理が事

秀吉秀次を養ひて關白を讓り、夫より太閤と申す。文祿二年秀頼誕生あり。秀次よからぬ事ども、さまゞ有りければ、文祿四年七月八日三成太閤の前に出て、關白の謀叛既にあらはれしとて、證を正したる書を見せ申せば、太閤怒りて、宮部善祥坊堀尾吉晴等に下知して、疾伏見に來らるゝか、一先高野に退き申しひらきあるか、二つの中よと云ひ送られしかば、秀次畏り承り候とて、共後粟野木工頭秀用、白江備後守成定、熊谷大膳亮直澄三人に、此事いかゞ有るべきと問はるゝに、白江聞きもあへず、殿下只今聚樂を出給はん事然るべからず候。此三人の中一人伏見へ參りて犯さぬ罪を申開くべし。かなはで討手來らば、防矢射て思召し定められん外他あらんやと申す。熊谷此謀尤さる事なれども、帝都の騷ぎとならん事其恐なきにあらず。又謀叛人といはれんも口惜しかるべし。父子の禮儀なれば、都を出て東坂本に赴き、讒者を糺されん事を申すべし。御許されなくば、唐崎濱に打出て、

勝負を決するの外道なしとぞ申しる。粟野只今危きに逼りて宿を請ふとも聞入れられじ。迚も遁れぬ所なれば、今夜伏見に押寄せて、屍を城にさらすべし。婦人の縊れて死するが如くならんは、口惜しき事なりと申しけれども、秀次みな用ひずして高野山に赴きけるが、

一説に、吉田修理此時申しけるは、謀叛眞實に御座さば、人數一萬我に付けられ候へ、今夜伏見に夜討して、只一時に城を乘破るべしといひけれども、聞入れざりしとなり。修理後に越前秀康卿に仕へ、大阪陣に忠直の供して先陣たり。五月五日天王寺口の御先手加賀利常に命せられしかば、忠直甚忿られし時、本多伊豆守、然らば明日眞先かけて加賀の軍兵を踏越え、おもふ儘なる軍せん。かゝる事は吉田修理よく決斷する者にて候とて呼出す。修理聞きもあへず、夜も短く候、早支度して打立つべし、人々續かれよと言捨てゝ、己が陣所に歸るや否や、ひた〳〵と物具し、先がけして加賀の軍兵の押行く所に、修理馬を乘寄せ、今度の命には岡山表は加賀、天王寺表は越前の三河守先陣を承りたり。各はしらざるやと云ひもあへず、眞一文字に押破りかけ拔けたれば、越前の軍兵おしつゞく。修理は今日必死と思ひ定めければ、本多忠朝の陣より鐵砲を打ちかくると等しく、死ねや〳〵と聲々に呼はり、眞田が陣を切崩し、北ぐる敵を追つかけ、天滿川の深みに馬を乘り入れ、溺死しけるとぞ。

青巖寺にて自害あり。かの三人も所々にて自害せり。是三成太閤の沒後世をくつがへすべき爲に、先關白を失ひけると、後にぞ人申しける。

木村常陸介最後の事

關白秀次高野の青巖寺にて自害ありければ、事を司り寵愛せられし人々、所々にて誅せられ自害しける中に、木村常陸介師春檢使の松田勝右衞門に向ひ、今度關白聚樂を出て伏見に赴かせ給はんと定められし時、師春申しぬるには、太閤御對面だにおはしまさんには、讒者のほど明らめ給はん。されども夫までもなく、中途より遠國へ放流せられ給ふか、かひなく御身を白刃に伏し給はん、必此二つの間なるべし。あはれ太閤の使者を斬つて捨て、諸將の妻子聚樂に有るを人質に取り、罪なき事を申開かせ給ふべし、さもあらんには、和睦も堅く定まり、又戰にも勇名を遺すべし。空しく聚樂を出でさせ給ふ樣や有るべきと、再三諫め申しけれども、吾太閤に敵する心なしとて、承引候はざりき。然れば關白に於て異心ましまさゞる事明かなり。此旨を達して給はりなば、其恩黃泉の下にも忘るべからずと云ひ置きけるを、松田折を得て秀吉に申しければ、太閤木村が志を憫みて、妻子に米百石を與へて、京都誓願寺の近所に住居せしとぞ。

秀吉有岡城へ使者に行かれし事 附河原林越後山脇源大夫が事

秀吉信長の使者として、荒木村重が有岡の城に來る。村重が士河原林越後守治冬猿めがつらだましひ遂にはあたをなすべし、今刺殺さん事易からんと、村重にさゝやきけれども、村重聞入れず。此事を秀

吉に語りければ、秀吉治冬を呼出して、懇に詞をかけ、さしたる脇指を抜きて引出物にぞしたりける。村重指替のなくてといへば、秀吉吾刀一つを頼みて、信長に奉公する者に非ずといはれけり。後秀吉世を平げて、治冬を深く惡みさがし出して殺されけるに、治冬、君の爲に其仇を除くは、武士の常の事なり、秀吉奪き怨を忘れず、無道なりといひて死したりけり。

秀吉河原林に與へられし脇指は、三條吉廣が作なり。河原林が舊友山脇源大夫重信に傳へたり。山脇は攝州の人幼かりしより勇名の聞えあり。甲州に往きて內藤修理が許に在り。其後攝州に歸り、荒木攝津守村重に仕へ、頻に用ひられて長臣たり。村重神田伊賀守と軍の時、神田が軍奉行郡兵大夫は勝れし剛の者なるを、毛付して討取たり。凡首數九十八取りて首供養三度せしとなり。荒木亡びて重信中川清秀の許に隱れ居たり。清秀の妻は重信がをばなり。前田利家、柴田勝家、丹羽長秀一萬石をもて招かれしかども、引籠りゐたりしを、護國公池田信輝公懇に招かせ給ひしかば來り仕へ、山崎合戰に明智が士大將丹波國にて、しら山といひける城を預り居たる村上源之丞と、馬上にて槍を合す。山脇が槍は十文字にて村上が馬の額に疵付き、馬飛出でければ、源之丞馬より落ちけるを、從者かけ來り助くるを、源大夫詞をかけ、村上と引組みける所を、味方數多おち合ひて、村上が首を得たり。其後も功名有りて士三十騎の將たり。

成田助九郎誅せらるゝ事

秀吉北國に赴きし時、丹羽長重の小松の城に立寄りたるに、長重の士成田助九郎といふ者有り。秀吉先殿を北陸道の管領にせんと、志津が嶽にて約束ありつるが、加賀二郡越前若狹を賜はりぬ。先殿過ぎさせ給ひて後小松十二萬石に減じ、既に滅亡に近しとも申すべし、秀吉の不義憎むに餘り有り、臣に討手仰付られよ、輙く刺殺すべしといひけれども、長重聞入れずしてさて止みたるを、秀吉いかにして洩れ聞かれけん、大に怒りて成田を憎む事甚しかりければ、成田小松を退きて伊勢の朝熊に隱れゐたりしを、終に搜出して殺されけり。成田が子半左衞門長重に仕へて、小松の軍に戰功あり。

秀吉公連歌の事

秀吉或時紹巴に向ひ、吾發句せん、汝脇句せよとて、

奥山にもみぢふみわけなく蛬とせられしに、

しかとも見えぬ燈火のかげ、脇紹巴の句なり。

紹巴蛬は鳴蟲に候はずと申す。秀吉聞きて蛬に聲なくとも吾鳴かせんとせば、鳴かずしてや有るべきといはれし時、細川幽齋かたへより、

武藏野やしのをつかねてふる雨に蛬よりほかなく蟲もなし

とよめる歌の候といはれければ、秀吉悅ばれけり。

此歌は蛬の聲ありといふ心にはあらず、雨降る夜は、皆蟲の鳴止むなれば、光の見ゆる蛬より外

蟲なしといふ事なり。

三木牛之介鍬形の詩歌の事

三木牛之介は畠山高政に仕へて剛の者なり。五尺ばかりの鍬形打つたる冑を着て、運在レ天見レ敵無レ退、又「人は只さし出ぬこそよかりけれ、軍にだにも先がけをせば」とよめる歌を、鍬形に書きたりしが、天文十一年正月河内の合戰に、一番槍を合せ、敵の大將を討取りたり。天文十六年七月二十三日三好政勝入道宗三と舍利寺の軍に討死しけり。後此歌の事を秀吉に物語する人有ければ、秀吉歌の趣意宜からず。吾ならば「人は只さし出るこそ宜りけれ、軍の時も先駈をして」と詠べき物をといはれけり。

谷大膳武勇討死の事

天正六年秀吉播州三木の別所長治を擊つ時、谷大膳は濱手の大將たり。兼て大膳は寄騎にと秀吉望まれしかども、信長許されずして加勢たらしめらる。大膳敵三騎と馬上にて槍を合せ、皆討取りたり。秀吉疾かさの丸（出丸の名なり）攻められよといへば、大膳城堅固にして容易に攻取り難しと答ふ。秀吉日頃勇名高き大膳小城一つ破りかねたるやと詞をかけられければ、大膳も怒り、秀吉も既に刀の柄に手を懸くべき色なりしかば、竹中半兵衛立ふさがり、戰場の勝負こそ力を盡すべきに、いかなる事ぞといふ處に、蜂須賀彦右衛門も來りて、秀吉の轡を取つて押返す。夜に入りて秀吉酒肴を持たせて大膳が陣屋に至り、けふの武功拔群なり。先の問答は我過にて後悔大方ならずとて、懇情甚し。其後大膳

手勢を率てかさの丸へ攻めかゝる。城中もこゝを大事と防ぎ、矢石を打出せども、大膳少しもひるまず、士五十騎歩卒二百計一の城戸口を押破りたれば、手負死人數をしらず。寄手押つゞけば、大膳念なく乘破りたるが、數ヶ所手を負ひて蹞き居たる所に、法師武者猩々皮の羽織著たるが、引返して大膳に向ふ。大膳吾疲れたり、近寄りて首を取て高名にせよといふを聞き、走懸りて一太刀打つ。大膳敵の草摺を取て引寄せ、脇指を抽きて刺貫く處に、別所が士大將由井小兵衛と名乘つて引返して馳來り、大膳を一太刀斬りたり。かゝる處へ大膳が嫡子出羽守十七歳なるが走寄つて、たゝみかけて由井を打て芝居に打する、押へて首を取り、父に向へば大膳は息絶えたり。出羽は父の死骸を陣屋に入れ、取たる首を秀吉の實檢に備ふ。秀吉大膳が討死せし由を聞きて、せめて死骸になりとも對面せんとて陣屋に行き、惜しき人を討たせけるよとて、涙にむせばれけり。

秀吉家譜に載たるとは大に異なり。然れども此一條は谷の家に傳へたる說なる由なれば、家譜は誤なるべし。

大膳は江州犬上郡の人、信長に仕へて川尻肥後守稻葉伊豫守と同じく軍の評定の人に加へらる。十四歳より四十七歳まで槍を合する事九度、首を取る事十七度なり。

戸川肥後守秀吉公を負ふ事

浮田秀家伏見にて秀吉を饗しける時、廊下より行く處の白砂の上に、戸川花房を始として並び居て拜

謁す。秀吉戸川達安に吾をおへといはれしかば、戸川秀吉をかきおうて書院にゆきけり。秀吉かゝるふるまひ多かりければ、其よりして古き家々の禮儀も多く失ひたるにぞ。

黑田如水先見の事

秀吉病重かりしかば、朝鮮渡海の軍兵を引取らんと計られける時、朝鮮へは必德川殿赴かせ給ふべし。さらば日本は自ら德川殿に歸服すべしと人々いひし處に、思の外に、秀吉石田三成に命ぜられて、朝鮮に赴きけり。さては日本の權威は三成に歸すべしといひふらす。黑田如水獨是を然りとせず。朝鮮の事三成是を承るにより、日本は德川殿の掌の中にありと覺ゆ。三成是より伐りて、人是を嫉みなん、然らば德川殿の仁德に靡從て、日本は自然と德川殿に歸服せんといはれしが、果して然りき。

秀康卿伏見にて妓女國が舞を見給ひし事

越前の秀康卿伏見にて國といふ妓女を召して舞せられし時、襟にかけたる水晶の數珠見苦しきとて、物具の上にかけ給ふ珊瑚の數珠を賜はりけるが、しばし舞ひける時、頻に涙を流し給ふ。人々怪しみければ、秀康卿、今天下に幾千萬の女あれども、天下一の女と世に譽められ、名高きは此女なり。吾天下第一の男と世にいはれず、あの女にさへ劣り果てたるかとおもへば、泣かれけると仰せ有りけり。

直江兼續が事

越後の士大將直江山城守兼續は、朝日將軍義仲の乳子樋口次郎兼光が末孫なり。謙信に仕へて景勝に至る。景勝奥州にて百萬石を賜りし時、米澤三十萬石を直江に與へられ、陪臣の中第一の大祿なり。長高く容儀骨がら雙なく、辯舌明らかに殊更大膽なる人なり。且文藝にも暗からず。五臣注の文選は此人板行させたるとなり。詩をも作りて、

春雁似レ吾吾似レ雁。洛陽城裏背レ花歸

などいふ句も世に聞えけり。伏見の城にて諸大名幾等も竝居たる中に、伊達政宗懷中より金錢取出して、人々に見せられしに、其頃金錢の始りし比にて珍しとてもてはやさる。直江が末座に有りしを、これ見られよと有りし時、直江扇の上に金錢を置きて打返し、女童のはねつくやうにして觀しかば、政宗いや苦うも候はず、手に取られよと言ひも終らぬに、直江謙信の時より先陣の下知して麽取りし手に、かゝる賤しき物とれば、汚れ候故、扇に載せて候とて政宗のかたに投戻しけり。兼續父も山城守といふ、もと僧なりしが、還俗して武勇を事としけり。

石田三成直江兼續密謀の事

石田三成或雨夜のつれ〴〵成りしに、直江を近付け私語きけるは、卑賤より出て天下を治るは大丈夫の志なり。我豐臣家の恩深し。太閤斯世におはしまさん中は思ひ立つべからず。されども終には旗を揚げ天下をとらばやと存ずるなり。其時德川家父子をば、如何して討亡すべき武略を廻らし給はらんやと語りしに、直江此を幸とや思ひけん、是こそ志す所に候へ。されども德川父子關八州を領して、且蒲生氏郷といふ勇將に親しみあり、輙く勝べからず。先氏郷を滅し、景勝に會津を賜りなんや。然ら

ば吾景勝に謀りて旗を揚げ、我先陣して師を出すべし。其時西國の諸將たちをかたらひ、押寄せて關東を討亡すべきよとこまゞと相謀り、終に氏郷を毒害し、後秀行八十萬石の地を削りて、會津を景勝に秀吉賜りたるは、此謀より事起るといへり。

兼續惺窩先生に逢ひし事

直江兼續惺窩藤歛夫に對面せんといへども、聞入れられず、兼續おして行きたれば不在なり。度々招けども行かざるに、今日來りたるにも逢はず、僞りて他に出でたるとや思はんとて、直江が許に行かれしに、直江其日關東に赴きしかば、跡を追ひて大津に至りて對面あり。直江廢れたる家を急に取立つる時、人臣の心得はいかにと問ふ。惺窩事を速にせんとせば、却りて敗るゝ基なりとぞ答へける。後に直江景勝に進めて旗を揚げさせ、必家を滅すべしと惺窩いはれしが、果して景勝に事を起させたるが其功ならざりき。

石田が黨東照宮を謀り奉らんとせし事

慶長三年八月十八日太閤逝去、其比台德院殿伏見におはしまして、太閤の病重かりしかば、關東に赴かせ給はん事、延引なりしが、俄に十九日伏見を發して關東に歸へらせ給ふ。是東照宮遠大の神慮なるべし。四老奉行内々相計り、德川殿伏見に有りて、權威日々に增長すべし。秀賴公を早く大阪へ移し、諸方一同に參集りて尊敬すべき事然るべしと、東照宮に强ひて申して、同四年正月十日大阪に移居あり。東照宮も送らせ給ひて大阪へ御出あり。片桐東市正且元が宅に御止宿ありけるが、十二日のあけぼのに俄に打立ち給ひて、淀川を御船にて上らせ給ふ處に、牧方近く川岸に人多く群りけり。若や謀り奉る叛反の輩に有べきかと驚く處に、井伊直政が足輕と見ゆると申す者あり。程なく御船近く成りければ、脇五右衞門などいへる物頭跪きて待ち奉りて、頓て伏見に入らせ給ひぬ。

又此時御乘物には村越與三右衞門を乘せさせ給ひ、東照宮には陪者の騎馬の中に御まじり有りたりともいへり。又非伊直政は馬上にて御迎に出で、物具して其上に常の衣服著たり。直政が手の者、皆下に具足を著、弓鐵砲の者彼是二千計にて參り、殊に御愛でありける。彌八鹿毛を引き來りければ、其儘打乘らせ給ひて、歸らせ給ふともいへり。

此頃既に世間さま〳〵にいひふらし、いかなる事か出來らんと人々あやぶみおもへり。東照宮も御屋敷に大竹にて菱垣を結はせられ、御門を押開き、敵寄來らば堅固に防ぎ守らせ給ふべき設あり。御門を開く事然るべからずと申す者ありければ、門を閉ぢて守らば敵に侮らるゝなり。只押はれて軍の支度をせよと仰せ有りけるとぞ。京極高次參りて大津の城へ引移らせられんやと、進め申されけるを聞召し、敵寄せば上の臺へ押上げ、金札の宮の邊にて眞丸になりて一合戰すべし。吾兵二千計やあらん、敵何萬もあれ打破る事かたからずと仰せられけり。正月十九日安國寺瓊長老、生駒雅樂頭、中村式部少輔、堀尾帶刀四人四老五奉行の使として、東照宮に參りて、伊達政宗、福島正則、蜂須賀至鎭緣組の事に

よりて、徳川家獨擅なる事ども、豐臣家の爲然るべからざる由申旨あり。依て世の中愈さまくなる風説あり。其頃榊原式部大輔康政伏見に上るとて、二月二十五日尾州宮に著きけるが、伏見の騒がしき由を聞き日夜道を急ぎて、道すがらにてきけば、伏見にて既に、東照宮の御館へ敵押寄せたりなどといひふらす。二十六日の晩膳所にて伏見よりの飛脚に行逢ひ、いまだ弓箭は始まり申さぬといふを聞き康政悦んで則膳所に陣し、秀頼の下知と稱し、伏見の騒に付、東海東山兩道の人留するとふれさせ、勢田矢橋を三日押留めたり。其比の騒しきに諸國より聞傳へ、京伏見に集る人殊外多かりしに押留められ、草津野洲を始として何萬といふ數計るべからず。扨康政三日の後未刻に構へたる關所をひらかせたれば、旅人一同に京伏見に入る。康政膳所を立て七千計の人を率ゐて伏見へ入りければ、京にて關東より數萬の軍兵馳著きたりといひふらす。康政小具足著て鉢卷し、馬じるし押立てゝ乘りければ、御前に召して御手づから御のしを下されけり。康政下知して御藏より料足數千貫出させ、人々に分渡し、内府の軍兵六萬にてかけ著きたれば、館にて兵粮の用意俄に設けかねたりといはせて、店屋物を買來らしむ。數千人京伏見淀に馳廻りて、赤飯菓子酒やうの物一つも殘らず買來れば、關東より十萬の軍兵集りたりと人は思はぬ者もなし。是に依りて、石田が謀空しくなるといへり。東照宮、柳生又右衛門は、石田が士大將島左近と同國のよしみにて懇なりと聞召され、左近方へ行きて物語して、彼はいかにかいふらん、聞て來れと仰有りしかば、柳生左近に逢ひて、世間の物がたりし、いかに成るべき事ならんといひければ、左近聞きて今松永明智二人の智謀決斷ある人なければ、何事か有るべきと打笑ひけり。此仔細は或時石田密謀に及びけるに、左近豐臣家の爲を存ぜんに斯あらで止べきや。されども爰に存ずる旨あり、大事を企るには、我志す處を、無二無三に決斷して少も猶豫有るべからず。しかるに、去年より度々仕果すべき圖を空しくはづし給ふ事多し、既に時を失ひぬ。能々世のありさまを見るに、石田の家を惡む人々大かた徳川殿に心を寄せたり、當家の存亡計るべからず。一日の過ぐるも殘多し、只理を非にまげて、唯今まで疎遠の諸大將達へも、へりくだりて遺恨なく計ひて交り親しみ、しばらく時を待つべきも、一つの計策にてこそといひければ、三成されば縱令一時に能志を遂ぐるとも、後の安かるべき樣を計るなりといひけるに、左近いや〳〵事能く一時に勝を得るならば、後に何の危き事か候べき。内府に親しき人々を積るに、其兵二萬に過ぐべからず。味方素より心を合する大國の人々、又近國の兵を集るとも、忽馳寄つて五六萬には及ぶべし。景勝卿采配を取て下知し、關東を攻破らんに何程の事か候べきとて、又存る旨をいひ出しけるに、客の來て三成座を立ちければ、樫原彦右衛門居殘りて左近に向ひ、いかにも仰さる事なり。松永彈正明智光秀は無雙の惡逆の者なれども、事を決斷するに、誰が相竝ぶべき、此詮議の破り相手に賴むべきものをといひけるとかや。其れによりて、かく柳生には答へけるとなり。

細川忠興忠告の事

石田三成を始め相組する人々加賀利家を推尊みて、東照宮を傾け奉らんと日夜相謀れり。利家の長子利長細川越中守忠興を招きて、累年親しみたる間薄からず、さぞな危ふからんを扶給はんやと問はるゝに、二代の知音にて候へば、聊麁略候まじと答へらる。利長尤斯こそ有べけれ、頃日石田三成小西等相計つて、内府の向島の館を攻圍まんと議決しぬ。潛に知らせ候ぞと語られしかば、忠興熟々と聞きて、日比の親しみ斯る大事を告知らせ候事淺からぬ事なり。心得候ひぬ。明日參りて申合せ候はんとて歸られけるが、

是はこれより前、東照宮は藤森におはしけるに、井伊直政が士木俣土佐、もし風に乘じて御館の隣なる宅に火をかけなんは、危き事なりと申しければ、東照宮御寢所へ土佐を召して具に聞し召され、其翌日向島にうつらせ給ひけり。

直に向島へ參りて、東照宮御對面ありしかば、忠興近習の人を屏けて、只今參る事別の仔細も候はず、石田等黨を結び利家を依賴として、君を亡し申べきと企て候。利長と年頃の親しみによりて具に洩れ承りぬ。彼等が謀に落ちざる御設こそ然るべく候へと、申されけるを聞し召し、過ぎにし年信長攝州出陣の比、弱年にて武勇の譽れ有りし故申し通せしなり。斯る深志あらんとも知らざりける悔しさよと悅ばせ給ひて、榊原康政を召して、いかゞ有るべきと仰有り。事急に候、後れては人に制せらるべしと申す處に、忠興國のたすけは人の與する事最一に候へば、淺野幸長を召され候へ。彼は必德川家に心を寄すべしと申されければ、頓て使を走らせらるゝに、取あへず參られたり。忠興出向ひて、事の仔細を語らるゝに、人多き中にかゝる事を知らせらるゝ事交のかひ有り。かゝる時は疑の生じ易き習ひに候とて、忠興幸長先誓紙を書きて奉りぬ。若し敵寄せなば幸長は宇治川を固め候なん。忠興は敵の中に打交り、不意に一軍仕候べしとぞ取計られける。されども是も始終勝を全うすべき道にもあらず。利家と和平有るに踰る事候まじ。只兩人に任させ給ひ候へとて、其翌日忠興夙に利長の許に行向ひて、昨日の密謀一々内府に告げたりとぞ語られける。利長色を變じて、こはそも戲に候や、實に候やと驚かれけり。忠興されば愚者も千慮の一得に候。此の事を思慮するに、石田謀つて兩雄を鬪はしめ、其弊に乘んと料るものに候。兩雄相鬪ひて亡びなば、安藝の輝元備前の秀家などを大將として、吾等が如き者は手もなく攻平げなん所存見顯し候。寛仁の内府に與してこそ、家をも起すべけれ、三成と心を合せて名を汚し身を失はんは必定にて候。かく申詞を許容候ひなば、とく内府と合親利家と和睦有りて、世穩かならん事こそ然るべう候へ、是全く前田家を佑くる所にて候と、詞を盡して規誨せられしかば、利長も深く思慮して、道理に當れる事どもにて候、さらば父に申さばやとて、利家に斯くと告げて利害を詳に語られけるに、利家も諾せられけり。

又一説に、五老五奉行の内爭論不和の事あらば、生駒雅樂頭親正、中村式部少輔一氏、堀尾帶刀吉晴三人和平を取計ふべしと、兼て太閤の遺言に因りて、井伊直政に就て、和平の事をはかれりとも

いへり。

卷之十二

東照宮細川家の難を救ひ給ひし事

關白秀次生害の後、細川忠興の家に罪蒙るべき事起りけり。其仔細は秀次當時の大名財用乏しきには潛に金銀を貸し給ふ事あり。是は人の心をとらんが爲、且は財を利せんが爲なりけり。忠興も黃金二百枚をかりてければ、彼家金銀出納の事を司どれる人急ぎ彼金返し給ふべし。券契を破り捨て候べし。左なからんには、太閤の奉行に券契を出すべしとぞ申ける。忠興いかにも叶ふべからず、此事太閤に洩聞えなば、罪科に處せられん事疑ひなし。いかゞすべきと案じ煩らひ、長臣相集りて議しけるに、松井佐渡守申しけるは、某年頃德川殿の御内なる本多佐渡守正信と親く相語らひ候。彼に付きて德川殿を賴み參らせん。德川殿はさる賴母しき人にておはしませば、いかで是程の事にて人の家亡んとするを見捨て給ふ事は候まじと申す。忠興我日比内府と親しくもなし、斯る事賴むに便なし。されども汝正信と親しからんには、試に計り見よといふ。松井本多にしかぐの事有りといふ。德川殿聞し召し其儘松井を召され、人をのけて尋ね問はせ給ひ、正信して唐櫃二つ開かせらる。一つに黃金百枚づつを入れられたり。其黃金の箱に題せし年月を見よと仰有り。正信是を考るに、二十一年の前未三河に御座有りし時に候と申す。德川殿松井に向はせ給ひ、凡金銀は出納の司ある事にて、若し人知れず用んと

する時に吾心に任せ難し。されば此黄金を貯る事斯る事を待に年久し、今其家の爲に吾年比の志達しけるこそ嬉しけれとて、自ら是を松井に賜ふ。松井大に悅び、かゝる有りがたき御事こそ候はね、既に亡んとする家の斯再び繼べく候事偏に君の御恩なり。細川が家の候はん限は、いかで此情を忘れ奉るべき。速に本國に申下して、黄金めし上せ償ひ奉るべきにて候と申す。東照宮聞し召し、いや〳〵此事世に洩聞えなんには、兩家の禍にこそあれ。夫故に斯人知れず用ふべき料の物取出したれ。ゆめゆめ償ん事然るべからずと仰られしかば、松井殊更に悅び、急ぎ歸て此由を申候はんとて、御前を立つて出でにけり。遙經て忠興其事となく御館に參り、御對面の序に正信を呼出し、東照宮に向つて申しけるは、年頃忠興が家人に仰下されし事、謹で承り候。何事のおはしますべきには候はねども、若し御家に事有らん時は、必君の御爲國をも身をも捨て、此度の御情に報じ奉らんずるにて候。さりながら忠興常に伺公仕て候はんには、本意遂げん事叶ふべからず。是より又素の如く疎々しくこそ候べけれとて、御暇申して出でぬ。されば年頃忠興東照宮と親しからずして、利長を諫爭はれし故に、利家も一向我家の事思ふなりと心得て、忠興の申す旨に從はれしとなり。

七人の大將石田を討たんとせられし事

慶長四年大阪に在りたる諸將の中、福島正則、淺野幸長、黑田長政、已下七人石田と不和なりし人々使を以て、朝鮮に有りし時、各々力を盡し軍せしに、目付に定められし福原右馬助直高、垣見和泉守家純、熊谷内藏允直陳、太田飛驒守政信等私曲を構へ、太閤に達せざりし事ども憤りて罪科に處すべき由、申しやられしより事起りて、爭論甚しく、使度々に及べり。七人の諸將此事たゞに止むべきや、石田を討亡しても必所存を遂べしとの趣を石田聞きて、上杉景勝に如何すべきと問ふ。上杉も案じ煩ひしに、佐竹義宣日頃三成に親しかりけるが、是を聞きて伏見より大阪に赴き、三成が許に到りて別に存ずる旨もなし。只德川殿に告げて和平の事を賴むべき外謀有るべからずとて、三千計の兵を以て三成を伴なひ、伏見に赴きければ、諸將事を延したる故、石田を逃しつるよとて、既に追つかけんとせられしに、早伏見に著きたらんと聞えしかば、齒をかみてさて止みけり。東照宮聞召し太閤在世の時は寵を賴みて權威に誇り、無禮にも有りぬべし。今に當りて諸將の申さるゝ處、其理なきにあらざれども、罪の疑しきは輕くすとかや聞きぬとて、强ひてなだめ給ひけれども、尙止むべからざれば、さらば今世治りたるに、弓箭を起さんとや、力なき事ども なり。我石田と心を合せ、諸將と軍すべしと仰られしにより、止事を得ずして怒を押へてさて止りぬ。其後今世の亂となるべきも、又穩かならん事も一己の所存に有るべし。暫く佐和山に退きて、公の萬事に相たづさはる事なくて然るべからん。子息隼人正の事は、我よく家を全うせん事を計るべしと三成に仰せられしかば、忝き由謝して佐和山に歸るべきや否や、景勝に相計りしかば、景勝我會津に歸りて、上らずば內府催促有らん。其時侮りたる體を顯して罵るほどならば、必軍を出さるべし。行きがかりにたやすく打破られんや、固く支て

戰はん其間に、大阪に討つて出でて、素より心を合する諸將を集め旗を揚げられよ。是に過ぎたる謀有るべしとも覺えずと計られしかば、三成佐和山に赴くにぞ定めける。三成が士大將島左近昌仲三成に勸めけるは、秀家秀詮も兩端を持するにや覺束なく候。佐和山の軍兵を計るに、一戰を決するに不足候まじ。一千餘を止めて佐和山を守らせ、蒲生備中、舞兵庫、高野越中と某各二千の兵を率ゐて風上より火をかけ、所々を焙となして攻めかゝるほどならば、内府拒ぎかねて引退かれん處を、追詰々々軍せば爭か打洩すべき。萬に一つも志を遂げざるならば、潔く御腹召れ候へ、空しく佐和山に退きなば後悔するとも益あらじ。居ながらあたら圖を外さん事口惜く候といひけれども、三成は景勝と相謀りし故、昌仲が謀略を納れずして止みぬ。三成既に佐和山に赴くに及んで、七人の大將猶憤深かりしかば、道に俟ちて討取るべしと云ひふらす。東照宮聞し召し、今は打捨置かばや如何すべきと本多正信を召して仰せあり。正信つら〳〵思慮して、今日本を取つて德川家に獻ずる者は、石田にてこそ候へ。其故は三成奸曲あるゆゑ人々惡みて候へども、又三成に與する者も多く容易く打亡し難し。故に言を禮儀に託し、手を德川家にかりて亡さばやと存ずる人々候へば、三成今亡びて後、悉く平均に歸せんや。諸將外には殿を敬すといへども、内には隙を伺ふ人も候はん。故太閤の恩を得たる豪雄秀頼に背くに忍びず。三成を憎むの心を移して殿に懷き申すべし。三成あらば殿を敬し重んぜん事愈〳〵厚かるべし。三成久しく人の下にかゞむべき者に候はねば、頓て弓箭を取べき事掌の中に有り。三成敵とするに足らんや。其時三成に打勝ち給ひなば、殿自然に勢を得させ給ひて、誰か靡き從はで候べき。日本三分の二は、殿に歸服すべく候、只三成に御心を付けられ、暫く彼を立置かれ候こそしかるべからめと申しけるを聞召し入れられて、三成が旅程心許なしとて、結城秀康卿をもて送らせ給ひけり。

東照宮上杉御征伐の時近江國水口を立たせ給へる事

東照宮景勝を征伐に關東へ向はせ給ふ時、江州水口に御泊りあり。其明の朝長束大藏大輔御膳を奉るべきと申して御約束ありしに、夜四頃俄に水口を打出でさせ給ふ。御輿をかく者出合はざりけるに、渡邊忠右衞門守綱草鞋脚半がけにて御輿のかたゞをかきけるを、誰ぞと仰せられしかば、渡邊忠右衞門にて候と申すを聞召し、何とてかく不意に打出づるを知りたるぞと御尋ね有りければ、若年の時より御傍に仕へ奉り候身の、是程の事を仕るまじく候や、情なき御詞なりとぞ申しける。忠右衞門宵よりかくあらんとおしはかりて、御輿のふちを枕にして臥居たりけるとかや。其夜土山に著かせ給ひて、翌日水口へは昨夜時をとりたがへて、早く立候ひけると仰せ遣はされけり。

東照宮花房助兵衞に起請文を書けと仰せられし事

東照宮景勝征伐の御時、小山にて石田兵を西國に起せる告を聞し召し、前には景勝が勇將なるあり、西國は皆敵なりと人々驚きたりしに、花房助兵衞職之を召して、汝は近年佐竹が許に有りて義宣が心はよく知りたらん。かゝる亂に二心有りて、軍を出しわが歸る道をや塞ぐべき。又義宣謀反の志ある

まじとならば、起請文を書きて我に見せよと仰せられしに、花房承はり、義宣はきはめて信のあつき人に候へば、別の仔細候まじ。只人心の反覆は父子の間も計りがたき事に候。起請文は御ゆるされを蒙るべしと申す。東照宮、助兵衛は浮田が家の長臣と聞きたりしに、器量の小き男よとて、大息つかせ給ふ。花房かくと後に傳へ聞き、われ起請文を書くならば、佐竹二心あらじと軍兵の疑を散せん爲の仰せなりしに、察せずして起請文を書かざりけるこそ口惜しけれ。たとひ義宣軍を出したりとも、我何の罪の有るべきと、深く悔みけるとぞ。

下野國小山にて上杉入庵議論の事

景勝を征伐せさせ給ふ時、七月二十四日東照宮下野國小山に御著陣ありける處に、其日伏見より石田三成佐和山を出て大阪に至り、諸大名と相謀り亂を起すの旨告げ奉る。則先陣の諸大名諸將を召され、東條法印津田小平太、本多中務大輔、井伊兵部少輔を以て今度三成兵をあぐる間、定て妻子遠を悉く押籠むべし。心中の難義察せられぬ。且豐臣家のために企つる旨申しふらせば、秀吉の恩を請けたる人々多ければ、とく大阪におもむき妻子のかた付、又は三成に心を寄せられんも少しも遺恨にあらずと仰出されけり。皆疑惑や有りけん、とかくの詞なかりけるに、上杉義春入道入庵末席に有りしが進み出で、福島正則、加藤嘉明、黑田長政に向ひ、各思慮にも及ぶべからず、人じちを三成に出し置き、只今御味方申して其質を棄てば、妻子の恨世の誹も遁るべからず。秀頼公へ出し置きたる人質を、三成横取にしたるなれば、三成と一戰に及ぶとも、妻子の恨世の誹も有るべからず。人はともあれ我は先御手を引き討死を遂ぐべしと申されければ、皆一同に御味方仕るべしと決定しぬ。其座に是程の事辨へざる人はなきにあらざるも素よりなれども、時にあたりて義春の片言拔群に聞えけるとなり。

又一説に、一座いまだとかくを申さゝる處に、福島正則何とて石田に從ひて弓箭をとらんや、秀頼公に疎遠だにおはしまさずば、神明に誓ひて正則御味方たらん事勿論なりといはれし故、皆一決したりともいへり。

入庵は上杉彌五郎とて、越後上條の城主後民部少輔といひて、景勝の姉婿なり。

義春は能登の畠山義則の弟なるを、五歳の時より謙信もらひ置かれて、上杉定實の養子とせられしなり。

謙信の先陣の大將にて武名世に高し。景勝新發田因幡守治長が謀反を討つて、新發田の城下におしつめらるゝ時、治長切つて出で景勝の先陣を放生橋迄追崩し、景勝の旗本へ押しかゝる。此時義春景勝の旗本の先に有りしが、日の丸の旗を取つて三十間計先へおし出し、手廻りの士どもおり敷かせ、槍衾を作りて待ちかけたる故、治長引退くを追討にしたる勇將なり。大阪冬陣に二條の御城御書院に諸大名出仕の時、東照宮入庵を召し、上杉家の武者おしの事ども御尋あり。入庵詳に答へ奉るを聞し召し、上杉家の軍法、素より聞及びたる事ども深く感じ入りぬと仰有り。諸大名列坐の眞中に、入庵小男

なるが言語分明に、其次第誠に懸河のごとくなれば、諸將何れも武功智謀の人々なれど詞を出すものなく、深く感じ入りたる色なりけるとかや。

渡邊惣左衛門野中市左衛門忍びて大阪に使する事

同じ時國清公（參議輝政朝臣の事）小山におはしまし、大阪の北の方に誰か使すべきとて、慶長五年七月二十四日長臣を召して、其姓名を書きて出せと仰せらる。各承りぬとて、其明くる朝書付けて出すに、渡邊惣左衛門とぞ記したる。公も左の袖より出させ給ふに、同じく渡邊を記させ給へり。いかなる忠難をも堪へて事能使すべき人なりと人々思へる故なり。さらばとて渡邊を召して此旨を仰せられしに、此は大事の御使にて候と辭し申す。衆議一決したる上は、とかくの論に及ばざるとの仰を蒙り、さては今一人添へられ候へ、人は病と申事も候へばと申しければ、野中市左衛門を相副へらる。書二通を渡させ給ひて、仰を承りけるが、程なく東西の戰あるべきに、大阪に赴く事こゝろよからぬ色の見えければ、公たやすく關所を通り得じ。若殺されたらば吾馬の前にて討死したりと思ふべし。たばかりおほせて、大阪の屋敷に到らば、今度の一番首取りたるにもまさるべしとの詞により、二人下人も召具せず、七月二十五日小山を出て、其比三河の吉田は公の領地なりしに、己が宿所へも立寄らず、笠をかたぶけて忍びて打過ぎ、尾州熱田に到れば、船著に大竹の虎落をゆひて守りたり。神職の大原左衛門大夫は渡邊が知れるよしみ有りて、潛に立ちよりたり。爰にて大夫が下人竹をかたげ、わら一把を括り付て、七八町計先達て此をしるしに案内者として、伊勢の堺に行きて夫より野も山も皆敵の中を忍び通れば、飯を乞ふべきやうもなく、あら米をかみ關の地藏に行き著きぬ。行きあふ人ごとにあやしみ、あはれ關所にて殺されなん、よく心得られよと口々にいふ。關の有樣傳へきくに、なか〳〵通るべきやうは思ひもよらず。伊賀越にやかゝるべき、淺間越にや行べきと、二人打ちかたらひて、先伊勢の大神宮の祝上部左近が許に行て宿を借らんと立ちよりければ、今何方より參り詣づる人のあるべきとて、取りあはず。左近立出でて一宿の事はさて置きぬ、とく出よ棒にてたゝき出でせと罵りけり。二人惡き奴かな、まさしく池田家の恩を請けたる身なるにと怒れどもせんかたなく、空しく立出づる時、左近追ついて何國の人ぞと問ふ。池田三左衛門尉が士なりと答ふ。左近しからばそこの川堤の下に乞食のすてたるむしろをかぶりて待たれよと小聲にいへば、二人さる樣もあらんとて、いひつる詞の如くしたり。夜に入りて、左近來り、畫の乞食は何處にあるといふを聞きて、爰にありといふ。さてひそかに相約して、左近が家の裏の戸口より内に入り、奥の一間にしばし疲をやすめたり。左近今の時家にある下人も打ちとくべきにあらねば、畫のたのもしげなき事を申したるよとて、いそぎ飯をしたゝめ出し、夫婦給仕をしたりけり。さて道の事を問ふに、淺間越は人の往來まれなれば、此頃は女乞食をも殺し候。中々通りがたかるべし。只一命をかけ物にして、伊賀越を通られ候へといへば、さらばとて、荷だはらをおひ破れたるつゞれに身をやつし、御祓箱を笠につけ、刀をも左近が許におき、い

と見ぐるしき小脇ざしを求出して指たりけり。かくて曉に宮川を打渡り、關所近くなりて見れば通るべきやうぞなき。やがて一封の書をば、深田の中に深く隱し埋み、其日は行暮れて山にふし、あくる朝一通の書をこよりにして、青草をとりて一二三の印をし、笠の緒として一の關所に行きかゝる。固めたる士共かゝる大亂に伊勢に詣づる者やある、それ打殺せとひしめきけり。二人はさわがず、とくより伊勢に詣でて此騷ぎに及び、一夜の宿をもかすべからずとの法令により、いづかたにとまるべきやうもなく、進退きはまりて候。大阪の妻子も心元なく、天照大神をたのみにまかせて歸り候ぞとたばかりけり。さらばとて、荷だはら御秘箱脇ざしの鞘を打ちくだき、髮をとかせ帶給草鞋までも改め見て、あやしき事もなきよとて通しければ、夫より次の關所をも事ゆゑなく打過ぎて、大和の奈良に出て寺に入り、酒を求めて飲みたりけるに、住持の僧さかな參らせよとて別によき酒を出し、又薄茶をも出しければ、悅んで二人腰につけたる錢を與ふるに、小僧多しとて請取らず。其時住持の僧の曰く、能もたばかりて爰迄おはしたれ、たま〳〵爰まで忍び來る人も候へど、皆關所にて殺され候。よくたばかり給へ。故ある人とおぼえたりと語れば、二人心の中に打驚きたれども、伊勢に參りける物語して、天照大神に助けられて無事に下向するにてこそ候へ、此より後もかくあらんと氣づかはしくも候はずと答ふ。僧つく〴〵と聞きて是を信せず、さならんには、別の事も候まじ。關所を事故なく通られたらんには、朋友たちに奈良の出家は見つけたるもの哉とかたられよといふ。二人見しられじと打笑ひ出て行く。奈良と大阪との間に關所有り。何者ぞと咎めければ、又前の如く伊勢に參りたる歸路に候といへば、さらばとて改めたり。あやしき事もなきに、通さばやといふ所に番の坐上に有りける老人、物ないはせそ是非を論ずるに及ばず、切つて捨てよと下知しけり。末座より眞の參宮の者と見え候を斬つて棄てなば神の祟も恐ありと、再三いひしかば、二人危き所をのがれて大阪に行著きたり。東國方の諸將の屋敷には虎落ゆひまはし、大阪の兵士門々を警固して、內外の出入も絕えたれば、兼て知りたる材木の商家に行きて大根を買ひ、若や聲を聞知ると打廻りて大根を賣る眞似したり。久保田市大夫窓より見て、いかに渡邊に似たる人もある哉といひて、大根と一聲よべば、渡邊久保田が窓の下に行き、笠をとりて大根をさし出すうちに、宿をとへばしか〴〵なりと答へて材木屋がもとにぞ歸りける。野中に斯くと告げて悅びあへり。若原勘解由北の方に聞きて有りけるに、久保田かくといへば、門を守る大阪の士にことわりて薪を荷ふ人夫三十五人を出し、其中一人を殘して渡邊を其かはりとし、薪を荷ひて門を通る時、警固の士、此男は今朝出たる者にあらずと押留めたり。久しく煩ひて打臥居たるが、快くて今日出でたる人夫なりといへども、更に聞入れず。勘解由立出てさま〴〵いひ斷り、通り得て北の方の前に參り、公の仰をこま〴〵と述べて、笠の緒をときて奉る。北の方は簾を隔て對面あり。其後渡邊に祿ましあたへ給ひ、賞せらるゝ事大方ならず。誠に危き所を通れ得たる事どもなり。

上杉景勝會津表手配の事

東照宮會津を伐たせ給ふ時、景勝は謙信の影堂の前にて、諸將士卒に二心有るまじきとの起請文を書かせ、妻子をば會津にこめ燒草を積ませけり。敵寄來らば逆よせにせんとて、所々に地形をならし白川に安田上總介を先陣として、島津下々齋を二陣とし、景勝は只一騎脊炙の嶺に登り、樵夫を案内者にして山中を通り、白川の境の明神に出兵をわかち、不意に討つてかゝるべき道を計られしに、上杉方にも此をしらず。まして寄手は露もしらず。東照宮の先陣大田原に陣して白川より一日の行程なり。景勝大に悅びて其勢八千を率ゐ長沼に陣し、寄手白川に攻入らん時、山中の間路より思ひもよらぬ後にまはり、東照宮の御旗本に切つて入り、萬死一生の軍せんと謀られしに、石田兵を起すのよし聞えて、東照宮宇都の小山より引きかへさせ給ひけり。

東照宮小山の途中にて竹を伐らせられし事

會津征伐の御時、東照宮下野小山の途中にて左右の近習の人々に向はせ給ひ、我麾を忘れたり。あれなる小竹林に串になるべき細竹を切れと仰せられしかば、則切つて奉るを、たゝう帛をとり出させ給ひ、鞍の前輪におしあてゝ切裂きてくゝり付け、二つ三つ打ふり給ひ、景勝などを打破らんには、是にて事足りぬとの給へり。實に麾をわすれ給ふにはあらず。上杉家は父より已來武勇の家にて、景勝驍將なれば、人々あやしむこゝろある故、景勝を侮らせ給ふの機を示させ給ひしにや。然る處に、西國中國一同に御敵なりといひふらし、小山より引返させ給ふ時、又彼竹林を過ぎさせ給ふに、上方を攻破るには、此麾も無用の物なりとて棄て給ひけり。前後に大敵あれば、人々愈〻疑ひおそるゝ故に、猶々恐るゝに足らざるの機を示し給ふなるべし。

伊達政宗膽氣相馬の城下に宿せられし事

同じ時伊達左京大夫政宗は急ぎ本國に歸り、からめ手より攻入るべきよし仰を承り、大阪を打立ち夜を日につぎて馳下る。白川より白石まで皆かたきの中なれば道ふさがりぬ。當陸國を廻りて、岩城相馬にさしかゝつて國に歸らんとするに、相馬また累代の仇なり。然るに政宗僅に五十騎ばかり引具して、常州を經、岩城と相馬の境に到り、先相馬が許に使をたて、此度德川殿上杉を征伐し給ふにより、政宗からめ手より向ふべきよしの仰を承りぬ、路既に塞り候ひしほどに、やう〳〵此地に馳著きぬ。あまりにはやめて道をうちしゆゑ疲れ候。願はくば城下に旅館をたまはらばや。馬の足休めて、明日國に歸り入らんと存ずといはせたり。相馬長門守義胤これを聞き、あつぱれ運の盡きたる事ぞかし、さらぬだに、伊達は相馬が年比のかたきなり。ましてや味方討たん一方の大將承りたるといふものを、いで〳〵今宵一夜打して案内知らぬ奴原を一人も殘らず討取つて、年比の仇に報い、又今度の賞にも預らばやとて、頓て民家をしつらひて迎へ入れ、人々集めて夜討の評定したりけり。爰に水谷三郎兵衛といふ者、はるかの末座に候ひけるが進み出で、末座の異見恐入つて候へども、既に詮議の

座に連りて候へば、所存を殘すべきにあらず。抑窮鳥懷に入る時は、獵者もこれを殺さずとこそ申候へ、政宗ほどの大將年來の恨をすて丶君を賴みて來りしを、たばかりて、やみ〳〵と討たれん事、勇者の本意にあらず、長き弓箭の瑕瑾ならずや。又彼が國境駒が峰に至らんに、行程僅に三里、けふ日未だ未の時にさがらず。政宗が國に入らんとだに思はゞ、日夕ならざるには至るべし。それに僅の勢にて止る事、深き慮なからざらんや。只此度はよきに警固して國に返し、重ねて戰ひに臨まん日勝敗を天運にまかせらるべきにやと申しければ、一座の人々此議に同じ、兵粮秣わら鹽魚に至るまでつみ置き、かゞりを燒きて夜廻りす。義胤が士ども、政宗あまりにしづまりかへりたる體こそ心にくけれ、いざ試みんとて夜ふけて後、馬二匹とりはなち人々走りちりて、以の外にさわぎの丶しる。政宗小童一人に燭もたせ白き小袖を上に打かけ、左の手に刀を提げて立出で、相馬殿の御人や候といふ。是に候とて行向へば、物音高く候。政宗が下人原狼藉候はんにはよくしづめて給はり候へとて、又内にぞ入りたりける。夜明けれども立ちもやらず、巳の時ばかりに成つて、義胤のもとに使して一禮し、さてしづめて馬を打て行く。ひそかに人を付て窺はしむるに、かの國の境駒が峯のあなたに、伊達家の軍兵雲霞の如くみち〳〵て出でむかへぬ。かくて關が原の事終りて、相馬すでに上杉に心合せたれば、亡ぶべきに極る。政宗訴へ申されしは、相馬は年比政宗がかたきなり。石田上杉に與したるが一定ならんには、政宗彼が爲に討たるべし。然るに君の仰奉りて馳下るよしを聞きて、深き恨をわすれ、新恩を施しき。彼が逆謀に非るの證に候はずや。又累代の弓箭の家永く斷たれん事不便の至なりと、度度なげき申されしかば、後には本領を相馬に賜はりけるとぞ聞えし。

竹村半兵衞田中長胤を押止むる事

關が原の時三河岡崎の田中兵部大輔吉政の子民部少輔長胤は、父大阪方に同心したりといふを聞きて、宇都の小山を忍び出で、居城岡崎に歸りけるを、國淸公聞し召し、竹村半兵衞を召され、吾吉田に歸る頃まで、民部を牛窪におさへとゞめ置けと仰せらる。竹村是は安き事には候はねども、いかさま計ひて見候はんとて、道に出迎ひ、鐵砲の者を百姓の家にかくし置き、具に支度を言ひふくめ、其身は山のせばみに出て待つ所に、長胤來れり。竹村池田三左衞門尉ひそかに申せと申す事の候て是に出候といへば、長胤馬廻りの人を遠ざけられしかば、竹村靜に歩みより、別の仔細も候はず、おし留申せと三左衞門下知したるよと云ひもあへず、左の手にて長胤をひしととらへ、一尺計の脇ざしを抽いて長胤におし當てたり。從者ども、こは口をしやと怒れ共せんかたなし。竹村詞をかけ近くよられなば、吾は殺さるゝとも、民部殿をば刺貫き申さん。唯おし留め申すのみにて別の事は候はずと呼はりける處に、百姓の家に伏置きたる鐵砲の者ども かけ集り、鐵砲を長胤に差當て丶、竹村を討たんとならば忽民部殿を打落し申さんと聲々に呼りけり。長胤方なく竹村に從ひて百姓の家に入れば、押止めて四方を堅く守りけり。かくて東照宮聞し召し、父既に味方に成れる上はゆるし候へと仰せられしかば、長

胤則出でられけり。後に公に遭ひて、手あらき有さまにもあはせ給ひけるよといはれしとかや。

岐阜城攻の事

岐阜の城を攻むる軍評定の時、國清公大手に向はんと仰せられけるに、福島左衛門大夫正則聞いて、吾こそ今度の先陣なれとぞあらそはれける。井伊本多公に向ひて、内府の御縁者なり讓られ候へと有りければ、正則は尾越より西美濃に入りて大手に向ひ、公は河田の渡より寄せさせ給ふに定りけり。やゝ有つて正則搦手へ吾こそ向ひ候はめ、尾越は城に遠く河田は遠淺なれば、馬にて渉り易かるべし。大手に向ふも、城を早く攻破らん爲なれば、只搦手よりよせんものをと申されけるを、井伊本多正則の領地なれば、大手より船筏を以て渡されん事安かるべし。三左衛門尉はからめ手より向はれ候へ。既に定めつる上は今更かへんも然るべからずと申されしかば、正則さては吾敵地に入りて相圖の煙をあげて後、池田殿川を渡されよといひて、大手に向はれけり。頃は慶長五年八月二十一日のまだ宵ぐらきに、公は清洲をうち出で、河田のあたりに陣して、あくれば二十二日の曉に、川涯におし寄せ給へば、伊藤五郎右衛門と云もの瀬ぶみしけるといへり　岐阜より津田藤三郎を始として、新加納村におし出して陣したり。味方の軍兵勇み進んで早川に打入らんけしきなり。公、馬を乘廻し今しばしぞと下知せさせ給ふ。此時貝福右衛門時はよかりぬと申せば、公然るべしと宣ひける。詞の下よりさかまく波に馬をさつと打入れ、二三間歩ませ鞍つぼにおりさがり、貝に川水をすくうて打ちうつし、いかにも高く吹出す寶螺の聲諸陣にひゝきわたる。是より一同に打入りて一騎も殘らず向の岸に上る。

須賀平四郎物見たりしが乘歸り、敵の多少は芦原に隔りて見えわかず候へども、二三千にはよも過ぎ候はじ。軍は味方の勝と申す。仔細はいかにと問ひ給へば、須賀敵の後陣續かず。後に兵を伏すべき地十町計がほどにあるべしとも存せず。遙にかけ來りなば、人馬の息切れてよきとりこなるべしと申しもはてぬに、伊木清兵衛忠次、味方の旗は前にかたむき陣の色くろみたり。敵は後に仰ぎて人の面白く候。必定味方の勝なりといさみけり。

公、味方の陣を整へよ、みだりにすゝむなと下知ありけれども、などためらふべき。吾おとらじと進みゆく事三町ばかり、公今は時こそよけれと、腰に挿したる鏑を取りて一ふりふらせ給へば、一同にどつと打てかゝり、忽敵を擊破られけり。八田太郎兵衛久次北ぐる敵を追つかけたる所に、朱色の物具著て、紫のほろかけたる武者一人、息つぎ居たるを見て馳寄りたり。かの武者はかち立なるがひたと折りしく。八田馬より飛下り槍を合せ、遂に討取つたり。是前田半左衛門なり。

半左衛門は、德善院の從子にて岐阜中納言秀信の近習の臣なり。打見たる處はすぐれて溫柔にして、常によく論にたへたる人なりしかば、人々男子にあらずと笑ひしに、此日の軍に敗軍の中に、武市忠左衛門と二人ふみとゞまり、引立てたる味方をはげまし、つゞけやつゞけと呼はりて目を驚すはたらきして武市も討死す。日比前田を侮りたる者ども、けふ前田に及ぶべきやうもなしといへり。八

田は父を彌三右衛門正久といふ士大將なり。太郎兵衛今年十八歳父の陣代たり。前田を討取りたりしに、從者柏原杢右衛門尾關彌五左衛門かけ來りて、八田を馬に乘せて歸る。八田後に人に語りていはく、われ年若し、血氣よわきにあらず。敵一人討取りて、さのみ疲るべきにあらざりしに、其時たすけ來る敵あらば、小兒にも生捕とせらるべし。死生の間に立て敵を討ち得て、却りて勇氣のおとろへたる故なるべしとぞ語りける。慶長六年祿二千石を增與へられ、同八年公參議に任じ、參內の時久次太刀の役たり。從五位下に叙し、丹後守と稱す。後豐後守と改む。前田利長久次が武名を聞き、一萬石にて招かれしかどもゆかざりしとなり。

福島正則は大手の總大將にて、素より他人に超えられじと思はれしに、公既に新加納にて敵を擊破りたりと聞き、怒りもだへて二十三日の朝先陣して攻寄せたり。池田家の軍兵朝日口より攻入りけるを總がまへの土手の上より見て、人の功名を嫉み、道全といへる法師武者に下知して町口に火を懸けさせたれば、搦手の軍兵烟にむせびて進み得ず。公是を御覽じて、こは心得ぬしわざなり。火のきゆるを待つべきにやとて、桑木畑をめぐり、長良川より後の水の手におし寄せ給ふ。池田吉左衛門は公此城におはせし時、水門に居て案內はよく知りつ、水ぬきの有りけるより入りて水門を打破り旗を差あげ、池田三左衛門尉本城の一番乘と呼りけり。正則の道を妨げられしは、却て池田家の幸なりと後に人いへり。東照宮御書を賜り、敵軍川を隔てゝ相支ふる所に、輙く打破り岐阜を攻落されし功名賞するに詞なしとぞ、書かせ給ひける。

森寺四郎兵衛飯沼小勘平を討つ事

岐阜中納言の士飯沼小勘平といへるは、四天王と世にいはれし剛の者なり。新加納の軍破れし時、小き堤を前にして居たりしに、池田家の士大將森寺政右衛門忠勝が弟四部兵衛長勝飯沼を目がけ、一間あまりありし溝を馬に聲かけてひらりと飛ばせたり。飯沼が左右より鐵砲を打ち懸けけれども、甲冑に當つて其の身は手も負はず競ひかゝりしが、敵は多勢つづくとや思ひけん、飯沼が者どもちりぐゝになりぬ。森寺馬を乘り寄すれば、飯沼名乘れと詞をかくる。池田が內の森寺四郎兵衛と名乘る。飯沼池田が內の森寺ならば、いざといふより刀を拔いて、森寺が馬より下りんとする處を、右の膝口を切つたりしかば、森寺左の方に飛び下り、馬を隔てゝ切り合ひけるが、又左の腕に疵を蒙り、今は叶はじと思ひて白刃を握り、掌をくられながら無手と組み、飯沼を押へ透さず刺し通せしが、疲れはて首を取りたれども、既に人に奪はるべかりしに、從者久兵衛といふ者走り來り、近づく者を追つばらひ馬に掻きのせて、興國公武藏守利隆朝臣の事此時新藏と稱し申す十四五騎にてひかへたまふ處に參りてかくと申す。又國清公の御前に參りて飯沼を組んで討つて候ふと申しけり。

飯沼が冑は小田原鉢、刀は行光の作、脇差は菊一文字なり。森寺が從者分捕して今森寺が許にありといへり。森寺が飯沼を討ち取りし事、關ケ原記其の餘の書にも、池田備中守としてしるせるは謬な

り。

南部越後母衣串をぬかざりし事

岐阜の城攻に、池田家の士南部越後門際に押詰めたるに、門のくゞり狹くかけたるほろに支へて入り得ず。かたへより母衣串をぬいて入るべしといへども、いや〳〵たとへ入り得ずとも、此ほろはぬくまじと呼はる。其中に門ひらきて馳入りたり。其武者ぶり甚見事なりしと、其時の人いひしとなん。

兼松又四郎一柳の陣見切の事附兼松武功言上の事

岐阜の城に諸將おし寄する時、一柳監物直盛の兵一騎先駈して、川に馬をさつと打入れけり。直盛に付られける目付兼松又四郎正儀、九尺計の十文字の槍を提げ、鹿毛なる馬に乘りて堤の上にひかへて是を見、あはれ剛の者よ、老武者か若武者かと問はるゝに、直盛聞きて、安井新九郎とて今年二十二三にや成り候はんと答ふ。正儀我ならば功名をとぐべきに、若武者なれば惜き事よといひも終らぬに、安井向の岸に待ちかけたる敵の中にかけ入りて討死しけり。直盛馬を蹴たてゝ進むけしきに見えしを、正儀おし止め、早く候とて、やゝ有りてこゝぞと云まゝに、馬を川に打入れられしかば、直盛もおとらじと渡されけり。敵敗北しけるに、正儀閻魔堂のこなたにて追かくる味方をおしとむる。直盛など追討たざるやと問はるゝに、敵はや陣を整へたり。引返さば一定味方崩るべし。百々木造は岐阜の古兵なれば、踏止らんと思へども、地の理なくて退くならん。今見られよ返すべしといひも終らぬに、竹林によりて鐵砲を打かくる。正儀少しもさわがず、相向ふ事しばらく有りて城兵遂に引退く。

一說に、津田藤三郎光房は秀信の士なり。敗軍の中に引返し朱の物具し、赤ほろかけ、鹿の角の立物打たる冑を著、月毛の馬に乘て引色に成つたる味方を聞し、散々に戰ひけるを兼松見て、よき敵なりと目をかけて追つかけたるに、其間十間計になりける時、津田光房引返して城に引取りけり。黃母衣かけたる武者取て返し、正儀とわたり合ひ戰ひしが、相引に引くといへり。此時にや、又前に川を渡したる時の事なりや、詳かならず。

正儀敵是にて一面目有るに似たり、此より返さじといはれけり。直盛岐阜の町口にて將机に倚りて槍を横たへ、敵出ば一槍せんと正儀の方を見やられしに、正儀いや敵は出候はじと云ひしに、果して軍はなかりけり。亂しづまりて後、直盛正儀を纓し、今度の軍毎事仰の中りて候。中にも安井が討死を察せられしは、いかなる仔細に候と問はれしに、正儀聞きて死生有レ命と申候ていかで人力の及ぶべき。さりながら、川を渉りて先陣する時に、馬のあげ場二三十間も置きて、敵の前を横さまに乘り、あとに味方つゞく時、大音に名乘るべき事に候。左もなくて唯一騎岸に打上り、敵の眞中にかけ入り、討死すれば敵に利を得さするにて候。時により地により進退のしわざかはり候物なりと、能老兵に承り置きて候ほどに、六十に及で猶ながらへ、武功をも遂げ候とぞ語られける。

台德院殿御上京の時、熱田にて國士御目見に出づる時、兼松も同じく出でらる。土井大炊頭利勝を以て今川義元合戰の時功名、利根山にて信長より足半を賜りし事、猪子内匠兼松と年はいづれましたるやと御尋あり。御覺には猪子を年ましと思召すとの事なり。兼松承り信長義元合戰の時、朋輩七八人一所に打立ち候が馬を乘りそこなひ、いな事と見候へば、鐙を逆に掛けたり。心中に不吉とおもひ、其日勇みなく、進み兼候へば、功名したる者手をふさがず見苦しとて、朋輩ども取つたる首の血を甲に塗り草摺に泥をぬり、朋輩の中に交り信長の前に出づれば、義元の首を信長見て悅ばる時に參り合たりき。刀根山にて前夜觸有りしにおこたりて、信長はや打立たれける故、草鞋はく間もなく跳にてかけ付け、首取つたれば、信長見て太刀のさやに付けられたる足半を賜り候。別にさせる事もなしと申上る。利勝猪子と年はいかにと問はるゝに、それは御見ちがへなり。内匠はわれより二つ若しと答ふ。利勝御覺を御自慢の事なれば、わかしと申されなば、よかりなんといふ。兼松いや〳〵詐は申されずと答へたるまゝに、利勝申されしかば、大に御感有つて、時服に黃金を添へて賜はりけるとぞ。

山田多門兵衞幼年功名の事

河田の渡をこして岐阜に向ふ前、堀尾信濃守忠氏川岸に陣せらる。池田家先陣の士大將伊木清兵衞忠次使を以て、池田が者ども川に打入りて後渡され候へ。今度の先陣は池田が承りたるにて候とぞ申しける。忠氏聞きて暫く馬より下立ちて、吾下知を待候へといはれければ、山田多門兵衞十五歲軍はけふを始なり。馬より下りんとするを、從者馬より下りる事や候、鞍の前輪に取付き俯しに成て待たせられよと敎へしかば、山田しかしたりけるに、やゝ有つて忠氏の旗本に寶螺の聲せしかば、我先にと馬に乘りしに、山田眞先に川に打入りて渡しけるが、遂に一番首を取つたるは從者の物なれたる故なりけり。後に吉晴此日の勝軍の告を聞き、首帳を見られしに、首一つ山田多門兵衞としるしたるを讀みも終らず、近き頃まで竹馬に乘りたる童のはや功名しけるよ、父ながらへ居たらんには、いかばかり悅ばんにとて、涙を流されけり。又梯權八が功名の無きはいかに、討死せんは知らず。功名は二三人の中をはづるゝ者にあらずとあやしまれしに、やがて飛脚來て、權八一番につゞいて首を取りけれども、手負ひて帳に記す事おそかりしと告げたりければ、吉晴吾見る所よも違はじとおもひつるよと云はれたり。

卷之十三

米田助右衛門見積の事

岐阜の城攻に、細川忠興七曲口へ向はれしに、米田助右衛門、あれみ給へ、あの門矢倉はたやすく打破るべしと申す。忠興仔細はいかに、米田今朝より矢倉より搏出す箭玉次第に少くなり候は、本丸へ引入りたるゆゑに候と申せば、やがて軍を進めて、七曲口を攻破られけり。

後藤又兵衛決斷の事

岐阜を攻破る時、黑田田中藤堂等の諸將は犬山を押へたりしに、犬山の城明のきける故、岐阜をさして打向ふ所に、大垣より石田島津二萬餘り打出ておし來る。頃しも八月雨の後、合渡川水かさ增りたり。諸將香が島の札の辻にひかへて、各將机に據りて川をや渡す、待てや戰ふと評定して決せず。高虎銀の天衝の立物打たる冑を著、高ほろ掛たる武者は黑田家の士大將後藤又兵衛なるべし。存る旨を聞ばやとて、扇を揚げてまねかれしかば、後藤ほろをゆりかけて來り跪く。高虎いかに此川を渡るべきか、待ちて利有るべきかと先の程よりいへども決せずといはれしかば、後藤打笑ひ、評定も時により候。今日岐阜の城攻に後れ、また爰にて一戰なくば內府に御面目は候まじ。川を討死の場ときはめられん事然るべし。しからずば、男子にては候まじと大言すれば、諸將尤なりとて川を渡されたり。

合渡川合戰黑田三左衛門毛付の功名の事

合渡を渡す時、長政の士大將黑田三左衛門可成川の東より遙に敵を見渡して、長政のかたへに馬を乘りよせ、朱の枝釣のさし物指して、黑き馬のたくましげなるに乘りたるはよき敵なり、必討取べしといふ。長政勝敗は運命による事なり、などたやすう敵を討つべき、さないひそといはれしに、可成耳にも聞入れず、川に馬を打入れ向の岸にはせ上り、遂にかの武者を切つて落し、首にさし物を添へて得たりけり。石田が物ぬし村山利介といへる剛の者なり。可成が此功をむかしより毛付の功名とて、たぐひすくなき譽れなり。

神谷小介先登の事

合渡の軍に長政の內神谷小介先がけして川をわたり、待ちかけたる敵の中にをめいて懸入りければ、槍だまに揚げられ既に危かりし時、長政の軍兵進みかゝりて敵を追ひたてければ、小介流るゝ血に朱に染みたるを戶板に載せて長政の前に來る。小介けふ我と先を爭はん者長政ならでは有るべからずと思ひ、長政をきつと見て、小介より先立て槍を合せ候者一人も候はずと申しければ、長政汝ならで誰か先がけすべき、手負候ものゝ氣をはりて物いふはあしきといはれけり。小介後に有馬の溫泉に浴して創愈えけり

藤堂玄蕃赤阪町を鎭むる事

合渡にて東國方の軍北るを追て赤阪まで進みゆく時、高虎の士大將藤堂玄蕃赤阪の町口にかけ入り、大音あげ、百姓商人をなやますにあらず。惡逆の輩を討平げ、靜謐を致さん爲なり。皆ちつともさわぐべからずと觸通り、其後小家一つ二つ引壞ち、東の方の町はづれにて相圖の煙をたてけり。高虎大に悅んで、傳へ聞きし古の王者の軍を學べる玄蕃哉とて、其日著られし唐冠の冑を脫ぎて與へられぬ。

寺澤廣高加藤嘉明度量の事

關ヶ原にて東照宮いまだ岡山に御著陣なき已前、諸大將地の利に據りて面々陣取たりしに、或夜諸陣俄にさわぎけり。寺澤志摩守廣高臥ながら、徐に我既に聞きたりといひて、鼾かいて寢られけり。廣高士六人歩の者六人を物聞とす。三番に互にかはりて、途を異にして少の事も必告來る。今夜告來らざれば、夜討にあらざる事を元より知られたるゆゑなり。其あくる夜忍びて、加藤嘉明の陣所を通る者あり。とらへて忍びか火付か切つて捨てよといふに、嘉明其士は主君の爲に死を顧ず、吾陣所の備怠らず、彼いかにして吾を窺ふべき。殺すと殺さざると勝敗にかゝはらずとて追ひはなされけり。

春日九兵衞見積の事

丸毛兵庫が弟春日九兵衞、大阪より大垣に到り、諸將の内に二心ある人の候。陣所の有樣必定味方敗北すべし。陣替せられよと三成にすゝむれども、是を用ひず、果して敗れたり。

後に、前田利長春日をまねかれしかども、江戸駿府を憚り仕ふる事あたはず。京極若狹守高次は、東照宮の婿なるゆゑに、しひて乞招き寄せ、祿千石に過ぐべからずとの仰せによりて、京極家に仕へけり。後岡飛驒といふ、岡越中は飛驒が子なり。

村上彦右衞門先見の事

關ヶ原の時、大阪の舟手村上彦右衞門菅平右衞門九月十二日の夜桑名に著き、十三日諸將に對面し、安國寺に向ひて味方陣所の體見及びたる所心得られずといふ。安國寺吾もさこそ思ひ候へ、されども、關東者一人に上方勢十人の積りなれば、四五日ちこたへなんには必勝べしと答ふ。村上味方山どりの有樣高くとりあがりまばらなり、戰ふべき色にあらずとて下りあふ事も叶ひがたからん。東勢は物し故陣所あつく見ゆ。一兩日を過ぎずして合戰あらん、覺束なしといひて歸りしが、果して計りし如し。村上は敗軍の時、阿濃津より九鬼大隅守嘉隆の許にゆき、夫より上方にのぼりけり。

土方三九郎武功の事

關ヶ原の軍の前、有馬豐氏大垣と川を隔てゝ陣せしに、豐氏の兵土方三九郎を始め十騎川を涉り、敵少し出でたるを追立て、大垣の矢倉の下に馬を立てゝ聲々に名乘りければ、弓鐵砲を揃懸けたり。三九郎左の肩先に手負ひぬ。續く味方もなければ、十騎の者どもしづ〳〵と馬を引返したるを、東照宮も聞し召しけるとなり。

賞功うすかりしかば、土方岡本彌一右衛門渡邊佐左衛門上田丹波と言合せ出奔しけり。土方が養母を百姓のもとに隱し置きたるを、豐氏番人を付て守らしめられしかば、三九郎歸りて養母を人質にめしとられし上は、とかくの事を申すに及ばず腹を切らんといふ。豐氏尤なりとてゆるされてもとの如く仕へ居しかども、同じく立去りしものゝおもふ所も有りとて、養母を打具して又出奔し、加藤清正に五百石にて仕ふ。豐氏かまはれしかば、落ちぶれて年月を經る所に、外則中内惣左衛門といふ者、豐後に有りてまねき寄せたり。中内は長曾我部が長臣なり。大阪の事起るに及て、長曾我部とゝもに大阪にこもりしかば、三九郎も打具したり。元親はたを二つに分け、國澤掃部と土方にあづく。三九郎此時六左衛門といひけり。五月六日に、矢尾の堤森有る所に、東に向て押しける時、朝霧深く物色定かならず。森の南より紺地に白もち付けたるはたをおし立て、敵寄來る。堤せばければはたを引きおろして立つる處に、敵は藤堂の先陣にて旗を堤の下におしおろすを見て、敵は逃ぐるといひて馬より飛びおり突いてかゝるを、元親大音あげ、槍を横に持ち引付て突崩し候へ、一人もみだりにかゝるべからずと下知し、十分に敵を引受、一同にどつと起立ちて切崩し、追討にしける所に、渡邊勘兵衛押來る。六左衛門散々に戰ひ槍もゆがみけるが、後には敵の槍を奪ひてはたらきけり。かゝる所に、元親先陣敗北し、掃部も討たれ、大阪の諸陣皆やぶれしかば、三里計が間援くべき味方もなく、元親も久寶寺をさして引退きけるに、勘兵衛慕ひ來り鐵砲を打ちかくる。三里が間にて旗竿過半打折りけれども、旗ぎぬは一つも捨てず、みなしぼらせて城にもたせ歸りけり。落城の日元親僅に士十二人引具し八幡の方に落たりしに、六左衛門も從ひしに、元親汝等とく是よりおもひ〳〵に落ちよといへども、いづくまでも附きそひ申さんといひけるを、元親志はさる事なれども、遂にわが爲によからざる間、落ちよといひしかば、中内一人といまりて、其餘は落行きけり。六左衛門其子孫、今池田の家に仕へてあり。

小栗又市谷々見廻の事

東照宮岡山に御著陣の夜、小栗又市露に濡れて御前に參り、谷々心元なく存じ打廻り見て候に、上方者何の手だてもなく候と申すを聞召し、井伊兵部に下知して、宵より菅澤次郎右衛門を山かげ谷々見て歸れとてやりつると、仰せありけり。

秀家夜討せんといはれし事

關ヶ原の時東照宮岡山に御着陣を秀家見て、敵の陣所あさまに見ゆ、夜討せんといはれしに、三成かかる大軍にて、夜軍は利なきものなりとてやみけるを、秀家後まで悔まれけるとかや。

株瀨川合戰事

關ヶ原の軍の前、九月十四日浮田石田軍を出し、一色村に兵を伏せ株瀨川を渡り、中村式部少輔の軍兵の陣所に押寄せて鐵砲を打かくる。中村が士竹田五郎兵衛先がけして打て出る。有馬豐氏も陣所相

ならびたれば兵を出す。竹田は討死し、伏兵に射しらまされ敗北しけるに、中村が士大將野一色賴母白ほろかけ、栗毛なる馬に乘り、崩るゝ味方をはげまし返し合せたるに、藪内匠引て通りけるを、詞をかけ、何とて返し合せざるやといへば、藪ふりかへり手負たりとて川を渉す。賴母は鐵砲にあたり、馬より落ちたりしを、其組の士松村清介賴母がわたがみをとりて引ずり退きけれども、敵追來れば、賴母が上帶を切り、刀脇指ばかりとりて退きけり。其後富村といふ者賴母が首をとる。

其前の日野一色藪二人　國清公福島正則等の諸將の前へ出で、岐阜攻落され功名致すべきやうもなく候。さて此よりは中村が者ども、軍始仕らんといひけるに、軍始はわれ〳〵どもがわざなり。いはれざる事をいふとて不興なりし、其中に正則目を見出し怒られける故、左樣にも仰せられざるがよく候。大夫殿のおし付羽織のうしろ紋を見申したる事もありき。式部事太閤より以來先陣を勤め、何れの軍にも功名とげ候。とかくつかまつりて、御目にかけんといひしとぞ。

浮田石田等が軍兵競ひかゝれば、矢野助之丞金の團扇の指物、林文大夫は赤ほろかけて、二騎面もふらずかけ向ひ、進む敵を追崩したる有樣目を驚かせり。赤坂の御本陣より御覽せられ、井伊直政本多忠勝に御下知ありて、人數をまとめらる。此を株瀨川のせり合ひといへり。

稲次右近功名の事

株瀨川にて三成が兵勝に乘りて進む處に、有馬の士稲次右近鳥毛の半月のさし物にて殿しけるを、横山監物といふ三成が士馳寄つて引組んだり。稲次が從者助け來り、横山を引伏せたる處に、敵走り寄て稲次が冑をとり引仰く。稲次ふり放さんとする時、從者又助け來りて敵を一太刀斬る。かゝる處に、堀尾忠氏のほろの者はせ寄つて、誤て稲次が手の者を切伏せて首を取る。稲次は終に横山が首を取り、また敵をも打取り、馬を靜にあゆませて、東照宮の御陣所に參りけるを御覽じて、先に此陣のかたへより敵に向ひたる武者功名したるは、誰が者ぞと仰有りしに、有馬法印かたへに有りて、豐氏が手の者にて候と申す。稲次首帳を記す處に行きて從者を味方討に打たせて候。其首帳をば消して給はり候へと云ふ聲を聞し召し、何事ぞと問はせ給へば、仔細を申す。かゝる大軍のみだれ合ひたる戰ひには、味方討もある物よとぞ仰せられける。

其後、稲次には六千石祿增與へられ、八十五歳島原の城攻に討死せしとかや。堀尾のほろの士ども、味方を討ちたる者と同じく、ほろ預り居らん事口惜しと申せしかば、忠氏の父吉晴是を聞き、彼士をばほろを取返して、別に弓の足輕二十人預けられけり。

淺香庄次郎働の事

淺香庄次郎（後左馬介）は奥州葛西大崎の木村に仕へ、其頃關白秀次の不破萬作、蒲生氏郷の名越山三郎と共に天下に聞えたる美少年なり。木村家滅びて石田に仕へたりしが、咎を蒙る事の有りしに、株瀨川にて鼠の皮の羽織を著、銀の大釘の立物打つたる冑にて、中村がほろの士梅田大藏が首を取り、大垣

にはせ歸り、三成隅矢倉に居たる下にゆいて、勘氣をゆるされ候へと呼はる。三成聞きて、能くこそ軍したれといひければ、又馳行きて三成が軍兵を引揚げたり。後に加賀利常にまねかれて奉公しけり。

林半介殿の事

林半介は、美濃安八郡青柳村の百姓なりしが、石田に仕へて祿七百石使番たり。石田兵を起すの時、佐和山の城中の軍兵を集め、書院にて盃禮を行ひ、吾今かゝる一大事を思ひ立ち、運を天命に任すといへども、汝たちが武勇をひとへに賴む處なり。其旨を存じて軍忠あらば、賞は功によるべし。其約束の印とて、酒盃を座の中央に出しける時、林遙の末席より進み出でて、軍に臨みて一番は知らず、二番はかく申半介としろし召れよとて、其盃をとりて飲みたりければ、皆にくきふるまひよといひしが、株瀨川にて一番首をとりぬ。斯て兩軍物別れする時、稻葉助之丞は、金の切裂の指物にて秀家の軍士の殿し、林は白じなへのさし物指して乘りさがり殿しけるが、猶も本多忠勝が兵に向て、只一騎輪をかくる有樣、敵ありとも思はざる體なりしを、東照宮御覽じて、あつばれ不敵者哉。武功に志す者は、あの武者の草摺をいたゞけと仰せ有りけり。

伊藤金左衞門三宅平大夫後殿の事

關ヶ原の軍の前日、伊藤長門守至孝が大藪の陣所に、石田使を以てとく大垣に入りて、一所になられよといひ送りしかば、至孝大垣に行く所を、德永左馬助壽昌市橋下總守正舒したひけるに、伊藤金左衞門紫ほろに蛇の目の紋付きたるをかけ、三宅平大夫と唯二騎殿しけるが、十四五騎計追かけたり。伊藤大音あげ、大事の殿よ勝負なせそと言ひて引退く。三宅は馬より下立ちしが、聞の聲に駭きて馬は口に付きたる下人をふみ倒してかけ出しぬ。歩立に成りて靜に退くに、日は暮れたり。かゝる處に、正舒の兵市橋掛左衞門追ついて詞をかけ、槍を合せんとせしに、三宅とは昔より親しみ深かりければ、互にその聲を聞き知りて、夜中誰も知ざる處に行きあひぬるこそ幸なれ、爰にて戰ふとも、何の功名か有るべき、いざとて立別れけり。至孝大垣に入りて、三宅は討たれしならんと、をしむ處に歸り來りて、しかゞなりといへば、至孝悅んで、鹿毛なる馬によき鞍置きて與へ、三成は黃金三十兩引出物にぞしたりける。伊藤は十六七のころより功名ありて、赤き手ぬぐひを鉢卷としければ、敵例の赤手ぬぐひ又出たりと、世にいはれし者なり。或時軍破れて川岸を只一人引退く時、飢疲れけるに、敵一人腰なる兵粮を遣ふを見、走り寄て斬伏せ腹をさいて飯を取出し、川水にひたし、洗ひて打喰ひ陣所に歸りけるとなり。

毛屋主水物見の事

關ヶ原にて諸將物見を出されしに、馳歸りて、敵或は八九萬又は十萬計も候らはんといふ所に、黑田長政の物見毛屋主水、敵は一萬によも過ぎ候はじといふ。やがて東照宮の御陣所に參りて申せば、敵は大軍なる處、汝が詞こそあやしけれと仰せられしかば、主水承り、凡敵は七八萬もや候らん。さ

れども兩軍の勝負を計りて、おのが身に懸けて軍に志候兵は幾程も候はず。石田小西等が賴切つたる者ども彼是合せて一萬計に過ぎ候まじ。一陣敗北せば、餘は戰はずして敗れ候べしと申しけるに、東照宮主水は敵の內通を知りたるにや、軍の情によく通じけるよと感じさせ給ひ、御手づから饅頭を賜りけるを、ふみ壇に有りて此を食して出でける後、彼は本姓は何といふにやと仰せ有りければ、かたへより毛屋と申すと申せば、いやとよ、北國の毛屋といふ所にて功名せしゆゑ、毛屋と姓を更へつると聞きたりと仰せ有りけり。主水もと山崎源太左衞門に仕へ、後黑田家に奉公し、朝鮮にて平安道の小川を渡せし時、味方は過に渡せるにやと云ひけるに、主水味方は川上をわたし候。仔細は馬の沓草鞋の流れ候故に察し候といへば、長政尤なりとて渡されしとかや。主水後千五百石の祿なり。此時は旗奉行たりしが、合渡の軍にいかにしたりけん、長政の旗しどろに成りし時、主水馬より飛下り、槍の鎗を以て旗竿をうつむけ、汝等もし旗を仰けなば、忽切つて捨てんと下知して、岩卷といへる旗さしの强力の者に取分けてかたく戒め、主水もえい〳〵と聲をかけて押立たり。又關ヶ原にて長政の旗卑き所に立てたりければ、長政あとの高き所に立てよと下知せらる。主水進んだる旗を退くるほどならば、敵に勢ひを付け候ひなんとて、遂に旗を立直さず。長政後に此二事を賞せられけり。

關ヶ原合戰島左近討死の事

黑田長政はもとより石田と不和なりしかば、關ヶ原合戰の前すぐり立てたる士十五騎、明日の軍にぬけ懸すべからず、吾が馬の廻りに引きそひて軍せよ。石田と手を取組みて討ちとらんと用意せられけり。石田が陣の前に柵あり、島左近昌仲左の手に槍をとり、右の手に麾をとり、百人計引具し、柵より出でて過半柵際に殘し靜に進み懸かりけり。長政馬より下り立ち、槍を提げてにらみ合ひたる處に、菅六之介政利少し高き處に上り、五十挺の鐵砲を透間なく横合にうたせけるに、眞先に進んだる敵手負ひて、左近も死生は知らず倒れしかば、ひるむ所を長政どつとおしかゝり切りくづされけり。左近は肩にかけてそこを退きぬ。菅後に六千石の祿賜はり和泉と稱す。長政筑前の國領せられて後、關ヶ原にて撰にあひ、長政のかたへに有りて軍しける人々、集て閑話しけるが、石田が士大將鬼神をも欺くといひける島左近が其日の有樣、今も猶目の前に有るが如しと云ひけるに、其物具の事をいひ出して、更に定かならず。人々口々にいひしかば、其軍の頃石田が方に有ける士の筑前に仕へけるを、三人呼寄せて問ひければ、左近冑の立物、朱の天衝、溜塗桶がは胴の甲に、木綿淺黃の羽織を著たりしと語る。人々驚きて近々とつめ寄せたるに、見覺えざる事、能うろたへたるよ、口をしき事なりと云ひしに、其中に取りわき剛の者の云ひけるは、見たがへたるはわれながらもことわり哉。左近が引具したるは、皆すぐりたる物にして、七十計は柵際に殘し、三十計左右に立て麾を取り下知したる有樣、つく〴〵と案ずるに、三十人計の兵ども槍の合べき際にさつと引取り、味方ばら〳〵と追つかけんを近く引寄せ、七十餘人の者どもえい〳〵聲を揚げて突きかゝり、手の下に追崩して、殘りなく討

ちとらんとの手だてなりき。今思ひ出づれば、誠に身の毛も立ちて汗の出づるなり。かく酒汲みかはして心安き朋友と物語するとは、大にことならずや。人々大かた目のたましひは失ひたるにぞ。若其時横合より鐵砲にて打ちすくめずば、われらが首は左近が槍にさし貫かれなん、見たがへたりとて、必しも恥にあらずとぞいひける。

飯尾甚大夫一騎先駈の事附成合平左衞門が事

關ヶ原にて、飯尾甚大夫安信只一騎、黑田長政の陣の前に馬を乘寄せ、大音あげて名乘りけるを、いざ討取らんとはやりをの若者ども進みけるを、野口左介益田與介見て只一騎先駈したる志昔をいはゝ、一の谷の木戸口にて熊谷平山が終夜名乘つる體なり。平家の士出合はざりしも志の者を助けんとなるべし。たやすう討つべけれども、夫は情なし。後を見よと槍を横たへて制しければ、飯尾度々名乘て馬を引返しけり。飯尾は豐後國富來の垣見和泉守が兄利右衞門が子にて、五千石の祿にて秀家に奉公し居たり。

株瀨川の軍に、中村の士成合平左衞門利忠牛の指物にて眞先かけたるを、飯尾討取りけり。其後黑田家に仕へ、千石の祿鐵砲預りしに、長政成合が首取たりと聞き、彼成合は世にかくれなき勇士なり。其首を取りたればとて、三千石增與へられしとぞ。成合もと中村家の士なり。天正年中秀吉、蒲生氏郷木村伊勢守秀俊に奥州數十萬石賜ひしころ、兩家とも士卒の少きに困りしかば、秀吉下知して日本國中の士主人に不足ある者共、或は主人かまひある面々皆兩家に行きて祿を得べし。主人咎めなば、秀吉相手たらんと札に書きて立てられしかば、成合は和泉小木川の一番槍を合せ、秀吉の感狀賜りけれども、一氏わづかに三百石あたへられし故、木村が許に行きて三萬石、佐沼の城代たりしが、木村が家亡びて後、復中村が家に歸りて仕へ、株瀨川にて討死したりけり。

蒲生備中父子戰死の事

蒲生備中眞令は石田が内にて聞ゆる勇將なり。關ヶ原の前軍評定の時、眞令明日は偏に必死と思ひ定めらるべしと云ふ。島左近明日先陣に進んで忠義を冒として打勝つべき物をといへば、眞令また昔より利を得るは天のたすけによるといへども、軍の正しきと法令の嚴しきとの二つにあり。よく内に省みたまへ、偏に必死と思ひ定められば、勝の半なるべし。左あらずば復御目見致さじとて坐を立ちけり。眞令元より敗軍をさとりて、三成に必死を究めし詞を出したり。斯て關ヶ原にて、只一騎三成が陣に乘行きて何事にかいひけるに、三成うちうなづく。眞令馳歸り競ひかゝる敵に向ひて散々に戰ひけるが、織田長益に合ひて、昔は蒲生の家にて横山喜内、今は石田が内にて蒲生備中とて人に知られたる者なりといへば、長益神妙に候、われに降參せよといひも終らぬに、こは何事ぞやとて拜み打に斬つて打落す。長益の從者千賀文藏槍を以て突通すを、其柄を握りて引組んだるに、文藏が弟文吉刀をとり直し、眞令を刺して遂に打取りけり。眞令が子の大膳は戰ひ半に首一つ提げて父に見すれ

ば、功名も何にせんといふを聞き、又東に向ひて押しかゝる敵にかけ合せんとせしが、父討たれたりと聞き、

まてしばし我ぞわたりて三つ瀬川あさみ深みも君にしらせん

といふ歌を高らかに唱へ自害したり。大膳幼より戯を好まず。關ヶ原に出陣の時、母われ汝が富貴を願はぬにはあらざれども、弓箭の家に生まるゝ身は昔より名を重んずる習ひなり。凡物二つは兼ねがたし。身を全うして名を忘れよとは云ふべからずといひしかば、父と共に死して母の戒にたがはざりけり。

大谷吉隆平塚爲廣最後合戰和歌贈答の事

越前敦賀の城主大谷刑部少輔吉隆は、會津征伐に從はんとて兵を出さんとせしに、石田三成より樫原彦右衞門を使にて、しひて佐和山の城に來られよ、密に評議すべき事有りと云はせけるに、此は心得ずといへども、是非を論せずしひければ、止事を得ずして佐和山に至る。三成悅んで今度關東を討亡すべき謀をぞ語りける。大谷驚きて、故太閤常に德川殿の智勇の備りたるを崇敬おはしましき。今德川家を討亡さん事思ひもよらずといひければ、三成我上杉景勝と計りて景勝旗を揚げられたり。其約を變じて景勝一人を攻殺させん事本意に非ず。運を天命に任するの外道なし。豐臣家の恩を厚く蒙りたる身なれば、秀頼公の御爲にかく一大事を思立つたるぞかし。など豐臣家の恩を忘れられしやといへば、大谷さらば力なし、命を秀頼公に奉りて、今度の軍に討死すべし。但しかゝる一大事を思ひ立たれんには思慮すべき事二つ有り。申出して見ん用ひらるゝやといへば、三成いかで所存を防ぐべきと悅びしかば、大谷が曰く、世の人石田殿をば無禮なりとて來々に至りてもこゝろによからずいひあへり。江戸の内府は、只今日本一の貴人なれども、卑賤の者に至るまで、禮法あつて仁愛深し。人のなつき從ふ事大方ならず、是一つ。次に大事は智勇の二つならではとげ得がたし。石田殿は智有りて勇足らざるかと存じ候。今度毛利浮田も皆かりに同意したる人々なり、必しも頼とすべきにあらず。水口の長束と計り、内府關東に歸路の時、石部あたりにて旅宿の時夜討して火をかけ、十死一生の軍せば、勝利疑なきにあたら圖を外されぬ。内府關東に歸られけるは、虎を千里の野にはなつが如し。十全の勝をはかられなば、又圖をはづして悔むとも益あらじ。此上は命を秀頼公に奉るの外他の道なし、士卒は皆平塚に下知せさせて候へば、其志計りがたしといへども、よも別の事は候はじとて、伊益の驛に至り、平塚に告ぐれば、平塚大に驚き、三成志大なりといへども、大軍を率うべき將略なし。然るにかく與せられしは禍をまねくといふべし。然れども既に許諾せられたれば、いかんともすべからずとて、三成が送り來りし使者には心得候とぞ答へける。吉隆敦賀に歸りしに、關東勢岐阜を攻落しけると聞きて、敦賀を打出て關ヶ原に到りしが、秀詮の裏切を元より悟りければ、僅に六百餘の陣を一手になし、關ヶ原におし出し、槍衾を作りて秀詮に向ふ。吉隆は目を病みて士卒は皆平塚に下知

せさせ、練絹の小袖の上に村蝶を墨にて書きたる鎧直垂を著、四方取はなしたる竹輿に乗りたるが、秀詮裏切りして討つてかゝられしかば、大谷齒をかみ、秀詮の不義骨髓に徹せり。敵の旅本を目にかけて切つて入るべしと下知しければ、木下山城守、大谷大學、戸田武藏守重政、平塚因幡守爲廣けふを最後と思ひ定め、面もふらず切つて驟りしかば、秀詮の先陣立足もなく敗北す。されども藤堂高虎を始め、東國の軍おしかけ進み來れば、秀詮の先陣もり返して討つてかゝる。されども死狂ひする鋒先に、秀詮の先陣又追立てられけり。爲廣敵あまた討ちとり、其首を吉隆に送り、此首自ら討取候。冥途のつとに參らせ候。日比の約束只今討死し候ひなんとて、自害候て人手にかゝらざれと言遣はし、外に歌一首書添へたり。

名のためにすつる命は惜からじつひにとまらぬ浮世とおもへば

一說に秀詮の士横田半介を討取り、其首を吉隆に送るともいへり。

吉隆使に向ひて、武勇といひ和歌といひ感ずるに餘り有り、はや自害して追付再會すべしと答へて、甥の祐玄といふ僧に返しを書かせて使に渡しけり。

契りあらば六のちまたにしばしまておくれ先だつ事はありとも

かくて平塚は戰ひ勞れて、畔に腰かけ息つぐ處に、小川土佐守祐忠が兵樫井太兵衛槍を提げ歩み寄る。平塚立上り、我は平塚因幡守なりとて散々に戰ひけるが、終に倒れながら十文字の槍を投出し、汝が重寶にせよとて討たれけり。戸田重政も思ふほど切つて廻り討死したりければ、大谷が軍敗れて、吉隆自害しけり。行年四十二歳とかや。岩佐五介首を羽織に包み、其邊の田の中に埋み、先手に向ひ討死しけるを、藤堂の士大將藤堂仁右衛門其首をとりて御旗本に奉りけるに、東照宮、五介は聞ゆるものなり、缺唇なるべしと仰せ有りけるに、しか有りしとぞ。

瀧川内記功名の事

瀧川内記辰政は、左近將監一益が末子なり。秀詮に仕へて松尾山にて秀詮の軍敗北の時、いさみかゝる敵を支へて、從者に首五つとらせ、秀詮のもとへ持せやり、其所をさらで吉隆が兵に槍を合せ、岸より下に敵を突落したれば、山田喜内其首を取る。敵なほ競ひかゝりけるを、笹地兵庫と俱に散々に戰ひて首を取りたり。後池田の家に仕へて祿三千石、士大將たり。此軍の時廿四五計の年にや。

辰政其始織田上野介信包に仕へて、十六歳の時小田原の軍に、信包織田常眞に對面せんとて從者を遠ざけ、辰政只一騎を具しておもむかれけるに、江川の丸より横筋かひに鐵砲を打かくる。辰政信包の矢面に乘りふさがりしゆゑ、ほろに鐵砲の玉三つあたる。信包大に感賞して脇ざしをあたへらる。辰政此時七郎といひけり。池田家に仕へて丹波と稱し、又出雲と改む。

本多正重の事

關ヶ原の戰九月十五日辰の刻過ぐるまでは、東照宮桃配に御旗を立てられつる所に、本多三彌正重

來りて、今少し先へ御旗をすゝめ給ひて然るべし。是は戰合遠しと申すを聞召し、口わきの黃なる男にて、いはれざる事をと仰せければ、三彌御後の方に廻り、口わきは黃なるにもせよ、遠きは遠しとひとりごと申しけり。

三彌は佐渡守正信の弟にて、若き頃武者修行して度々功名あり。長篠の後は瀧川一益のもとに有り。いづれの軍にや、諸浪人皆はたらき有りしに、三彌手にあはざりしかば、一益さしもほまれ高き人の今日の事はいかにと云ふ。此答は明日こそとて其のあけの日首二つとりて、昨日の答へ是なりといへり。甚風流を好み、物數奇いやしげなる事なく、常に身に薰物をとめたり。前田家にもしばらく有り。慶長元年伏見にて東照宮に仕へ奉りけるが、以の外に直言する人なり。或時幸若八九郎を召され、高館の舞終りて後、武藏坊辨慶は世にすぐれたる者なり、今の世になかるべしと仰せ有りしに、三彌承りて、今の時辨慶は有るべけれども、判官に似たる主君の候まじと申せしとなり。大阪冬の陣、台德院殿につかへ奉りけるに、東照宮、三彌はよくすねる者なりと仰せられけるが、其後一萬石賜りけり。東照宮御前に召出され、いかに思慮したるや、人がらをたしなみてすねざるよし聞きたりと仰せられければ、三彌、將軍樣は仕へ奉りよく候。あのごとき主君にすね申す者はきちがひにこそ候へと申しけるを聞し召し、又持病おこりたりと笑はせ給ひけるとぞ。七十二歲元和二年病死せられけり。

梶左馬助御書を認むる事

同じ時、祐筆梶左馬助かねて御書を九月十五日の日付にて、今日巳の刻御勝利と認置きけり。東照宮御感有つて、十五日とさしたるは尤なり。巳の刻とはいかに。左馬助承り、敵は大軍なり、巳の刻を過ぎたらば、御敗軍と存じたりきと申しけり。

左馬助は上田善四郎が四男にて、祿四百石、後千石賜はりて御使番なり。

田邊甚兵衞幼年功名の事

田中兵部大輔の士田邊甚兵衞十四歲にて關ヶ原に出で、從者敵を突伏せ、田邊を馬より抱下して首をとらせしとなり。幼少にて武功世に名高かりければ、黑田長政田邊に逢ひて大に感賞し、田邊をとりかひたる從者を呼出し、其事を問はるゝに、馬より抱きおろしたるに、刀を抽いてふるひければ、恥しめて首を取りたりと云ふ。長政さては勇士なり、ふるはずにかゝりたらば、十方なき故といふべし。恥しめられて首を取りたるは、勉めはげますによりて、勇氣を致す所なりとて、彌々ほめられけり。

辻小作中黑道隨が事

辻小作は福島正則に仕へしが、可兒才藏と親しみ深く、共に世に聞えたる物しなり。中黑道隨は石田の賓客の如くもてなし置きけり。關ヶ原の軍敗れし時、中黑唯一騎落行く兵の中に蹈止り、さんぐに戰ひけるを、辻見ていざ討取らばやといへば、可兒なさけなき事をいふもの哉、たすけばやと云ふ。辻

さては生けどれとや、可兒に好まれて辭し難しといひすて馳行くところに、中黒馬を深田に打入れて、諸鎧を合せても更に動かず。辻詞をかけ日頃の好みに助けんずるよ、早く取付けとて槍の鎗をさし出す。中黒かゝるきはに命助かりても何にかせんとて、すでに自害すべく見えしかば、辻何とたばかるべきや、神明にかけていつはらじといへば、とりつきたるを、辻主從引上げて陣所に歸る。可兒見て大に悅びけり。偖辻は物具脫ぎて裸になり、仰に打臥して、只今まで敵なりし中黒を物とも思はぬ有樣にて物語す。中黒あまりに侮りたるよと、心中にいかりけれども、命を助けたりし恩を思ひてさてやみぬと、後に中黒此事を語りて笑ひしとなり。中黒後井伊直孝招きて、祿二千石あたへられけり。

或說に、丹羽山城、谷出羽、篠野才藏、稻葉內匠、中黒道隨、渡邊勘兵衞、辻小作、兄弟の約束して武勇を勵み、天下七兄弟と云ひしといふ。

島津義弘關ヶ原退口の事附大阪の商賈義氣の事

關ヶ原の軍敗れし時、島津義弘眞丸に成りて、福島刑部少輔正武の陣の前を切拔けんと、一文字におし通る。正武十六歲かけ合せんとする處を、梶田又右衞門死狂する敵に軍はせぬよとて追留たり。東國勢おしかけしかば、義弘の從子中務大輔豐久義弘の馬のかたへに乘寄せて、さゝやく體なりしが、やがて大敵にかけ合せ討死す。義弘は是迄なりとて、取つて返されけるに、阿多長藤入道成淳義弘の馬の前に打塞がり、大將は千騎が一騎に成候ても、猶死せずして謀をめぐらし候を道とこそすれ、とく打破りて引退き給へといふまゝに、馬の首を引直し、島津兵庫頭最後の合戰をするぞと呼はりて、さん〳〵に戰ひて討死しけり。成淳が義に勵まされ、ふみ止り支へ戰ひ討死する者多かりける。其ひまに義弘又士卒を集め列を整へ引退く時、松平忠吉井伊直政あますなとて追かけたり。義弘が兵ども種が島の鐵砲を腰に挿したるを拔出し、ひた〳〵と折敗きて打ちかけたるに、忠吉直政共に手負ひて、それより物わかれしたりけり。

一說に本多忠勝追かけたるが、馬を鐵砲にてうたせ馬より落つれば、梶金平馳來りて、おのが馬に忠勝を乘せし其間に、島津が軍隔たるといへり。又河上左京が從者柏田源藏がうちける鐵砲に直政中るともいり。又松田某といふ、朝鮮陣の時連れて歸りし小兒の成長したるを組にして有りけるが、鹿の角の立物の冑こそ兵部よ、打留よと下知しければ、鐵砲をさし向けたるに、直政眉尖刀を横たへて馬を乘りかけられしに、彼兵松田某と名乘りて打しに眉尖刀に中り、其玉腰骨にかすりて馬より落ちられけり。偖亂鎭りて後、薩摩のもとに直政を曳せられしに、直政松田を呼出し盃をさし、關ヶ原にて既に死すべかりし身の、幸にながらへて、今日對面する事を得たりといひて後、わが片足をなやみぬ。かゝる武功の人に少祿こそ不足に候へ。今日のもてなしに祿を增し給はり候へといはれけり。彼物頭、後に直政の呼出されて、對面に及びし時のめいわくなる、一生に覺えずといひ

けり。

義弘近江の甲賀にかゝり、老翁一人案内者にして道しるべさせ、伊賀の山路を經て上野まで行き著かれたり。爰は筒井伊賀守定次の城なり。使を以て島津義弘唯今打過候と云ひ送りて行く處に、野武士四五百人がほど山の中に待ちかけたり。義弘物の數ともせず打破り、二人生捕りて上野に立歸り、大手の柵の木にからめ付け、さてそれより奈良に出で、かの老翁には刀にさし添へられし赤銅の笄をあたへ、此をしるしに必薩摩に來れ、今度の勞に報ぜんとて大阪に至り、船に乘り鹿兒島に歸られけり。

一說に、左近丞と云ふ姓薩摩に有り。是は慶長の頃大阪の商にて年久しく薩摩の米をあきなひける者なり。關ヶ原破れて後、義弘大阪に著かれしに、士一人先達つて彼商家に行きしかば、彼商待ちわびたる體にて、君はいかにおはしまし候と問ふ。いざとよ討死ありしよと答へければ、商家涙を流し、年比厚恩を蒙りし事なれば、關ヶ原破れぬと聞くより必爰に渡らせられんと相計りて、船を設けて待居たるかひもなく、口惜しき事なり。せめて御供に參らんとて、水中に飛入らんとせしをおし留め、今の時なれば、人心のはかり難くてかくはいひしなり。實は一方打破りて爰におはせしなりといへば、かく疑はれしは恨なれども、それを云はんには時移るべしとて、船にのらせられん樣をこそといひも終らぬに、義弘來られしかば、酒樽を積み其間にかくしのせ、其身も付添ひて、直に薩摩に赴きし、其者の子の中一人、薩摩に仕へし其子孫なりといへり。

彼老翁薩摩に行かばやとおもへども、道遠ければ空しく過ぎしに、程經て人にいざなはれ、鹿兒島に行きて笄を出しければ、などとく來らざりしぞとてさま〴〵繕し、黃金五百枚あたへ、いざなひし人にも黃金あまた與へて、人を添へておくり歸されけり。

東照宮勝閑の儀を延べ給ひし事

關ヶ原の軍敗れしかば、金森法印とて勝閑の儀式行はれ候はばやと申しけるを、東照宮諸將の武功により、かく敵をば打破りたれども、諸將の妻子大阪に人じちとなりて敵の中に有り、此を事故なく歸し與へざらん間は、わが心安んぜず。勝閑をいかで行ふべきと仰せられしを聞く人、愈々感服しけるとぞ。

卷之十四

細川忠興の北の方義死の事

細川忠興の北の方は明智光秀が女なり。父謀反の時忠興に向ひて申されけるは、父ながらかゝるくはだて事よくなるべしともおもはれず、瀧川柴田など申す人々多ければ、必軍敗れ候べし。女の淺き智慧にも口をしくこそ存候へ。男の身ならんには、鎧の袖にすがりても諫め申すべきを、力なし。君もし興せさせ給ひなば、世の譏いかでのがれさせ給はんと、涙に沈まれしかば、忠興光秀に同心なかりけり。其後程經て秀吉伏見に有りて、諸大名の北の方を呼入れて饗れし事のありしに、忠興の北の方かくと聞き、女の人なくて一間に入りて他人にまみゆる事やある。われも召されんとならばとて、懐に匕首を用意せられけり。此より秀吉の惡行はやみてけり。石田西國の諸將をかたらひて兵を起す時、諸大名の北の方を大阪城中に取入れんとするを、北の方聞きて、傅に付けられし河喜多石見、稲留伊賀、小笠原正齋を呼びて、吾此所を出でん事思ひもよらず、城中に取籠られんは恥辱なり。よく斷を申候へ。猶聞入れられずば、是を限と思ひ定むべしと語られしかば、正齋殿東國に向はせ給ひし時、おもひかけざる事のあらんには、正齋はからひて武將の恥なさらしそと仰せ置かれ候ひき。敵奪ひとらんとするならば、其時思召切らせ給へと申しけり。かゝる處に、城中に入れよと使を以ていはせしかば、再三斷の旨を述べけれども聞入れず。七月十七日の未の刻ばかりに、大阪の軍兵五百餘り玉造口の屋敷をとりまきて、とく城中に入り申されよ、さらずは亂入りて奪取らんと呼はりけり。女房ばらあわてゝ泣悲めども、北の方はさわぐ色もなく、かくあらんとは兼ておもひ設けつる事ぞとよ、正齋介錯せよ、われ生ける世にまみえざりし人々に、死しての後も見られんはよからじとて、面に覆面打ちかけ、くゝり袴著て刀を抜き胸につきたてられしかば、正齋眉尖刀にて介錯し、其まゝそこにて腹を切らんとせし處に、正齋が小姓はしり來り、殿の北の方と同じ所に自害あらば、後の誹の候べきと云ひければ、正齋あまりのいたましさにわすれたるよとて、障子の外に走り出で、家に火を懸け、石見と共に腹切つて、炎の中に死したりけり。伊賀は光秀より附けられし身なれば、遁るべき道もなきに、人にまぎれて落ちうせたり。

忠興後にさがし出して誅せんとせられけるを、松平忠吉伊賀は無雙の鐵砲の妙手なれば、助け置きて、若ものに教へさせんとしひて乞はれしかば、忠興力なくて止みけり。伊賀は世の交もなく、髪をそり一夢といひけり。百發百中の手だれなりしかども、人多き中にては、大きなるものも中らざりしとぞ。

忠興の北の方かたみとやおもはれけん、手ずさみのやうに書きすてゝ硯の中に入れられし歌に、

先だつはおなじかぎりの命にもまさりてをしき契とぞしれ

落出でたる女房の取傳へて世に殘りけるとなん。北の方はかねてかくあらんとおもはれしかば、幽齋の妹年老いて宮川殿と申せしと、忠隆の北の方前田利長の妹とに、吾は人質に取られんと世の物いひの候ほどに、落失せばやと存ずるなり。同じくともなひ參らすべけれど、人多くては中々うき目や見る事の候はん。とく此隣の築地一重越えて落ちさせ給へやとて、宮川殿は建仁寺、忠隆の北の方は浮田秀家の北の方に忍び行きて、此禍をのがれたりとかや。誠に義烈のみにあらず、謀もゆゝしき人なりと語り傳へて、袖をぬらさぬ人もなし。

安養寺門齋三成を生捕らんとせし事附姉川合戰の時門齋生捕られし事並遠藤喜右衞門討死の事

三成兵を起す時、大津の城に入て京極高次に對面し、彌〻秀頼公の味方有るべしとぞ申しける。高次の士に安養寺門齋と云ひし者、黑田伊豫に向ひ、今三成城中に入る事、誠の天のあたふる處なり、からめ取りて關東に奉らんと云ふ。黑田聞きて、三成を生捕るとも西國の諸將大軍にて攻圍むべし。いかでか防ぐ術のあるべきとて聞入れず。門齋あざ笑ひ、三成は譬へば亂の首なり。其餘は手足の如し。首を碎くほどならば、手足何の恐の候べき。たとへおし寄せ候とも、固く守りて戰ふべし。軍せずして三成を生どるならば、天下に名を揚げ勳功誰かならぶべき。吾年老いぬれど三成を搦めん事はたやすからんとて、今村掃部をも勸めしかども、爭論に時移りて、三成城を出行きけり。門齋はもと淺井長政に仕へ、姉川の軍に生どられ、龍ケ鼻の陣にて信長の前に引出す。信長の曰く、けふ勝に乘りて小谷を打破らんと思ふはいかに、汝が命を助けなん。此勝敗いかなるべきと問はるゝに、安養寺承り、長政が父下野守小谷に有りて、其兵三千計もや候ひなん。然るに疲れたる兵を以てかろ〴〵しく攻められ候はん事然るべからずと申す。信長打うなづいて、けふ取りたる首ども出して、安養寺に見せて、其姓名を問はるゝ中にも、竹中久作が取りたる首を見て、遠藤喜右衞門直繼と申す者にて候。いかなる有樣に候ひしと問ふ。

久作はもと齋藤家の士信長に奉公しけり。姉川にて淺井の士遠藤喜右衞門直繼云ひけるは、信長畫はかたく守り、夜々横山の城を攻む。信長の本陣龍ケ鼻を一夜討せば、勝利疑なしといふ。長政是を用ひず。しからばかゝる圖をはづして、淺井の家危き事朝夕にあり。軍敗れん時、信長を討たん者は吾なりといひしが、いひつる詞にたがはず、首を刀の鋒につらぬき、大將の實檢にそなへんと云つて、信長の旗本に來りけるを、久作討取りたり。久作かねて必遠藤を吾討取るべしと人ざしたりけり。いかなる故ぞと問ふに、其仔細二つ有り。われ江州にて遠藤と相知り、よく見知りたり是一つ、彼は聞ゆる剛の者にて、力あくまですぐれたり。常に進むに先だちて退くに後る、是二つといひしが、果して直繼が首を得たり。

竹中聞いて、首一つ提げ殿はいづくにましますぞと云ひて、ちかづき進み來りしまゝ、敵のまぎれ入り

て、殿を切り奉るならんと思ひ、引組で討取りしと語りければ、夕部大依山にて、もし軍破れ候ならば必生きて歸らじ。信長を一太刀恨み申さんと、遠藤がいひつるが、果して其詞の如くなりきといふ。

遠藤は淺井家に名有る剛の者なり。信長江州佐和山にて始めて長政に對面あり。公方義昭の歸京の次に佐々木承禎を攻打つべき事を議し、長政も力を合すべき由の約を定め、岐阜に歸らるゝとて、江州柏原に宿せらる。淺井縫殿、中島助九郎、遠藤喜右衛門、三人馳走の爲柏原に行きしが、遠藤早馬にて小谷に歸り、信長を見るに、武勇猛にして謀たくましき人なり、淺井家をくつがへすべき事疑ひなし。今日決斷せられ候へ。臣信長を刺殺し申すべし。其勢ひに乘りて美濃に攻入り候べしと云ふ。長政聞きて、一度約して變せし事本意に非ずとて聞かざれば、直繼再び柏原に赴き、信長をもてなし、信長無事に岐阜に歸られたり。直繼常に之を悔みけるゆゑ、姉川にて獨すゝんで信長を討たんとしけり。

其次に出せる首を見て、是は安養寺が弟にて、彦六甚八と申者にて候。死ば一所と契りしに、先だつる事こそ口惜しけれ、とく首をはねられよとて、其後はものもいはず。かゝる所に、秀吉其比は藤吉郎と云ひしが、栗毛の馬の汗かきたるに諸鐙を合せ、白沫かませて馳來り、いざ小谷へおし寄せ攻破るべきといひしに、信長いやとよ、かろ〳〵しき軍はあぶなしとて許されず。秀吉後悔あらんものを、急ぎ寄せ給へと強ふれ共、信長聞入れずしてさて止みけり。安養寺は只首をはねられ候へといひけれども、吾に奉公せよとてさま〳〵なだめ申されけれども降參せず。遂にゆるされて小谷に歸りけり。安養寺にたばかられて、信長軍を返されしかば、淺井三年經て小谷の城落ちたり。其後安養寺淺井と京極と一族なりし故、高次に仕へけり。若き時三郎左衛門とぞ申ける。

大津城合戰京極家の士戰功の事 附赤尾伊豆が事

高次は關東に素より心を寄られしを、大阪より朽木河内守元綱を使にて、秀頼公の外戚たれども江戸大納言殿にも緣あれば、人の疑を散せん爲に幼息熊若丸を人質に出され候へとなり。高次かろ〳〵しく敵の色をも立て難しとて、止事を得ず熊若丸を出して北國に軍を出されけるが、岐阜の城落たる由を聞きて、北國に向たる人々大垣を指て引返されしかば、高次北の庄より直に海津にかゝり、九月二日の夜半に大津に歸り、立花宗茂筑紫廣門粟津に陣せしを夜討にせんと謀られしに、黑田伊豫同心せずして止みぬ。さらばとて、關寺の門を閉ぢ城下の兵粮を取入れ、專防禦の支度せられけり。宗茂廣門石部より引返て勢多に陣取、輝元の陣代毛利元康等は三井寺に陣し、久留米秀包南條中務を始として、三萬七千餘四方より押寄せたり。中にも宗茂の軍兵は烈う攻詰て、死人を踏越えて乘入んとす。防兼て京口の旅をしばりければ、多賀出雲守眞先かけて塀を打破り、三の丸に鬨を作りかけてひた〳〵と押入けり。山田大炊、赤尾伊豆、足輕頭には井口左京、大橋肥後、安養寺門齋、使番山田三右衛門、横山久内、田中茂兵衛、茨川口を固めたるに京口より敵亂れ入りしかば、二の丸をさして退く。高次使を以て、何とて三の丸を

すて丶早く二の丸へ引取るや、仕寄を付られなば、防ぎがたかるべし。はやく敵を追出せと下知せられしかば、門を開て切つて出る。山田大炊十文字の槍の鐔を片手に取て、冑の上にてふり廻し、參る〳〵と呼はり懸けて、一番に槍を合せ敵二人突伏せたり。此を山田大炊が茨川口の槍と世に稱しけり。赤尾は猩猩緋の羽織を著て、長身の槍にて數人突伏せ、山田三右衞門も散々に戰ひけるが討死せり。二の丸に引取る時、山田と赤尾とかはる〴〵六度まで返し、突拂ひたる殿の振廻目を驚しけり。二の丸の門際にて、赤尾山田已下ふみ止りける時、唯少齋門をたて關貫をさす。赤尾ちつともひるまず、長身の槍をかたはらに置き、敵の方へ足を投出し、草鞋のひもを結び直す。其武者振を敵見て、少しためらふ時、少齋門を開けば、中に入る事を得たり。赤尾薬殺さんとしたるよといひしに、少齋敵追すがりて、二の丸に攻入らんとする故にこそ、門をさしてけれ。各を助ん爲に、城の危きを忘るべきやといひければ、さばかりの伊豆も答ふるに詞なかりけり。黑田次郎兵衞、尼子宮内、安養寺長門、三田村安右衞門、今村掃部、赤尾久助、中井民部、小豆掃部、油井周防等は京口を防ぎけるが、三の丸へ攻入る敵と戰うて討死すくなからず。銚子五郎兵衞は初め關白秀次に奉公せしに、あくまで酒をすきけり。ある時朋輩に語りけるは、殿下のかたへに立置かれし白熊色白く丈長し。あはれ冑の上にみだしかけて、軍の先がけせん物をといひしを、秀次聞きて、銚子を呼で是を肴に酒を呑めとて、彼白熊をあたへられしかば、銚子誠にありがたく存じ候。戲れに申せし詞しろしめされて候やらん。若し此の後軍のあらん時、先に申せし詞をいかにせんといひけるが、今日栗色のしぼ革に、金の筋つけたる羽織を著、かの白熊の雪の如くなるを冑の上にみだしかけ、十文字の槍を横たへ、尾關甚右衞門とともに、亂れ入る敵五六人突伏せて、冑の鍬を傾け、一足も引まじいぞと呼はり討死したりけり。事ふる君は異なれども、賜ひたる白熊にて、敵味方の目を驚す討死をぞ遂げたりける。尾關はもと柴田勝家に仕へしが、後高次北國より歸られし時、尾關を近づけ夜酒を酌みて、密にさ丶やかれけるは、吾石田に與するにあらず、歸りて大津の城を守らんと思ふなり。敵の眞中に小勢を以て軍せん事尤かたき事なり。汝が智勇を賴むと語られしに、尾關涙を流し、人々いくらも候中に、何と思召されて斯く仰せ候ぞや、此上は二つなしと答へければ、高次汝討死すべきや。わが爲に命を捨てんとおもふ者多けれど、謀を同じくする者稀にこそあれ、汝偏に討死とのみおもへるは、吾志に非ずといはれしかば、尾關かく身にあまり候御詞を承りては、骨をきざまれ候ほどの堪がたき事有りとも、此恩に報じ奉らんといひしが、此時銚子と俱に戰死せり。後高次城を出でられける時、赤尾と山田と高次の輿の左右に供しけるを見て、寄手の軍兵指を指し、かの大膽者よと云ひあへり。

一說に、伊豆茨川口の敵を追拂はんとて出でける時、跡をば弟の久助内田太郎左衞門多賀孫左衞門等守りけるを、寄手きびしく攻る。久助手負ひて吾は本丸に引退かんといふ。内田聞もあへず、昔熊谷が子の直家うす手ならば討死せよ、痛手ならば自害せよといひし事、弓矢取る身の詞なり。爰

を逃げんとは口惜き事よ。大剛の伊豆が弟に汝が如き人の有りけるこそ怪しけれと罵りけり。内田は銀の馬標を冑の立物にしけるに、銀の馬標よとほめけるほどの物師なり。敵今村掃部が持口を破りて亂れ入しかば、伊豆ふり返り見て、三の丸はとられしとて引返す。人々敵既に攻入りて、入るべき方なし。京洲の丸より入らばやといへども、伊豆少もひるまず。初出たる所より入りなんこそゆゆしかるべけれとて、槍を提て敵に向ふ。伊豆に從ふ者四十五人、下部は皆逃散りて、伊豆が若黨一人平野藤兵衛と云ふ足輕一人殘り留れり。伊豆むら立つたる敵を物ともせず、蜘手十文字に追立て、さん〳〵に戰ひけるに、敵尙烈しく進み來りしかば、尾關甚右衛門銚子五郎兵衛二人土橋の上にて返し合せ、大音あげて存ずる仔細ありて討死するよ、寄つて首をとれとて、面もふらず切死にぞしたりける。其ひまに赤尾そこをつと行過ぎて城際に至る。門の外の柵に簀戸有り。赤尾簀戸をゞめよといへば、平野靜に簀戸をゞめたり。門を開けよといひしかば、少齋法師武者にて門を固めて有りしが矢倉に上り、味方とは知りたれど、敵付入りにすべし、人は輕く城は重し、爰こそ死すべき處なれ、はなやかに討死せられよ、是より見物せんといふ。赤尾石によりかゝりて息をつぎ、九尺計なる槍を下に置きて、脚半のひもを結び直す。敵簀戸を破りて押寄する處を、八十餘人の兵ども爰を限りと面もふらず突きかゝる。赤尾しづかに緒をゞ終りてつと立上り、赤尾伊豆とは知らずやと名乘て、亂れ入る敵を念なく突退け追出す。少齋矢倉より鐵砲を嚴しく打出させければ、立花の勢も餘りに手いたう防がれて引退く。かくて少齋跪いて槍の穗先を門のくゞり戸に當てゝ、一人づつ靜に入れてけり。かくするは無禮に候へども、門を守る法なりといふ。皆入終りて、伊豆と平野と二人門外に殿して殘りけるが、平野は赤尾にまづ入れよといふ。赤尾は平野に汝先入れよとて、終に赤尾おくれて入りけるといへり。

赤尾伊豆は美作が子なり。信長に滅れて、

信長江州小谷の城を攻む。淺井長政勢盡て既に自害せんとする時、不破河内を以て、緣者のよしみ降參あらば疎意あらじと云はせらるゝに、長政降參すべき志に非るを、近習の士どもよも別の仔細も候まじ、城を出て運を開かれ候へといふ。さらば父下野守も共に疎意なくば降參せんとて城を出づるを、信長見て、長政何の面目有つて今更の降參ぞと高聲に呼はらせられしかば、長政怒りて、赤尾美作が宅に入りて自殺せり。淺井石見赤尾美作いざ切死せんとて駈入りけるを、多兵押隔てゝ生取りて信長の前に出す。信長汝等長政を勸め、朝倉にくみして吾を敵となす、なれる果を見よと罵らるゝに、淺井居直り事新しき事を承候もの哉。義景を別事なく立置かんとの誓文、其血もいまだかわかざるに、越前に軍を出し、是によりて長政義の當る處にて義景に與したり。今日城を出づる疎意あらじといつはりたる詞を押しはかり、只自害と一すぢに決したりしに、若天運によりて家を立つるならば、信長を斯のごとくからめんと思ひしに、かく成たり。義を知らず恥を知らざるは、

信長こそ、人面獸心なれといへば、信長彌〳〵怒りて、汝詞にも似ず、生どられたるはいかにと罵らるゝに、年老いぬれば力に及ばず、昔より士の生捕となる事恥にあらず。武勇を以て敵を討得ず、いつはりたばかりて人の國を亡すこそ恥なれ。見られよ、必下人に首を切らるべしと罵り返せば、信長杖を以て打たれしに、石見打笑ひ、からめたる者にかゝるはからひ、あつぱれよき大將の禮儀かな、いかほどもうてや犬坊と罵りけるが、石見も美作も終に殺されけり。

伊豆幼かりしが、僧と成りて多賀に匿れ居しに、十二歳の時多賀明神の鳥居のほとりにて遊びける處を、いづれの家の士にや、十二人打連れて通りしに行きあたる。士怒つて小僧め無禮なりとて拳にて頭をうつ。伊豆飛かゝり、其士の刀を抽いて只一打に切はなし、つと走りぬけて赤尾にかくれ居たりしが、後京極に仕へけり。

十時傳右衞門山田三右衞門死骸返しの事

立花宗茂使を城中にたてゝ、けふ味方討死の中に、十時傳右衞門と申す者あり。とりわきて不便に存ずるなり、骸を返し給はり候へとて、物具の色を書きて云ひ送られしかば、やがて返しぬ。又城中よりも、山田三右衞門が首を返し給はれと望まれしかば、冑を添へて送られけり。此を大津の死骸返しとて、勇士死後のほまれとしたり。

高次大津の城を出られし事

高次大津の城を守りて固かりければ、高野の木食上人を以て和平を執行ふ。高次さらに同心なかりしに、さしもの長臣黑田伊豫、寄手に心を通じければ、力なく和平して城を出で、京都大佛の養源院に立寄り、それより高野に赴く。（關ヶ原記に三井寺に立寄るといへるは謬なり）三成亡びて後、東照宮高次を召しけるに、今度諸將皆大功有りし人々なるに、我城一つ守りとげざりし身の、立ちまじらん事口惜しとて出られず。又使を以て御物語ありたき事あり、尙出られずば我行かん、年老いたる身を勞せられんよりは、若役にと仰せ出されしかば、高次辭しがたくて出でられけり。東照宮此度城を攻めける敵兵大垣に到る程ならば、關ヶ原の軍危かるべきに、九州の大軍を數日隔てられしゆゑ、わが軍の援となりし事、大津城中の軍兵殘りなく關ヶ原に來りしよりも、遙にまされり。敵より乞ひたる和平なれば恥にあらずと仰せらる。大津にての事なれば、近江にて四十萬石賜ふべしとなりしに、高次聞きてかく賞せさせ給はゞ、關ヶ原にて大功の人には百萬石を賜はるべきか、おもひもよらずと固辭申されけり。

一說、關ヶ原の軍敗れて、東照宮大津の城に入らせ給ふ。山岡道阿彌供奉しけるが、京極宰相よく持ちこたへ候に、今少の事にて本意を遂げずと申しければ、御答なく奧平が長篠にて武田を防ぎしに、戶障子に鐵砲の玉のあと鹿の子をゆひたるが如く、土も落ち板もぬけたるを、むしろをはり疊を立てゝ持ちこたへたりとぞ仰せける。又高次の使者多賀孫右衞門大阪に參りけるに、御前に召して、京口の旗を早くしぼりし故、敵攻入りたると聞召すよし仰せ有りしかば、口惜しく存じ候よしいひ

て涙を流しけり。さて井伊本多に向ひ、下部の申す木履に雪のつきたる如くなる御出馬にやぶれ、あんどの如き城に、高次なればこそ數日敵をば支へ候へといひければ、戯れながら、理なりとぞ答へられしといへり。

立花家足輕鐵砲の用意附細川家口薬入吉田大藏猿頭の事

立花宗茂大津の城攻に、足輕に繩だすきかけさせ、其繩目に玉薬の早合をはさませて、箭をつがふよりも早く鐵砲を搏たせられけり。

又細川家の鐵砲は、口薬入を革にて、今世のはながみ袋の如く造りて用ふ。事の急なる時指にてひねり入れて利あり。又加賀の吉田大藏とて世に聞えし手だれの射手あり。常に矢を取りて俄に出づる時、十筋も持たき事のあるに、腰にさせば、走るに落つるとて革にて角袋造りて緒を付け腰にさげ、それに入れて腰にさしけり。其名を猿頭と名付けたり。

伏見落城の事附鳥居忠政雜賀孫市を製れし事

會津に向はせ給ふ時、伏見の城には本丸に鳥居彦右衛門元忠、二の丸には松平主殿頭家忠松平五左衛門、松の丸には内藤彌次右衛門家長をおかせ給ひ、六月十六日東照宮打立給ひ、十七日伏見の城にて鳥居を召し、今度士卒少くして殘り止る事を仰せ有りしに、元忠臣が存ずる所會津は强敵なり、一人なり共召具せられて然るべし。伏見には臣一人にて事足り候。世上無事ならずして變の出來ん時は、近國に援ふべき味方も候はず。今の十倍の軍兵を殘し置かれたりとも、防ぐべきやうは候はずと申しけるに、東照宮默しておはせしが、やゝありて、駿州宮ヶ崎にて十一に成りし時、彦右衛門は十三にて初めて出でたりしよ、年久しくもなりぬとて、御物語に夜いたく深けゝれば、元忠會津の御留守世に變なく候ひなんには、復御目見も仕りなん。もし事あらば今夜ぞ永き御別れに候と申して、座を立兼ねたりしに、東照宮御袖をもて落る涙をおそひてぞおはしましける。かくて石田兵を起せしかば、伏見を攻むべきやと評定しけるに、增田長盛城固うして、しかも内府の内に名高き者共もあれば、たやすく落べからず、先はかりて見んとて、山川半平を使にしけり。元忠對面すれば、增田が申候には、今度輝元秀家景勝德川殿と弓箭をとり、九州中國の諸大名皆同心せられ候。かゝれば此城を請取り申すべし。長盛久しく德川殿の御したしみ深く候へば、此事然るべしとは存じ候はねども、思慮の及ぶべきにあらず。伏見の城は太閤きづかれ候て、今德川殿姑くあづかりておはしませば、德川殿の城と申べきにあらず、とく城を出て内府に忠を致さるゝ道あらんと存ずるよし言送りければ、元忠聞きて、過し頃内府會津に向ひし時、かたく守り候へと申して候に、敵に渡し候事は存じもよらず。增田殿は内府にしたしみ有るゆゑ、かゝる事を述べらるゝ旨心得られず候。若おめ〳〵と城を渡さんに、同じくは城を枕にせよとの使たまはり候はゞ忝しとも申べし。とく城を出でよとは、武將の詞にはあるべき事とも存せず、とく寄せられよ、討死せんと答へしを、かへりて長盛に告ぐる。かたへに渡邊勘兵衛有りしが、つ

く〳〵聞きて感じ入りて頻に涙を流しければ、長盛も我もをしき人を殺さん事のなげかしきとて共に涙を流しけるとぞ。かくて三萬餘りの寄手四方より攻めけるに、少しもひるまず、十日餘防ぎけるに、甲賀の者内通して、七月晦日の夜、松の丸に火をかけしかば、寄手力を得て攻入りたり。内藤は精兵の手きゝにて、さし詰引詰射ける矢に死人數をしらず。終に内藤父子も討死し、主殿頭五左衞門を始として殘なく切死にぞしたりける。元忠本丸に有りて門を開かせ、門際より六七間しさりて、士卒三百餘白刃を拔きそろへ、しづまりかへつて待ちかけたり。寄手しばし攻入り、兼てためらひけるに、元忠大音あげ、一人にても敵を討つて死するぞ士の志なれ、吾箕形ヶ原にて足に手負ひ行歩心にまかせざれども、逃げんとせばこそ足をも賴まめ、いざ最後の軍せよと下知する聲を聞きて、一同に切つて出で、面もふらず戰ひて、一人も殘らず討死しけり。元忠戰ひ疲れて玄關に腰をかけ、息つぐ處に雜賀孫市重次死骸を踏越えてすゝみよれば、吾は鳥居彦右衞門よ、首取つて功名にせよとて、物具脱で腹を切りたりしかば、雜賀其首を取りたりけり。本丸に二つの門有りけるを、大手の外はみな堅く鎖してければ、一人も逃げちる者なく討死しけるとぞ。後元忠の首を大阪京橋に梟せしを、京の商佐野四郎右衞門と云ふもの鳥居にしたしみ有りしが、かゝる忠義の人の首を惡逆の罪人と同じくさらす事やあるとて、夜深けて盗取り、智恩院に葬りて一宇を建て龍見院と名付けしかば、石田聞ば必定刑罰すべし、せんなき事なりと云ひける者あり。佐野吾人しく恩を受けし身なれば、白刃をふむまでこそなからめ、是程の事は人の義なり。義なきは禽獸なり。人生れて死せざる事なし。刑罰にあはん事ちつともをしからずとぞいひける。

雜賀孫市後水戸中納言家に仕へたりしが、ある時、中だちを以て鳥居忠政のもとに云送りけるは、重次むかし伏見の城にて、元忠の御最期に參りあひ、其時の御物具吾家に取傳へ候ひぬ。先考の御形見にて候。御覽ぜん爲返し參らせ度こそ候へといふ。忠政悅んで、なき父が形見是に過べからず。一目見ばやと答ふ。重次自ら携へてゆき向ふ。忠政門外に出迎へ重次を奥の間に招じ、亡父に再對面の心地すとて涙を流し、甲冑太刀刀おし板の上にかき居ゑて是を拜し、さて今日重次を饗せし有樣誠に美盡せり。其翌日重次の方に使を立て、昨日の見參を謝す。又重次の御志によりて、父が最期に帶せし物具再び見候事、返す〳〵も悅入り存じ候ひぬ、忠政が家に傳へし父が形見に見るべき物もすくなからず、見苦しうは候へども、此物具重次の家にとゞめて、御武名を子孫に傳へられん事、弓箭の道にはよき御遺戒にもや候べきとて、甲冑太刀かたなこと〳〵く返し遣はす。それより年毎に冬綿厚く入れたる衣五領使者にもたせて、はる〳〵と水戸に贈り遣し、音信を通ずる事、忠政が一期のほど終におこたらず。水戸公此由聞し召し、大に感じ給ひ、鳥居が使者の來るべき前、道梁を修理せさせ、重次に客儲すべき魚鳥やうの物賜ひけるとぞ。

村上三右衞門大鳥源二武者振の事

筑前中納言秀詮先陣の士大將平岡石見松野主馬各祿一萬石なり。伏見の城攻めに、主馬が仕寄の竹把を城中より火箭を射かけ燒きたりしかば、其所を退きて竹把を付けんといへども、村上三右衞門聞入れず。燒跡に竹把を付ずしてはあるべからずとて、主馬と相謀りて竹把を付直し、竹把の上にかべ土をぬるべき用意しけり。主馬外に出づる事を嫌ふ。人々は士たりとも內にて土をこねられよ、又土をぬりたらん者には、中間下人なりとも士とせんと下知しければ、下部八人出て土をぬりたりしかば、其後竹把を燒かざりしとなり。旗本より大島源二といふ者使に來り、仕寄場より堀端まで間數幾許かあると問ふに、村上間を打ては見候はず、凡十二間計もやあらんと答ふ。大島とてもの事に間を打たんといへば、城近く箭玉の飛來る所に强みを出して何の爲ぞといふ。源二殿に問はれて間をうたずといはんは、快からずといひしかば、村上旗本の使に先陣の間をうたする事は有るまじとて、村上靜に出て、竹を間竿に切り、一間づつうつ。源二先へ廻りしづかに一つ二つとさし終れば、十一間半也。大島村上進退のふるまひ見物なりしと云ひあへりしに、源二は二十二歳伏見落城の日討死しけるとぞ。

三刀谷監物田邊城に籠る事

三刀谷監物孝和は其先祖承久の亂に軍功有りて、出雲の三刀谷の鄕を賜はりけるによりて、氏としたり。其末雲州尼子の旗下に屬しけり。孝和が父彈正左衞門久扶毛利家に奉公しけるが、後仕を止めて終りぬ。孝和は吉田兼治にたよりて吉田に居たりしを、關ヶ原の時安國寺北村五郎右衞門を使にしてまねきけれども聞入れず。細川幽齋の丹後田邊の城に行きて力を合せんとす。從者ども奧州は大國なり、景勝は勇將なり、いかでたやすく破るべき。西國一同は石田に與し候ひぬ。德川家の危き事近きに候に、何とて安國寺が招きをいなみ給ふぞと云ひけるに、孝和聞きて石田島津に叛かせ、內府を引付け軍を起させ、あとにて京大阪を取りしめん謀こそ然るべけれ。德川家の領國其便よき會津に手始をしたるは無謀なり。三成必定勝べからずとて、吉田家は幽齋と緣者たりしかば田邊に行きて、大敵にかこまれしかども持ちこたへしは、偏に孝和が智勇たくましかりける故なり。

田邊城勅命に依て和平の事附細川幽齋古今集傳授の事

大阪の軍兵一萬七千を以て、田邊の城を破る。細川忠興は奧州に赴き、父幽齋城に有り。三刀谷孝和大剛の人にて、度々切て出で防ぎ戰ふ。幽齋和歌に長じたる人なり。古今集の祕訣爲家卿のしるされしを殊に祕藏せられしを、兵火の爲に焚けん事を、桂光院知仁親王慮らせ給ひ、使を以てかの古今集源氏物語を禁裏にまゐらせよとなり。又烏丸大納言光宣卿勅命を奉りて、城に赴き給ふともいへり。則其書を奉るとて、

いにしへも今もかはらぬ世の中に心のたねを殘す言の葉

又烏丸光廣卿のもとへ、封じたる歌書をやるとて、

もしほ草かきあつめたる後とめて昔にかへせ和歌の浦浪

斯る處に前田德善院を禁裏に召し、田邊の城攻和平の事を勅命ありければ、寄手かこみを解きて幽齋城を出でられけり。光廣卿幽齋の許より送られし書いまだ封をひらき給はざりけるが、かへし

あけて見ぬかひもありけり玉手箱ふたゝび返す浦島の波

幽齋かへしに、

浦島やひかりをそへて玉手箱あけてだに見ずかへす波哉

一說、藤原公國卿早世ありて、其子實條卿幼かりしかば、和歌の口傳を幽齋に傳へられけり。後に幽齋實條卿を田邊の城に迎へとりて養育し、悉く授けられしに、古今集の說は未傳へられざる中に、朝鮮征伐の事起りしかば、弓矢取る身は討死のほどはかりがたしとて、古今傳授の事書きたる書の箱を烏丸大納言光廣卿へ贈られ、預けまゐらする間、朝鮮に渡り若討死せば、實條卿へ渡し給はり候へとて、添へられし歌、

人の國ひくや八島も治まりてふたゝびかへせ和歌の浦浪

藻汐草かき集めたる跡とめてむかしにかへせ和歌の浦波

光廣卿のかへしに、

萬代をちかひし龜の鏡しれいかでかあけんうら島がはこ

其後秀吉遺言して、豐後臼杵を幽齋の男、忠興にかへあたへられしかば、光廣卿より箱をかへすとて、

あけて見ぬかひもありけり玉手箱ふたゝび返る浦島の波

幽齋田邊の城を守られし時、勅命により三條大納言實條卿へ附し傳へられしに、一首の歌あり。

いにしへも今もかはらぬ世の中に心の種を殘すことのは

古田助左衛門思慮の事

古田助左衛門は古田兵部少輔重勝に仕へて、祿千石を受く。景勝を征伐の時、重勝伊勢の松坂の城に助左衛門を置かれけり。三成兵を起せし時、大阪の重勝の屋敷をとりかこみ、松坂の城を渡さずば、重勝の北の方を殺害すべしといひ送りしに、助左衛門此城は殿の仰なくて人に渡さん事存じもよらず。若しさあらずば北の方害にあひ給はんとや。誠にいたましき事なれども、いかにせん、妻子の死するが悲しきとて、城を敵に渡せしと殿を人譏り申べし。運盡きたらば、死を潔くする事弓箭とる身の習ひなり。人々は大阪の屋敷にていかにも成り候へ。敵やがて城に寄來らば、散々に軍して討死し、冥途にて對面せんと、大阪の屋敷に云ひ送りけり。かゝる處に、重勝も東國より歸り來り、松坂にたてこもる。此時富田信濃守信高阿濃津を守られしが、加勢を重勝に乞ふ。兵を分ちやるべき體のなかりければ、助左衛門阿濃津へ加勢あらん事尤望む所なり。敵阿濃津を攻めて、其後爰に攻め來らん。若阿濃津落ざる前に東方の味方來らば、敵敗北せん。其時は古田が士は敵の旗をだに見ず。富田が力にて

松坂を持ちたりなど人に笑はれ候べし。又加勢あらば、隣國相援ふの義に叶ひ、又阿濃津にて敵を防ぎしは、古田が加勢の故なりと世に申すべしと勸めて、五百人の軍兵を阿濃津にやりけり。やがて重勝の領知の百姓の中に大家なる者、二十人を士として城にこもらせ、後に百石の地をあたふべしと約しけり。是人質の心にて百姓をさわがせじとの術なり。關ヶ原の亂治りて後、重勝約に背かんとせられしかば、助左衞門信を失ふは、君の道にあらず候。かゝる言葉は金石よりも堅くすべき事なり。是より後又欺かんとて百姓ども何事も聞き入候はじ。信なくば立たずと申事の候。臣が祿地を分ちあたふべしといひければ、重勝約の如くせられけり。

卷之十五

伊勢國阿濃津城軍の事附佐治縫殿が事

毛利秀元吉川廣家富田信高の阿濃津の城を攻むる時、城兵城の乾の隅に有りける伽藍を燒拂ふ所に、俄に風かはりて焰を城に吹きかくる。寄手是に乘じていざ打破らんとて、宍戸備前守隆家先がけして攻入りけるを、分部左京亮政壽城中に加勢有りしが、切つて出で、宍戸と戰ひ互に痛手負ひたり。信高本丸の大手にすゝみ出で槍を合せて相戰ふ。かゝる處に、容貌美しき武者緋をどしの物具中二段黑革にてをどしたるを著、槍を提げ來り、富田が矢面に立ふさがり支へ戰ひたり。（秀元の兵中川清左衞門といふ者を討取りたりといへり）かくて富田門に入る時、かの武者を見れば、殿はつゞがなくわたらせ給ふか、討死と聞きて形は女なりとも男におとるべきやとて、出候ひしにといふを聞けば、信高の北の方なり。（信高の北の方は浮田安心の女也）信高驚きて且悅び打連れて城に入り、今日の有樣たぐひまれなりと云ひあへり。其後高野の木食上人和平を取計ひ、信高城を出でけるに、程なく、東照宮伊豫の宇和島にて十萬石下し賜はりけり。

佐治縫殿は近江甲賀郡伊佐野村の人にて父を左京といふ。秀吉の爲に城を落され流落して、縫殿九つの歳富田信高に仕へ、十四にて四百石あたへられけり。津の城に籠る時十六歳名を善大夫と云ひけり。八月二十四日京口淸嵐寺の三の丸燒拂ひ、敵攻入りけるを防ぎ戰ひて、信高本丸に引きとり

たれども、分部左京亮もいまだ來らず、家老物主も來らざれば、信高天守に上り自害せんとて、物具を脱ぎ、佐治に汝介錯せよと下知せられしを、おし留めたる處に、分部富田五郎右衛門、同主殿上田吉之允も二の丸に引退く體見えければ、信高上帽しめ直し、佐治を天守より使にやられけり。大手の門矢倉廣間の前塀重門の左にて、毛利秀元の士紫ほろかけたると其外五六人と、上田吉之允槍にて渡り合ひ居たる處に、行懸かり詞をかけて敵を追立つる。ほろかけたる敵大手の門くゞりて引退くを追詰め、兩人にて討取りたるを、信高天守より見られけり。後城にこもられし時著られし甲冑と、白河原毛なる馬に小鞍といへる作の鞍鐙を添へて佐治に與へらる。其あけの年、佐治富田の家を出で、筑前中納言秀詮に仕へ、其家滅びて黑田の家に仕へしを、富田禁錮せられしが、大阪陣に後藤にまねかれて、士三十騎の將となり、五月六日道明寺の軍に寄手の物色を見んとて、谷川すぢに出づる處に、東より來る物見武者に行逢ひ、即討取りて冑首を得たり。是後藤が手の一番首なり。後藤が旗本敗北し、敵におし隔てられ、丸山の北、細畷にて返し合せ、敵一人討取り冑に刀を添へ分捕しけれども、冑をも棄てゝけり。敵慕ひ來りければ、大阪へ引取る事叶ふまじ、討死せんとてかけ出でしを、伴野次左衛門、佐竹安大夫、本多小右衛門も續きて槍を合せんとするに、深田にて敵かゝり兼ねたり。伴野いざ是までよとて、佐治をとらへて引返し、道明寺と平野の間にて眞田に行きあひて遁れ得たり。其後流落し、仕へを求め、貧しくして江戸柳原の町家のら少ばかりの所をかりて、妻と二人ありけるが、京都に赴く。妻殊にあはれなる體なりしを、近隣の者共心を付けていたはり、日を送りしに、いかなる事にて京にゆかれしぞと問ふ。池田の御家新太郎少將の祿千石賜らんとの事なれども、二千石ならば奉公すべしとて、其ために京へ行たりと答ふるを聞きて、千石ばゝと異名してあざけりにしが、程なく從者十人ばかり引具し、馬に乘りてきらびやかなる士來りて、吾は佐治なりとて妻を迎へ、近隣の者にそれ〴〵に土産し、妻を心付けたる禮を述べて、池田の家に仕ふとて去りけり。

長束大藏大輔降參の事

關ケ原の軍敗れしかば、長束大藏大輔正家江州水口の城に引きこもりしを、國清公船戸帶刀を使として降參を勸めらる。船戸是は物なれたる人然るべしと辭し申しけれども、汝とく行向へよと仰せられしかば、船戸方三四寸計の小き鐵の板を造らせ、ふところに入れて水口に行き、長束に逢ひ、降參あらば士卒も別の事候まじ、此旨よく申せと申すなりといふに、長束阿濃津の城攻して關ケ原にさせる軍もせで口惜しく候、さらば此城を枕にせんと、手の者共存する處なり。然るに降參せんは、恥辱にて候といへば、船戸長束がかたへの士を呼びて、懷より鐵の板取出し燒きて給はり候へ、三左衛門尉が詞今かく申所、僞なき印に鐵火をとりて見せ申さんとて、思切つたる體、げにもいつはりならざりしかば、長束感じて、たとへ誑かられていかにならんも力なし。汝がしわざたぐひなきによりて降參せ

んずるにて候。是は見苦しき物に候へど、まゐらすとて、貞宗の脇指をあたへけり。船戸尙座を立たざりしかば、長束小姓をよんで硯取出し、降參すべきよし書きて船戸にあたへしかば、船戸歸りぬ。長束城を出でければ、警固の兵を入れられけり。

渡邊才兵衛武功の事

佐和山の城をかこむ時、堀尾信濃守通晴、渡邊喜兵衛を呼んで、凡城を攻むるに敵の虛實土地の要害具に知らでは叶ふまじ、いかにもして生捕をせばや。汝事よくせんやと言はれければ、渡邊首を取るだに易からず候、まして生捕せん事叶ひがたしと申しもはてぬに、渡邊が弟才兵衛進み出で、殿の仰せに何とてさはの給ひ候ぞ、喜兵衛年老いたり軍令を司るには然るべし。かゝる力業は才兵衛に仰付けられよといへば、喜兵衛思慮なき事な申しそ、無禮なりといへば、通晴大志壯力人の及びがたき事をもなし得べき眼ざしよと、才兵衛を稱せられしかば、才兵衛座を立ちけり。兄の詞は禮義なり、汝が詞は血氣なりと、人々戒めけれども、吾思ふ仔細あればこそとて、夜の更くるを待ちて從者一人打連れ、ひそかに城際にしのびゆく。茂りたる桑の木の下にさゝやく者あり。近くなりてそれのがさじと、二人槍をとりてかゝるを、才兵衛一人は突伏せ、一人は追散し、首を從者にもたせ城に忍入りて生きて歸る事萬に一つなり、此有樣を兄に語れと云ひて、堀に添ひて行く所に、夜廻りすると覺しくて打過ぐる、其跡についてゆけばふり顧みて名乘れとて、弓に箭をつがふ。才兵衛小聲に、敵の忍後より來るぞ、

爰に待ちて打たんといひつゝあゆみより、一丈計になりける時、槍を取延べて敵の弓弦を突切りて、其儘槍を取直し、諸膝ついて打伏せ上に乘りかゝり、汝よく聞けよ、吾殺さんとにはあらず、しかゞの仔細有りて忍び來りしに、行合ひたるは天のたすけなり。汝死なんとならば、吾汝を刺殺して自害せん。それは益なし、吾に隨ひ來れよといふ。彼士怒つて既に斯成りし上は命生きんと思はんやとて疾刺殺されよと云ふ。才兵衛聞きて二人空しく死なんより、生きて功あらんこそよけれ、軍神も照覽あれ、吾僞なきよといへば、さらばいかにもせよと云ふ。才兵衛悅んで引起し、物具に付きたる塵を打拂ひければ、彼士、あはれ汝は大剛の人にて、しかも辯舌明かなり。からめられぬれど恥とは思はず。名は松田大介と云ふものなりといへば、才兵衛松田を先にたてゝ、始首を取りたる所に行けば、從者喜兵衛殿も追つつゞいて出給ふが歸られずといふ。才兵衛いかにし給へるにや、松田は逃ぐべき人にあらねども、汝付きそひ居よと云ひて城の方にゆく所に、喜兵衛歸りたるに逢ひ、生捕をしてこそ候へと云ふ。城門は固く閉ぢたり。兄弟打連れ歸りてかくと申す。通晴ゆゝしき事をもしたるよとて一同にとよみあへり。生捕はいかにせんと申すを、東照宮心に任せよと仰せあり。才兵衛松田に申せし詞しかゞなり。松田に腹きらせられば、臣先死罪になり候べしといへば、勇有り又なさけ有りとて、松田もゆるされけり。

石田三成生捕らるゝ事

田中兵部大輔吉政石田を生捕にせられしが、いと懇に會釋して、數十萬の軍兵をひきゐられし事、智謀のゆゝしき事と申すべし。軍の勝敗は天の命に候へば、力に及びがたしと、禮義正しかりければ、三成打わらひ、

三成此時坐上の楹によりかゝり、もとより田兵と呼びしが如く、此時も田兵と云ひて、常に替らざりしとなり。

秀頼公の御爲に害を除き、太閤の恩に報い奉らんと思ひしに、運盡きかくなりし事何をか悔むべき、是は太閤より賜はりし切刃正宗の脇ざしなり。かたみにまゐらすよとて與へけり。

馳走の士を付けてもてなしたれども、片時も早く死なんとて食せず。馳走の士、いかで兵部が計ひに及ぶべき。よくいたはりて最後の御用意候へかしといひければ、さらば此頃腹中のあしきに、韮雜水をたまへと云ひしかば、其設けしてすゝめければ、快く食して打伏して鼾かきたり。

田中石田を引具して、大津に參りければ、東照宮本多正純に石田を守護すべきよし仰せ出されけり。正純石田に向ひて、秀頼公年若く事の是非をしろしめさじ。唯太平を致す道こそ有るべきに、よしなき軍おこして、かく恥辱にも及ばれしぞかしと云ひしに、三成吾土民より國を賜ひたる恩たとへんやうなし。世のさまを見るに、德川殿を打亡さずば終に豐臣家のためによからじと思ひて、秀家景勝を始として、同心なかりしを、しひて勸めて遂に此軍をば起したりき。戰ひに臨んで二心ある輩裏切せし故、勝つべき軍に打ちまけぬるこそ口惜しけれ。二心ある人だになくば、汝だちを始め、かくの如くからめなんに、志を失ひたるよ。運盡きぬれば、九郎判官も衣川にて空しくなりたりき。吾打ちまけしは天命なりといふ。正純智將は人情を計り時勢を知るとこそ申せ、諸將の同心せざるも知らず、かろ〳〵しうも軍を起されしものかな。軍敗れて自害もせでからめられしはいかにといふに、三成怒つて汝は武略は露も知らざりき。腹切つて人手にかゝらじとするは、葉武者の事よ。頼朝公土肥の杉山にて朽木の洞に身をひそめし心はよも知らじ。大庭にからめられなば、汝に嘲らるべし。大將の道はかたるとも、汝が耳には入らじ。今は是までなりとて、物もいはず。

東照宮の御前へ三成を召出して、いかに武將もかゝる事むかしより有るためしなり、恥にあらずと仰せられしかば、三成けしき打ちとけて、唯天運のしからしむる處にて候。とう〳〵首をはねられ候へと申す。東照宮、三成はさすがに大將の器量なりける事なりといへども聞入れず。三成秀詮を見て、われ汝が二心あるを知ざりしは愚なり。されども約るともいへり。又一説、中納言秀詮石田が體を見ばやとて座を立たれしに、細川忠興何でふ益なきにたがひ義をすてゝ人を欺き、裏切したるは、武將の恥辱末の世までも語り傳へて笑ふべしと云ひけるに、秀詮詞なかりけり。又三成大津にいたる時、御本陣の門外に壘をしき、其上に坐したりしに、諸將打過ぎけるが、福島正則無益の亂を起して其有樣なりといはれしに、石田おのれを生どりて

縛らざりしは、天運なりと云ひければ、正則詞なく過ぎられぬ。黒田長政通られしに、馬より下りて不幸にてかくなり給ひぬ、是をとて著られし羽織をぬいで著せられたりといへり。

石田を始め小西安國寺生どられ、三人の肌に木綿のやぶれたるものを著たるを、東照宮聞し召し、石田は日本の政務を取りたる者なり、小西も宇土の城主なり、安國寺またいやしむべき者にあらず。軍敗れて身の置處なき姿となるも、大將の盛衰は古今に珍しからず。命をみだりに棄てざるは將の心とする所、和漢其ためし多し。更に恥辱にあらず。其まゝ京中をわたしなば將たる者に恥をあたふる事、吾恥なるべしと仰せ有りて、三人に小袖を賜りけり。石田に見すれば、これはたがあたへたるぞと問ふ。江戸の上樣よりといへば、それは誰事ぞといふ。德川殿と答ふれば、三成、何德川殿を尊ぶべきとて、一言の禮に及ばず、あざ笑ひて居たりけり。

小西は敵對の吾にこれまでのいたはり、心に恥ぢたりとて涙を落しけり。安國寺はとかくいはで、赤面し俯き居たりけるとぞ。三成を誅する時、車に載せて六條河原に出すに、石田顏色平生の如くなりしとかや。又石田治部が天下を取つたと云ひけるを聞きて打笑ひ、われ大軍を率ゐ、天下わけ目の軍しけることは、天地やぶれざる間はかくれあらじ。ちつとも心にはづる事なきよ。はやさずしてもありなんといひけるとぞ。

小幡助六郎忠死の事

小幡助六郎信世は上野介信繁が三男にて上野の人なり。十五歳にて大阪に赴き、諸家の體を見るに、石田は太閤無二の寵臣なれば仕へけり。後祿二千石をあたへけり。關ヶ原にて三成敗北の時、おし隔てられ三成に從はず。そこを切りぬけて三成が行方を尋ね、江州石山に來りしを、鄕民からめとりて大津に參る。百姓をば賞せられて、金二十枚を賜はりぬ。さて信世を召出され石田が行へをとはせ給ふ。信世承り三成が士小幡助六と申す者にて候。主の在所よく知りて候。然れども年頃恩を請けたる身の今日の難をのがれん爲に、主の在所を申す不義や候。たとへ骨をひしがるゝともかたく申すまじきにて候。試に拷問あれと申し切りてけり。東照宮聞し召し、忠義の士なり、三成が行方ゆめ〳〵知りたるにあらず、しらざる故にこそ落行きてからめられたれ。士ほどの者を拷問に及ぶべからず。將たる人は、忠臣義士に不憫をこそ加へめ、とく繩をとけと仰せ有りて、則赦させ給ひけり。信世近きあたりの寺に行き、其由こま〳〵と語り、おもはざる外に赦を蒙りたれども、亦恥にあはんも計り難し、屍をかくし給はれとて、自害しけるを、大津に申上げければ、殊の外にをしませ給ひけり。

河村權七郎が事

關ヶ原の亂の時、加藤嘉明の北の方大阪に在りしかば、河村權七郎を伊豫の松前より大阪にやりけるに、忍びて屋敷に至り、北の方に相見え、松前より長臣等がかはりとて參り候。若奪ひ取らんとせんともの臣かくてあらんほどは、危くな思し召され候ひそとて、屋敷の隅に井樓をあげ柵の木ゆひ敵にむかへ

るが如し。かなはぬ時は自害をすゝめ、臣も御供申すべしと云ひけるに、細川忠興の北の方、自害の後人質を奪ひ取る事止みたりけり。河村に二百石の祿を増興へられしに、後河村いひけるは、大阪川口の守り固く中々通るべき樣なきを、尼ヶ崎の漁夫をかたらひ船に乘網の中に身をひそめ、敵の中に入りて守りしは、必死を思ひ定めたる事なり。關ヶ原の軍に首取つたる者に同じからず。然るに恩賞の薄き事明らかならぬ殿なりとて、出奔しければ、嘉明怒りて探出して誅せばやと言はれしかば、ある山中にかくれ居たり。大阪の亂起りし時、嘉明江戸に殘しとゞめられ不慮の事あらば、取りまきて攻殺さんと合言へり。其比夜更けて河村嘉明の屋敷の門をたゝき、青木佐右衛門を呼出す。青木あやしみ立出て見るに河村なり。こはそもいかなる事ぞといふ。河村事あたらしきやうなれども、君に仕ふる者の忠を致すは常の習ひなり。然るに過ぎにし大阪の事に誇りて殿を嘲りて出奔しける事、後悔今さら益なし、十餘年山中にかくれ居しに、しか〳〵の事にて殿も危くおはしますと聞きて、夜を日に繼ぎて參りたりといへば、青木誠に義理の志はさる事なれども、殿のいかり甚しければ、かくと申したりともゆるされじ、とく歸られよといへば、河村臣たる者の義を知られなば、河村はなど來らざるやといはるべきに、門内にだに入れず、とく歸れとは口をしの詞よ。此上は町屋にかくれ居て、殿の先途を見んと云ひしかば、青木さらば先申して見んとて、内に入り嘉明に告ぐれば、それよび入れよとて、やがて寢所に召出されしが、一目見るより涙を流されしに、河村も涙にむせび、君臣しばし詞もなかりしが、河村おもひもよらず殿の御前に出づる事よ、今生の思ひ出に候と申す。嘉明汝が志いはんやうもなしと悅ばれけり。夜明けて、河村こそ來れとて下部までいひはやし、大軍の援有るが如くいさみけり。嘉明寵愛して、八千石あたへられけり。程なく病死しければ、奥州四十萬石になられし時、河村ながらへたらんにはと、國政の補佐たらんにとなげかれしとかや。

加藤清正の北の方大阪を忍び出でられし事

加藤清正の北の方も大阪に在りしを、石田人質にとらばやと云ふを聞きしかば、清正より付けられし竹田善兵衛家正、大木土佐恒持謀を廻らし、轉法口に居ける清正の舟奉行梶原助兵衛に山梔子の煎汁を飲ませ、四五夜ねふらせず疲れおとろへ、大病人のごとくなりしを、かごにのせ綿帽子かぶらせ前後に衾かさね、門番の前にて戸を開き、斷りて屋敷にゆく事度々に及べり。後は見なれて更に咎めず。又川口にて蜆蚫船を晩ごとにこぎくらべをさせてけり。是も番船見なれて後は、いづれは早きおそきなどいひて守おこたりぬ。かゝる處に清正より、吾は石田に與すべきやうなし、いかにもして北の方を敵にわたさずして落せよかしと云ひ來りければ、大木たくみつる事にてはあり、北の方に此由を告げて梶原が衾の下に北の方をおしかくし、其上にもたれかゝりて、毎の如く、かごの戸をひらき門番の前を通りけり。土佐も後より供して若見咎められなば、北の方を刺殺し、切死にすべしと思ひたれども、事故なければ、轉法口に行きて頓て蜆蚫船に乘せこぎ出し、番船の前をつと行過ぎて二三町に

もなりければ、あれはいかにとさわぎひしめく間に、烏の飛ぶが如く一里あまりもこぎのびぬ。番船どもたばかられたるよとて、碇をあげ追付かんとせし間に行過ぎて、遂に肥後に下り著きぬ。大木竹田は、大阪に居殘りて、此事洩聞え、打手來らば思ふほど戰はんと待懸けしに、關が原の軍やぶれしかば思はざるに難をのがれけり。大木もと佐々成政に仕へ、後清正に仕へ、才略篤實兼備へしものなれば、清正寵愛厚かりしに、今度の事によりて、又二千石の祿を增しあたへられしとなり。

淺井畷合戰前田丹羽の將士功名の事附松平久兵衛軍學鍛錬の事

前田利長の士松平久兵衛、若き頃より兵書を讀み、一飯の間も懈らず。常に人に語りて云く、此一人に對するわざにあらず、萬人を一刀に斬るの道なりといへり。利長大聖寺の城を攻落し引返す時、利長の士大將山崎長門守淺井畷よりせんと云ふ。久兵衛道細く左右深田なれば、大軍の進退いかゞ有るべき、半退きたらん時、長重兵を出さば進退共にかなひがたかるべし。敵は案内者なり、必定味方利候はじといへども、山崎聞も入れず。既に大聖寺を攻落し、大軍なれば敵は攻められざるをよきにして、いかでか討つて出づべき。若軍を出さば、おしつゝみ一人も餘さず討取るべしといへば、久兵衛長重は勇將なり。大聖寺の後詰におくれ、口をしく思ひて打出でんに、其鋒日比に倍せん。吾は怠り敵其虛をうたば。危き事に候。又誰にもあれ、吾城を馬の蹄に蹴ちらして過行く敵に、箭の一筋も射懸けずしてかゞまり居る者や候べき。明日の軍陣をみだされ候な。わが敵を恐れぬ證は、あす人々に知らせんものをと云ひけり。其夜物主皆張番を出す。山崎打巡り見て、久兵衛が足輕は何故に味方近くに置きたるやといふ。久兵衛聞きもあへず、勝敗の理をしらず、敵を侮り勇にほこりて、利害にくらき身の士を下知する事こそうたてけれといへば、山崎聞きて敵を恐れてしかしたるならんと罵りしを、かたへよりせんなきあらそひよと留めけり。久兵衛いよ〳〵憤りて、強敵にあたりて目を驚かさん物をと定めて居たりけり。

其夜長重は、士大將を集め、江口三郎左衛門を大將として、夜がけせんとなりしに、俄に大雨にて風烈しく夜討を止められしかば、江口風雨は夜討に好む所なりといへば、人々皆尤と申しけるに、長重いや〳〵御幸塚の左右沼にて人馬のかけ引心にまかせじ。明日敵引取る時、追詰めて思ひの儘に討勝つべしと云はれしとなり。

長重の士大將江口三郎左衛門正良惣がまへより見渡せば、敵段々に引退く。時こそよけれと、兵を出しおし行く敵を喰留めんと鐵砲を打ちかくる。長重もやがて兵をすゝめらる。

又一說、長重鐵砲の音を聞き、後れな者どもとて、馬に鐙を合せて馳付けられしかば、江口振顧みて今に初めぬ此殿の早わざ哉と悅びけり。長重われ淺井山を取りきり、敵の頭上より打すくめなば、楯をつかする事あらじと云はれしかば、江口尤然るべしとて、あとよりつゞきたる兵三百人を引具し、淺井山にのぼり、敵を目の下に見下して、鐵砲を打ちかけゝれば、阪井與右衛門直吉も馳來る。長重

いよ〳〵競ひかゝりて、一足も前にすゝめ、一寸も退くべからずと下知せられけり。金澤の軍をやみなき終夜の雨に、かりの陣屋もあらざれば、物具皆濡れとほり、鐵砲の銃口に水入り火繩もふりけされ、左右は泥なり、多くははいだて樣のものをなげ入れ、足だまりとせしといへり。

金澤の殿、長九郎左衛門連龍が陣色めくを見て、江口麾を取り、かゝれと下知すれば、松村孫三郎馬を乘出し、敵の陣の中を乘切つたり。荒田五兵衛つゞいて馬を入る。

松村は五か所痛手負ひ、馬より落ちけるを、小池新兵衛松村を馬にのせ引取らせしとなり。

長父子ふみ止まり、こゝを專途と戰ひけるが、討たるゝ者多し。長好連ことし十八歳手の者あまた討たせ、敵の中にかけ入りて、討死せんとせしを、横田久右衛門馬の口に取付き引返す。長重の軍勝に乘り餘さじと追詰めたり。太田但馬は殿の陣に軍ありと聞き、兵を返して馳來る。水越縫殿介山城橋において槍を提げ敵に向ふ。松平久兵衛は太田が陣にて足輕を下知して居たりしが、銀にて飾りたる冑を著、黑き物具にて、馬を駈けよせ來り、馬を乘りはなし水越が前につと進出でて、小松の士拜郷治大夫と槍を合せしかば、水越もつゞいて安孫子作大夫と槍を合す。

一說、松平は不破杢兵衛と槍を合すともいへり。

爰にて雙方手負ひ討たるゝ者多し。互に精力盡きて相引にひき退いて、もの別れせしなり。後に利長二人の前後を問はれしに、久兵衛申しけるは、縫殿介は初よりふみ止り候へば、一番誰か爭ふべきと申す。縫殿介は久兵衛敵に槍を合せし事はやく候へば、一番に候と申す。利長聞きて武功は猶及ぶ者あらん。かく讓る志萬人にもこえたりとて、一番を松平に定められ、共に感狀あたへられぬ。松平此時祿五百石、後三萬石を賜りて伯耆といひけり。

一說、松平を松原に作る、何れか是なる事をしらず。一說に、此日金澤の士七人槍を合せける。中にも、岩田傳左衛門、小松方の手負ひたるを首をとらんとせしに、松平久兵衛岩田今日晴なる槍を合せ、其上にひろひ首、何にかせんといひしかば、岩田尤なりとて、同時に引取りしとなり。後に岩田が曰く、首を取て大音あげ、岩田傳左衛門槍を合せ、又首を取つたり。引取口の殿と呼はらば一芝居にて三度の功名なるべきに、松平が物し故、己が下知につけて引取らせしとて、後に悔みけるとなり。岩田後に内藏介と稱す。又利長淺井にて槍合せし士に感狀あたへられし由、小松に聞えしかば、小松の士共、殿にも御感狀下し給はらんやと云ひけるを、長重淺井曰は道細く左右深泥にてかけ引自由ならず、勝敗定かならざるはことわりなれども、退く敵を追詰め、橋の彼方にてせり合をはじめ、橋のこなたにてもの別れせしかば、引取敵に少しながらも追返されたるに似たれば、人人武勇の働はさる事なれども、感狀はあたふるに及ばずといはれけり。

山田勘六郎討死の事

利長の兵山田勘六郎は、十四歳にて父の仇を討ちたる人なり。ある日利長拏藏の戸を開くとて、山田

に鎗をあづけられし故、急ぎ來れと呼ばれしにおそかりければ、怒つて持つたる杖にて突かれしに、思はざるに額に中りて血流る。跪きて平伏せしに、脇差の鞘走りければ、手むかひもするやとて、たたみかけて杖にて打たんとせられしを、かたへより、山田を引きのけたり。山田此より病と稱して引こもり居たりしに、關ヶ原の亂起りて、利長大聖寺の城を攻むる時、一段高き所に打上り、武者おしを見物せらる。山田五六十人計引具し、けふを最後と出でたちて押通り、城につくと先がけして一番に乘込み、槍にて乳の下を突きとほされ、痛手なれば堞の下におつる。かねて從者にいひふくめしかば、息絶えざる内に、利長の前に舁來る。利長見て後悔せらるゝ事甚しく、其あやまちを懇にことわりて涙を流さる。山田やがて死にけり、行年二十歳。世にすぐれたる美男なりしが、大剛のはたらきして討死しけり。其前日したしき朋友に、奇南香をわかち贈りしを、其頃大聖寺きやらといひてもてはやしたりといへり。

黑田如水凶相の馬に乘られし事

黑田孝隆入道如水關ヶ原亂の時、九州を打平げられしに、乘られし馬は二寸計の黑き馬なるが、百會に手負といふ旋毛あり。如水此馬を指ざして、われ此凶相をしらざるにあらざれども、人は萬物の靈なりと聞きたり。人に勝つべき萬物なし。吾不道ならば、凶相是より大なるはなし。此馬の毛きずにかゝはらずと云はれしとぞ。

黑田大友石垣原合戰の事

關ヶ原亂の時、大友義統木付の城を攻むると聞きて、如水後卷せられしかば、大友立石に引退き、石垣原に先陣をおし出す。黑田の士大將久野治右衞門歳わかしとて、曾我部五左衞門を添へられしが、敵四五千計立石の民家を後にあて、待ちかけたるを、久野遙に見て、金の天衞のさし物さし、栗毛なる馬に乘り、かゝれと下知しけるを、曾我部今しばし待たれよ、はやらば勝利候まじ。おり立ちて馬に息つがせ、一同にわりごつかはせ、後に味方のつゞかん時衝きかゝり一戰すべしといへども、聞き入れず。久野が從者荒卷軍兵衞といふ者、豐前の地士なりしが、若き時宮松といひて十五歳より功名せし剛の者、五右衞門が詞尤なり、馬にあて倒し蹴ちらすと申すは敵によるべし。けふの敵は國替の時よくしりたる者にて皆物しなり。近年落ちぶれて此亂を死すべき時節と思ひ定め、槍を膝の上におき、しづまりゐたる所へ、一騎二騎ばら〳〵とかけ合はせんに、いかで勝べきや。槍をつき折るほどの軍ならでは叶ふべからずとて、馬より飛下り、久野が馬の口に取付き、わか氣ながら除りのはやりやうにこそ候へ、後陣に先をこさればこそ恥ならめ、後におし詰めん時に懸りてつき崩すべしと云ひけるに、平田彦右衞門といふもの、馬に乘りながら、いや〳〵後陣をまたんとせば井上野村すゝどき男なれば、必先を爭ふべし。大友が者ども木付にて疲れ又爰に來りたり。すゝめ〳〵といひければ、荒卷怒つて、平田汝と共に豐前の者なるが、度々手なみは知たるよ。今井の濱の軍に汝を追つかけて、

具足の押付切つたりし疵は有るべきに、其後四兵衛（治右衛門が父）汝を呼出すとて問はれし時、汝がけなげさに討ちとめざりきといひつる故に、祿を得しかば、わが蔭と悦びしは忘れたるかといひすて、馬に乘り先がけすれば、二十騎計つゞいたるを、おしつめてかゝりけり。敵三手に分れたるを、一陣を突崩す。久野はやりたる者なれば、少もためらはず、一文字に乘込み戰ひけれども、大友が兵ども度々の事になれ、今度の亂れに故主の招きに從ひ、けふを限りと芝居にひたと折しき待ちかけたれば、久野主從五騎一所にて討たれけり。曾我部は久野が討たれたる所に横あひにかけ入りて討死す。平田は久野が討たるゝを見て、馬を引返して引退きぬ。荒卷は敵競ひ掛るを見て、いざ引かんとて、人數を集むるに、敵嚴しう進むを見て、首をば皆捨てさせ、馬に輪を懸けて引きさがり、後殿して引退きけるが、久野が討死を知らざりし故、其日の功名いたづらに成りにけり。黑田の二陣の士大將井上九郎右衛門元房（後に周防と云）野村市右衛門（後半人といふ）遙に跡にて関の聲を聞き、此山に上りて敵の軍立を見招くべしと、井上手の者に下知し進み行く。野村先に軍あるは分明なり、何見わくる事の有るべきといへども、井上が陣おしかためて通さゞれば、今少し先に押出されよ、廣き所にて陣せんといへども、聞入ざれば、獨言して怒りける所に、井上主從三騎小山に乘りあげ、さし物をぬいて味方をまねき陣をすゝめけり。

井上唐冠の冑烏毛の棒のさし物したりといへり。又佩楯を取て捨てければ、井上が手の者すはやはげしき軍よといさめるとなり。

井上野村敵は皆かちだちなり。馬のかけ場をたのむとも、必死の敵にかろ〳〵しくかゝりがたしとて、皆馬よりおり立ち、勝に乘つたる敵にて、殊に譜代重恩の士ども、けふを限と思ひ定めたるなれば、敵かゝるとも相がかりすべからず。待軍して突崩したりとも、足を亂して追べからずと下知し、しづしづとおしかゝる。大友が兵是を見て、まばらがけせば忽突崩さんと思ひしにたがひけり。野村は朝鮮にて漢南の軍に功名し、膝に手負行歩心に任せざれば、片はものにて候ほどに、馬に乘り候 というて下知しけり。石垣原は原の中に高さ一丈餘の石垣土手六七町計もつゞきてけり。井上野村あの石垣をこなたに取らば軍に勝べしと進みければ、敵も同く進んで石垣を踰んとせしを、つき崩したれども、北ぐるを追はず。井上槍を横たへ押しとゞめ、野村は馬を乘廻し兵を整へたり。大友の士大將吉弘加兵衛宗像掃部是を見て、かくては味方まけ軍なるべし。敵勝に乘て足を亂さん所を追立んと思ひしに力なし。とても討死せんと思ひ定めたれば、いざかゝらんとて、二千計しづ〳〵と歩みよる。井上野村是を見て少しもさわがず、折敷て相がかりにもせず待懸けたり。間近く詰寄せて、散々に突合ひ切合ひて、大友勢一町計引退きけれども追もかからず、もとの芝居に跪きて、心靜に息をつぐ。大友勢又押懸りて爰をせんどと火を散して戰ひけり。吉弘は尖眉刀を打ふり、けふを最後とふるまひけるを、井上見て、いざ參りあはんと詞をかくれば、吉弘打笑ひ渡し合はせしが、草摺のはづれを十文字

の槍につかせて、深手なれば少ししさりけるを、小栗治右衛門が徒者弓を持ちたるが、眞中を射つらぬく。吉弘心猛しといへども、終に叶はで首をば小栗取りてけり。

又一説に、吉弘は黑革にてをどしたる甲を著、熊毛にてしころを飾りたる冑にて、三尺計の刀を以て井上と馬上にて渡し合ひ、馬より突落されしが、脇指を拔いて手裏劍に打つ。井上が弓手の股に中る。其間に小栗引組んで吉弘が首を取るといへり。又一説に、吉弘と井上は吉弘一年中津に有りてしたしみ深かりしかば、此日井上に向て、珍しや一槍參らんというて突合ひしが、吉弘が胸板を二槍まで突きけれども、甲かたくて裏かゝず。井上吉弘が內冑を突きけるに、十文字の横手にて忍の緒を切り冑傾きて、目をふさぎければ、少ししさりける處を、吉弘が左の脇より下著の靑く出づるを目に懸けて、脇腹をつきたりしかば、吉弘遂に討たれしともいへり。又此軍場の後に吉弘が屬鬼あらはれ、ゆきゝの人に祟をなしける故、吉弘がゆかりの人石垣原のかたへ別府といふ所に、吉弘が屍を葬りてけり。別府清田濱田の百姓おこりをなやめば、米を供ふるに、忽ちおこりおちけり。吉弘が嫡子は清正に仕へ、二男は細川忠興に仕へしが、父のなき後を見んとて、別府に行きて其印の石を拜せしが、多く米を供ふるによりて、鳥の集りて糞にけがれしかば、今より武具をそなへたらば治し給へ、さなくば治し給はざれといひしが、是より米を供ふるにしるしなし。木刀を作り供ふればしるしありといへり。

宗像も井上が徒者大野掃右衛門と引組みたる處に、掃右衛門が弟休也と云ひし法師武者走りより、掃部が脇腹に刀を突立て、えいやとはねたりければ、遂にそこにて討たれけり。大友の勢突崩されてはさつと引き、又おしかゝり戰ひけれども、井上野村追つかけずもとの芝居に跪き、又かゝれば立あがり突きのけ、幾度といふ事をしらず。大友が勢終に打負けて殘すくなく討たれしかば、僅計になりて立石に引返す。義統力盡きて如水に降參せられけり。

三宅喜藏武勇の事

義統木付の城に向ふ時、細川忠興の士大將松井有吉加藤清正に加勢を乞ひたりければ、三宅喜藏をやられけり。三宅殿の先陣にて功名せんと思ひしに、他國に往きて城にかゞまりをらん事は存じも寄ざる事なりといふ。清正汝が武功ある故に、他國につかはしたりとも、吾名を汚さじと思ひ寄りたるに、己が名を貪るこそ心得ね、永く我家を去つて心まかせにせよといはれしかば、三宅そこを出でて庄林隼人にかくと告げ、殿の咎を蒙りたれど、殿ならで奉公せんと存ずる大將も候はず。あはれ隱し置きて給はらんやといひしかば、隼人心得たりと許しけり。清正宇土の城を攻むる時、三宅はあかぬの三本じなへの差物さし、夜半より鹽田口の堤に行きて明くるをまつ。宇土には南條元琢こもり居たり。此元琢は伯耆羽衣石の城主南條左衛門元次が二男にて、兄の元重に劣らぬ大剛の者なるが、毛利元就と軍する事度々に及びけるに、敵寄すると聞きて、只一騎馬上にて上帶しめてかけ出し、半里が程に、